
THE CENTRAL REVIEW
中央公論
第廿一年第二号

中央公論第二十一年第二號目次



第二十二年
第貳號
(二百三號)

新内閣の前途

桂内閣總辭職を爲し、西園寺侯一月七日を以て總理大臣に任ぜられ、同時に加藤高明氏は外務大臣に、原敬氏は内務大臣に、松田正久氏は司法大臣に、松岡康毅氏は農商務大臣に任ぜられ、而して陸軍大臣寺内正毅氏は留任し、齋藤實氏（海軍次官）は海軍大臣に、阪谷芳郎氏（大藏次官）は大藏大臣に、山縣伊三郎氏（内務次官）は遞信大臣に昇れり、文部大臣は西園寺侯兼任せるも、實は牧野伸顯氏（墺國駐在公使）任命せらるゝ筈なりといふ

桂伯が西園寺侯に辭職の決心を打明け、後繼内閣のことを托したるは去臘十二月十八日にして、侯は之を諾し、外務大臣小村男が北京より歸朝するを俟て公然授受を爲すべきを約したりき、世間此の事實を捉へて、政權授受の圓滿なるを賛するものあり、又其の曖昧なるを難ずるものあるも、畢竟形式に止まる、素より賞するにも足らず、又難ずるにも足らず、彼の伊藤侯すら曾て大隈板垣の兩伯を後任として推薦し、現の桂伯の如きまた侯と交渉を重ねて侯の推薦を受けたるものなればなり、伯が今西園寺侯を推薦したる亦唯だ斯の例に倣へるのみ

桂内閣の不人望なりし丈け西園寺内閣は人望あるが如し、蓋し新内閣は猶ほ新衣の如し、其の質必らずしも精好ならざるも、新衣を悅ぶは人の情也

適材を適處に置き、能く之を統一して多くの強味を有するものは最良の内閣也、政黨内閣といひ、藩閥内閣といふが如きは畢竟無意義に屬す、故に首相にして明識あり、勇氣あり、果斷あり、思慮ありて能く閣臣を統一し、而して閣臣各々其の處任に特能あるを譬へ

ば露國の鐵道大臣ヒルコツフ公の如くならば（公は鐵道火夫より機關長に累進し、鐵道に特別の技能あり、日露戰役中西伯利亞鐵道の利用に大功ありしことは中外に認めらるゝ所なり）是れ幾んど最良の內閣なるべし、熟〻西園寺內閣を視るに、寺內氏の陸軍に於ける、齋藤氏の海軍に於ける、阪谷氏の大藏に於ける、加藤氏の外務に於ける、各々特別の技能あり、陸海軍大臣にして能く西園寺氏の節度に遵ひ、而して阪谷氏にして十分大臣たる資望あらば、是れ西園寺內閣の長所たらざる可らず

其の勢力幾んど首相を凌するの偉材を內閣に置くは、內閣に取て一種の强味なるに相違なきも、危險また茲に存することを知らざる可らず、バルフォア氏內閣に於けるチエムバーレン氏は其の好適例なり、新內閣の中、比較的に勢力家と認めらるゝは恐らくば、加藤高明氏なるべし、氏のある、西園寺內閣に取て聊か强味なり、而かも新內閣の危險は、陸海軍を除かば恐らくば加藤氏ならざる可らず、何を以て之を言ふや、氏の政見往々他と相容れざるものあり、而して氏は漫りに其の主張を放棄して他と苟合するものに非ざれば也

加藤氏は小村男の外交を嫉み、之を陷れんとしたること三び、頗ぶる桂伯等に悅ばれざりき、加藤氏が其の東京日々新聞に於てポーツマス談判を攻擊し、日英同盟の韓國に關する明文を非難し、且つ北京談判を論駁したるが如き、嫉惡の情紙筆の外に溢るゝものありき、此の點よりいへば伊藤侯等と同じく講和條約を是認したる西園寺侯と加藤氏とは、其の外交意見に於て頗ぶる相容れざるものありと視做さゞる可らず、但だ日露條約、日清條約、日英條約は旣に成文たり、奈何ともす可らずとして加藤氏能く西園寺侯と相合ふこと難からざるべし、獨り加藤氏が同じ日々新聞を以て盛んに桂內閣を攻擊したる國債償却基金の設定、外債募集、商工保護に反對の諸主張は、果して新內閣の閣臣と一致するを得べきや否や、新大藏大臣阪谷氏は、國債償却基金制の立案者にして西園寺侯また之を遂行することを約したりと傳へらる、農商務省また依然として商工保

護政策を執るが如くなれば、此の諸點に於て加藤氏先づ第一に衝突せざるを得ざるべし、加藤氏既に其の意見を新聞紙に發表して世間に言質を貽せり、今にして忘れたるが如く之を擲つと、斷じて加藤氏の面目に非ず、若し或は內閣の一致を保つがため、前說を棄てんか、新內閣の缺點を摘抉せんと待構ふるもの直ちに捉へて以て加藤氏を攻擊すべく、加藤氏の國務大臣たる威信或は大打擊を蒙むらん、若し加藤氏の說容れられん乎、少くも阪谷氏は大藏大臣の地位に安んじ得ざるや必せり、加藤氏素より新內閣に於ける一種の勢力家なるも、而かも衝突の危險は最も多く氏に在りと言はざる可らず

　寺內氏の留任せるは陸軍擴張のためにして山本權兵衞氏と異體同心なる齋藤氏の海軍大臣となれる、亦海軍擴張のために外ならずといふ。二氏の明敏にして時務を識れる、必らずしも法外の擴張案を提げて新內閣に逐行を迫るが如きと莫かるべし、然れども海陸軍の擴張は新內閣財政上の最大難關たり、是れ亦破綻の恐

ある所とす

　吾人は西園寺侯が一身を挺して戰後經營の難局に當りたるに同情を表す、而かも新內閣の前途容易に樂觀すべからざるを思はざるを得ざるのみ

日清條約を批評す

　小村男が全權となり、病軀を提げて自から北京に赴むき、彼國全權と協定したる日清條約は、尙ほ世間多くの新聞紙の非難を免かれず、然れども世論はまた外交上の智識の稀薄なるを自證して、其の愚を表するのみ、何ぞや

　日清條約の當否を論定するには、先づ我が滿洲に對する方針を定めて之を標準とせざる可らず、此の標準なくして單に彼の讓る所の多寡大小を論ずるは、猶ほ硬軟二端を以て外交巧拙の標準と做すが如く、餘りに單純に、餘りに淺薄に過ぐ

　夫れ對韓方針の一定せざりしは、日本政府（寧ろ日

本國民の總て）の大缺點にして、二十年來其の弊を受けし所以也、今や滿洲問題を解決せんとするに方つて、豫め其の方針を大定せずんは、其の弊や幾んど言ふに忍びざるものあらんとす、滿洲のため當面の淸廷と爭ひ、露國と爭ひ、甚だしきは米國又は獨逸と爭ふて、抗爭幾んど寧日なきに至るべし、是れ日本をして常に不定にして危險なる地位に陷らしむる所以ならずや

吾人の私見を以てすれば、滿洲處分の途大凡下の如し

第一、韓國に於ける我が保護權を確立し、列國をして片言隻句だも容喙せしめず、而して日韓兩國の障壁たる滿洲を安全ならしむるがため、滿洲を世界に開放し、列國の利害關係を滿洲に錯綜せしめ、以て露國の暴勢を遮斷する事

第二、滿洲人は我が日本人と同原同種にして、且つ豐饒の廣土あるを以て、之を領有する目的を立て、機會ある每に我が勢力を樹立する事

第三、滿洲を我が勢力範圍と限定し、一切の優先權を所有し、他年淸國分割の秋來らば、全然之を我が領土に收むる事

第二第三は其の實相同じ、唯だ暫らく其の形式を異にするのみ、吾人思ふに、小村男爵は其の第一を擇べるが如く、此の方針には桂内閣の全部は勿論、所謂元老の徒と雖も總て之に一致したるもの丶如し、日露條約に於て滿洲に於ける機會均等主義を主張し協約して、露國の獨占を擧げて排斥したるは其の明證なれば也、而して滿洲に於ける機會均等主義は日本が列國に聲明したる所にして、幾んど公約たる性質を有す、漫りに之と矛盾すべき方針を執り得ざるは自明の理なれば也

此の方針を是認すれば、小村男が全權として締結したる日淸條約は、多く非難すべきものには非ず、條約正文は、淸國をして日本が日露講和條約に於て露國より得たる一切の權利を承認せしめたる也、詳かにいへば、第一旅順大連の租借、第二寬城子（長春）以南の東淸鐵道本支線及び之に屬する一切の權利、第三撫順煙

臺の諸炭鑛採掘權等を承認せしめたる也、而して其の副條約に於て、齊々哈爾、哈爾賓、吉林を始め、凡そ全滿洲に於ける總ての要所を擧げて列國の貿易市場として開放せしめたるは、是れ列國の利害關係を滿洲に錯綜せしめんとするものにして、若し列國悉く此の市場を利用して滿洲を開發せば、露國は列國を排除するにあらずんば到底武力を以て滿洲を併呑するを得ざることとなるべし、鴨綠江に於ける伐木權を得、戰時日本軍の布設したる安東縣奉天間の鐵道を公認せしめ、滿洲に於ける日本の電信郵便を承認せしめたるは、共に世論の異議なき處にして、日露講和條約以外の所得に屬するものたり

唯だ新民屯奉天間並びに寬城子吉林間の鐵道布設權を承認せしめざりしことは、世上の論者が此の條約を罵る骨子たり、然れども暫らく虛心にして之を思へ

ポーツマス談判に於て、我れは露國が清廷より得たる寬城子吉林間の鐵道布設權を得たるやに傳へられしも、發表せられたる講和會議議事錄によれば、露國は未だ斯る特權を得たる證跡なく、隨つて日本に之を移讓したることなし、唯だ露軍が戰時中此の鐵道を布設したるや否やを調査して布設したる事實無きことを確かめ、且つ日本が茲に鐵道を布設するに對して露國異議なきことを約言せしに止まる、思ふに日本政府の意は露國をして將來茲に鐵道を布設せしめざるを以て滿足するに在るべし、吾人の聞く所によれば、此の間の鐵道は清國政府日清兩國の資本を以て之を布設するの內約ありといふ、吾人は先づ之に滿足せざる可らず、吉林寬城子間の鐵道素より必要なるに相違なきも、我れ資本の豐富なるにあらずして、强ひて自から之を布設する、必らずしも利益なりとす可らざればなり、況んや清國の官民今や利權回收を標榜して、銳意列國の特許したる鐵道布設權を取戾さんとする時に方つて、强ひて鐵道布設權を取得するも、其の實清國官民の意向に忤ふに過ぎざるが如き、亦外交上の能事と稱するを得ざるをや

奉天新民屯間の鐵道に至ては、清國曾て布設せんと

したるも露國之を肯んぜざりしもの也、蓋し露國の意は、此の鐵道若し成らば、北滿洲と支那本部との通商多く此の線路に由るを以て、東洋隨一の通商港たらしめんとする大連の繁榮を妨害すと做せる也、露國は遼河を東清鐵道に對する至惡なる競爭者と視、營口を大連に對する最大なる妨害者と做し、極力之を抑へて以て貨物を大連に吸取せんと謀りたりき、唯だ露軍は戰時中物資吸集の必要より奉天新民屯間の鐵道を速成して、支那本部より糧食軍需を購入し、而して日本軍之を占領するに及び、更らに多少の修繕を加へたるのみ、若し日本にして東清鐵道の利用を計り、併せて大連の繁華を期圖せば、或は露國の故智を襲ふの要あるも測る可らず、遑々焉として唯だ此の鐵道を取得するを以て榮譽と爲すが如き、吾人未だ全く其の可なる所以を知るを能はず

故に日清條約は大體に於て甚だしく非難するに足らず、之を非難するに寛城子吉林間並びに奉天新民屯間の鐵道布設權を得ざるを以てし、目して外交上の失敗と爲すが如きは寧ろ酷論のみ、些少の讓步を以て軟外交とし、軟外交を以て大失敗とし、また大體の方針、形勢の推移を測らざるが如きは、抑も淺薄の極にあらずや、斯の如き外交論あるは寧ろ我が國民の耻辱にあらずや

滿洲に於て憂慮すべきは、露國が其の內亂を鎭靜し、敗餘の損耗を回復して再び勢力を滿洲に張らざるや否や、列國が果して滿洲の新開市場十數ヶ所を開拓して、玆に深厚なる利害關係を生ずるに至るべきや否や、抑もまた此の二者孰れが早きかにあり、而して是れ我が外交の將來大に活動すべき所にして、且つ官民の將さに大に經營を要すべき點なりとす、眞に國事を思ふものゝ深く意を致さゞる可らざる也

男女學生交際論

登張竹風

吾輩は男女交際論よりも寧ろ男女交際論無用論を唱へ

たい。段々諸君子のお說を承つて見ると、槪して、男女交際は尙早である、家庭の改良が出來て、社會の道義が進步して、男女が交際しても、少しも危險がないやうになつたら、交際してもよからうとか、乃至また、男子と男子は交際しても利益があるが、若い男が若い女と交際するのは少しも益するところはないとか、いやはや、誠に理に於ては、お尤千萬な御議論で、感心敬服の外はありません、吾等また一言を加へることは出來ない、隨つて、この上に男女交際論を、未熟な吾輩が致すのは無用であると思ふ。なに是非何か言へ、困りましたなあ、宜しい、それては一つ思ひ切つて、また憎まれ口を叩きますかね。

吾輩の管見によると、以上の如き交際論では、目下盛んに交際しつゝある青年男女にも、また交際の可否に惑ひつゝあるこれからの青年男女にも、更に參考とするには足るまいと思ふ。何故かといふと、世間の男女が交際しつゝあり、また交際せんと欲するのは、交際の善惡や交際の利害て交際するのではなからう。交際したいといふのが彼等の本思本能、と云ひますと、すぐまた世間からは、殊に禿頭先生等からは、そりやまた竹風の本能かと叱られますか知れないが、しかし全くさうてはなからうか。おもしろいか、面白くないかといふ問題を外にしては、男女交際論は說けない。よからうが、惡るからうが、利にならうが害にならうが、そんなことに頓着するやうては、交際の眞味は一般に解せらるゝものではない。必ずしも男女の交際といはず、通常お互の交際でも、吾輩は善惡利害以外に、常におもしろいといふことを主眼とする、吾輩が他人と交るのは男女に限らず、相手が善人てあるから交際するのでもなければ、利益を目安にして交るのでもない、唯々面白いから交際するのだ。若し此點を閑却しては、交際の妙味の大半は失せてしまふだらうぢやないか。ところて、面白いといふことを主眼とするのが、交際の本意とすると、同性間の交際よりも、異性間の交際の方が遙に、面白いに極まつてるさ。この位の消息が分らない奴は、てんから、もう、男女交際論を吐く資

格はないさ。自分が男女交際を爲す必用――むしろ資格伎倆といひたいね――がないからといつて、青年男女の交際を嚴禁し、道學的に、野暮な議論を爲すほど、馬鹿々々しい話はあるものでないね。そこで、異性間の交際が面白いといふ點には、毛頭異議はないと致して、異性の交際が面白いといふ理由を尋ねて見ると、これには、同性間には見えざる戀愛の分子が加はるからだ。吾輩はつら〳〵思ふに、苟くも男女相集つておもしろく感ずる交際は、表面の目的は、いかやうに名づけてござつても、底の底を叩くと、戀愛の分子が加はらざるものは一つとしてあるものではない。猶ほうちくだいて、さばけて言つて見ると、お寺參りの青年男女、敎會に出入する青年男女、宗敎の信仰のといふのは、見えを張る狡猾手段で、一皮むいて本音をたゝくと、燃ゆるやうな青春の人たちが、相見て笑ひ、相語つて喜び、相坐して嬉しい思ひがするからの事だ。若しこれに反對する人があつたら、それは大僞善者だ、まさに三十棒を食はすべき大馬鹿といつてよろしい。

是の他音樂會でも、芝居でも、寄席でも、相識らぬながらも、男女共に坐すのは愉快なものだ、おもしろいものだ、うれしいものだ。西洋の交際は純潔で、立派て、さつぱりしてと、むやみに、西洋の男女交際を奇麗がつて、うぬぼれてる奴があるが、あれは、大法螺さ。大抵の事は、小說などを見れば分る事だ。近頃ある本を讀んだところが、かういふ事があつた、佛蘭西では、結婚前の女子は尼寺的敎育を受けるものだから、處女時代には、ロマンチッシュなことがないが、其代り詩的時代は、結婚後に始まる。獨逸では、處女時代がおもしろい交際時代で、結婚後はもうだめだと、かう書いてあつたが、なんと面白い話ではないか。事實日本なんかでも、そんな所が見えるよ、中島德藏先生なぞが御發起で、丁酉倫理會の家族會（始めは男女交際會と名けたものだ）をお催しになるところなぞは、どう見ても佛蘭西式で行つたものだ。それは、もう承るまでもなく、名にしおふ倫理會のお方々またその奧方樣たちのお寄合の事だから、中島先生の仰せらるゝ

通り、紳士さま淑女さま達の天晴れ結構なる御會合て居らつしやいましやうさ、横目もおつかひはなさるまいし、擧止閑雅て、話は高尙て、道學的て、倫理的て、キチンとして居らつしやるには違ひない。然しながら、ぢや、既に男女相集るといふ以上は、良人以外に、他の男子を見、細君以外に他の女を見るといふことは當然の結果であるから、この間に、同性間以上のあるものが、あるおもしろみがあるに違ひないことは、倫理會員てない野暮な吾輩にても分るね。そのあるおもしろみが即ち男女交際の妙味て、不可稱、不可說、不可思議のものさ。ところが、結婚後の交際にあつては、よしんば、戀愛の分子が暗々裡にひそんで居ても、そこは、體面を重んずる人々の事だから、不言不語で、眼が物を言ふほどの電光石火ですむのだが、若い男女にあつては、眼が物を言ふだけては、物足りない、口が物を言はなくてはならず、手と手が觸れなくてはならずといつたやうな道筋になるのがその生命であらう。この生命に向ては、よろしく若い人達が、自から處決し、自ら行ひ、自ら啓發する外はないだらうと思ふ。老人等の言ふことは、年が寄つて、しかたがないから、岡燒半分愚痴半分の寐言をいつて居るものと、思つたら宜しからふ。現に吾輩でも、若し十年若かつたら、花々しく交際場裡に打つて出たかも知れんよ、いや出たいね。三十以上になつては、もうためだ。若い時は二度はない。戀愛の味はこの時が一番面白いものだ。丁酉倫理會などに負けて、たまるものか、どし〳〵御交際なさるがよろしい。なに犧牲が出來る?。それは出來るさ、いかなるものにも、犧牲はある、犧牲を恐れて、何が出來るものか。男女交際萬歲、——さやうなら。（禁轉載）

編者曰、前號豫告に男女學生交際無用論とありしは男女學生交際論無用論のあやまりにつき之を訂正す

男女學生交際論は現下教育界の一大問題也本誌は每號大方諸大家の高論を紹介し、教育家及學生諸君の參考に資す。

▲二十年第九號（九月發行）……竹越與三郞氏

▲二十年第十號（十月發行）……三宅雄次郞氏

▲二十年第十一號（十一月發行二百號）……安部磯雄氏

右は既に掲載せり、本號の登張竹風氏が所論と併せ讀まば更に得る處多かるべしと信ず。

西園寺内閣と言論の自由

法學博士　寺尾亨

目下西園寺侯が總理大臣として又内閣の主義として言論の自由に就て如何なる方針を執つて居らるゝかと云ふことは、今日まだ其所説を確めた譯でないから之を知ることは出來ないのである、併し從來西園寺侯の性行並に其執られた蹟に依て察するに、侯は元來餘程進歩したる思想を持つて、其性行も極めて高潔にして瀟灑たる人であつて、普通の俗人とは遙に立超つて居る人であるから、其主義としては完全なる言論の自由と云ふことを持つて居られるに相違ない、尤も凡そ自由と云ひ權利と云ふものに絕對無限と云ふものはないのであつて、恰も吾人の權利は一國の社會に居る以上は社會の他の個人の權利又は社會の公益の爲に制限せられると同しく、一國の社會に居る個人の言論の自由も自から制限を受くべきものであつて、絕對的の言論自由と云ふものは有るべきの理はないのである、故に苟くも社會の安寧秩序を害しない限に於て、又其法律規則の禁せさる範圍に於ては、成るべく廣き程度に於ける言論の自由を認められると云ふことは吾輩の深く信ずる所である、それは何に依て之を云ふかと云ふに、曾て西園寺侯が自ら執られた言動又は曾て吾輩に對して執られた處置等に依ても之を證するに足るのである、今能く其年月と巨細の事實とは記憶しないが、明治十幾年の頃侯が歐羅巴から歸朝されたる際に於ては、今其雜誌の名は記憶しないが、當時最も自由なる主義を執つて居つた雜誌に筆を執られて、殊に一時は之が主筆の如くして、當時極めて進歩せざりし社會の

主動者となつて大に自由なる言論を試みられたことがある、侯は貴族の身殊に經歷ある名門であつて、當時の民間黨と目さるべき言動をなされた爲め、貴族社會及び政府の方面に於ては頗る物議を生したやうてある、併し之に拘らす、久しく其主張を維持せられて頑として動かれなかつたことがある、後には何かの都合に依て之を廢められたやうであるけれども、其主義を敢て變せられたものとは考へられない、之に依ても其元來の主義を見るに足るのである、以上のことは世間の人も能く知つて居る事てある。

其外吾輩に特別なる關係に付て吾輩も之を知つて居ることがある、それは今日に於ては世間の記憶からも少し遠さかつて居る事てあるが、明治二十八年中に日清戰役の結果として我邦が臺灣の割讓を受けて之が統治の實を擧けむとする際に、臺灣に於て劉永福が我軍に敵對した末遂に彼が屈して清國の內地に逃走する際に生した事件てあつて、テーユス號事件と稱して一時外交上の問題となつたことである、其事實は英國の汽船のテーユス號が劉永福を乘せて之を清國の內地即ち對岸の厦門に輸送したに付て、我邦の巡洋艦八重山が之を追跡して該號を厦門の前面に於ける黃海て停船を命して臨檢搜査を爲した爲め、不法の處置てあるとして英國政府から國際談判を持出されて、其局我政府が不法の處置てあつたとして謝罪的の行爲を爲した事實がある、之が爲には當時の八重山艦長平山藤三郎は職を退き爾來商船學校に力を用ひられて居るやうな有樣であり、又當時の司令官有地中將も以來職を廢めたと云ふが如き結果を生したのてある、て吾輩當時歸朝の砌てあつて其事件の遂行せられた後に之を知つたのてあるが、我軍艦の行爲は不法てないと考へて、之に就て種々取調を爲し大に不服を唱へた、之が爲には長い論文をも草し又東邦協會の講談會に於て長々しき講談をも試みたのてある、て當時西園寺侯が恰も文部大臣であつて且つ外務大臣を兼任して居られた、故に面の當り其議論を爲したこともあるが、既成の事實てあつて奈何ともすることが出來なかつた、併し將來の爲もあ

るからして、殊に之が爲に自説を公にすることにしたのであるが、其公にすることに付て所屬長官である侯が之を許されなければ已むを得ないこととして、書面を以て之を通告したが更に異議を云はれぬて、我欲する所に任せられたやうな雅量を示された、當時は今日とは違つてまだ一般に言論の自由等に付ては進步しなかつた時代であるに拘らず、吾輩が政府の外交的處分を攻擊することに付て然も侯は外務大臣であり且つ吾輩の所屬長官たる文部大臣でありながら之を放任して置かれたのは吾輩の大に其雅量に敬服した所である、是等の點を以てしても侯が言論の自由に重きを置かれて瑣々たる小刀細工を以て之を壓服しやうと云ふ如きは毛頭侯の心頭に存せないものであると云ふことを知るに足るのである、隨つて益々進步したる今日、而も政黨の總裁であつて縱しや内閣の首相となられたのは政友會總裁の資格でなかつたとしても其平生の主義又其行動よりして言論自由の如きは出來得る限り寛大にせらるゝものと結論することが出來るのである

戰捷國民の任務

文學博士　三上參次
（文責在記者）

日露戰役の結果として、我國民は諸種の責任と負擔とを餘儀なくせられたるは今更いふに及ばざることなれども、就中外に向つては來るべき二種の戰爭、内に向ては島國と半島國との融和統一について重大の任務を有するに至りたるを忘るべからざるなり。

外に對しての二種の戰爭とは、即ち武器を執つての戰爭と平和の戰爭と是れなり。武器を執つての戰爭とは大陸地方に於て將來或方面に或衝突を來すべき場合を豫想するなり。彼の元の忽必烈は弘安四年の大敗の後尙數回の復讐を企てたり、露國政府果して元の古を學ぶや否やは素より明かならず、又外交上の妙手腕によつて、昨日の寇敵今日忽ち手を握るといふ如き運

に至るやも知れず、是れ素より希望すべきことなりと雖も、回顧すれば彼の二十七八年戰役の後我國民は臥薪嘗膽の四字を服膺せり、露國も亦方に之に相當する格言を遵守すべし。露國大なりと雖も、其久しく輕蔑し來りたる日本の爲めに大打擊を蒙り、外、世界列强よりは鼎の輕重を問はれ、內、國民全體の不平不統一を來せしことに思ひ至らば、必らずや日本を怨むの情に堪へざるべし。國土大なりと雖も其國民の胸中には復讐心を忘るゝ程の雅量あらざるべく、國民或は此雅量ありとするも、少くとも彼政府にはかゝる雅量あるべくも思はれず、されば露國が一度我に向て其怨を報ぜんとする、殆んど覩易きの道理なりといふべし、假令露國との將來の衝突は或人々の思ふが如く之れあらざるべしとするも、然れども或其他の大國と大陸に於て衝突することは先づ之れあるものと覺悟せざるべからず、況や外字新聞の中に於ても、講和は稍々長時期の休戰なりと評するものありしをや、兎に角或將來の戰爭を豫期することは必要なりとせざるべからず」

扨其戰爭については如何なる覺悟を要するかといふに、已に今回の戰爭すら軍艦、砲臺、銃砲、電信、電話、輕氣球其他あらゆる文明の利器を利用しての戰爭なりしにより、將來の戰爭に於てはいよ〳〵科學の力を應用せざるべからず。即ち敎育諸般の學科の中にて理科、工科、醫科等に屬する學科は最も此點に向つて奬勵せられざるべからず。又戰捷の要素としてかゝる文明の利器以外に國民の不屈不撓の精神と、君國の爲めには身命財產を抛ちて顧みずといふ精神を旺盛にせざるべからざることも今回の戰爭に於て證明せられたるにより、今後歷史、國語、修身等の文科に屬する學科に於ては此點についての注意を一層盛ならしめざるべからず、已に此精神あり、又彼の文明の利器あり、之に加ふるに理科工科農科等の學科に待つ所の殖產與業を盛ならしめ、以て國富の程度を高くし置けば所謂眞に富國强兵にて、武器を執ての戰爭の用意としては先づ安心なりといふて可なり」

戰勝國の國民は動もすれば驕泰に流れ、風俗を壞り、

遂に國民の元氣を沮喪せしむることあるは彼の羅馬の歴史を初めとして其他にも例の少からぬことゝす、我國も清國に勝ち、又露國に勝ちたり、一面より見ればかゝる心配あるに似たるも、而かも講和談判の不十分なる結果は、幸にも國民の驕泰心を戒むる材料となれり、故に講和談判の不十分については將來禍を轉じて福となすの覺悟なかるべからず、世人或は元祿風の流行等を見て、甚しく世上の有樣を悲觀するものあれども、衣服器物等に澁きものを好む時代の過ぎ去れば、之に次て華やかなる時代來り、華やかなる時代去れば、又之に代つて次の時代來り、終始轉々變化するは人事の常にして、毫も怪しむに足るものなし、只國民の精神は上述の如き準備を怠らず、所謂治に居て亂を忘れずの語を服膺し、而して何處までも進取的の心を鞏固にし、絶えて退嬰卑屈の精神に陷らざる樣勉めざるべからず。彼の羅馬はライン河、ダニューブ河を境として自ら守るといふ氣風となりし以來、其國力漸次衰へたるが如く見ゆ、國民深く玆に鑑みる處あらざれば、文明は進み、羅馬語は普及し、羅馬法は弘く行はれ、羅馬風俗は盛んに他邦に模倣せらるゝに至つて、却つて、其本元たる羅馬人の元氣は衰へ、其勢力は下り坂に向ひたりといふ覆轍を踏まざるべからず、我國民たるもの此點に特に注意を要す」

平和の戰爭に於ては尙一層心せざるべからず。武器を執つての戰爭には或は同盟國あり、同盟國といふ能はざるも同情國と名くべきあり、英米の我に於けるが如し。然れども平和の戰爭に於ては全世界皆我敵にして同盟國あるなく、同情國あるなし。英米と雖も亦我敵なり。されば學術技藝に從事するものは學術技藝に於て、運輸貿易に從事するものは運輸貿易に於て、殖產興業に從事するものは殖產興業に於て、各々十二分の覺悟を以て世界の强國と競爭せざるべからず。戰役中各小學校の生徒が紀念のために諸種の苗木を植ゑ附けたるが如きは實に國家百年の大計にして、此等の苗木の他日棟梁の材となるの時、之を植ゑ附けたる兒童も亦有爲活潑なる國民となるべきを思へば、かゝる事

柄を見聞する毎に漫ろに嬉し涙に咽ばざるを得ざるなり。國民は總て此心懸を以て各種の方面に注意せざるべからず。蓋し我國民の對外思想を見るに、彼の戰國の頃より德川氏の鎖國主義を執るに至るまでの間は實に對外氣象に富み、極めて活潑なる思想を有せしことは歷史の證明する所なり、今後の我國民は此時代の氣象を直ちに引受けたる覺悟を以て愈々此方面に向はざるべからず。昔の人の語に染物屋と鍛冶屋を三年營まば立身出世すべしといへり、其意は夏は鍛冶屋、冬は染物屋をなし、寒熱に辛棒して勞働すべしとの意なり、かゝる心懸あらば、萬事なすべからざるなし、此言葉の如き獨り戰爭中のみならず、戰後に於て最も服膺すべきものなりと考ふ。

次に內に向つて島國と半島國との融和統一といふ點は大に心すべきこととす。韓國は已に我保護國となり、統監府は設置せられ、伊藤侯自ら其局に當らるゝ以上は必ず其成績の見るべきものあらんを信ず。然れども島國にして領土を大陸に有するは歷史上より見て、隨分の困難といはざるべからず。素より今日と古代と人智の進步に差あり、又天下の形勢も異なれり、必ずしも古を以て今を憂ふるに及ばざるべし、而かも尙歷史上の事實は百年千年を隔てゝも屢々繰り返さるゝこと珍らしからず、故に今少しく此點について述ぶべし。彼の英國が海峽を隔てゝ佛國のノルマンヂー地方を領有せし時代には英國は始終干戈を事として殆んど其始末に窮し、終に之を手放すに至れり。是れ英國にとつては頗る惜しむべき事といふべし、然れども彼のマコーレー卿は其英國史に於て此事件を評して曰く、大陸の領地を失ひしは惜むべしと雖も英國民としての統一は之がために大なる便益を受けたり、國內に於ける異種族の融和是に於て初めて成り、英國の國家もこゝに於て初めて形造られ、概して英國民の基礎こゝに於て初めて堅くなれりと。我國の現狀は當時の英國と其事情を異にするものあれば、かゝる心配は萬々なかるべしと雖も尙大陸地方の領地については注意を怠るべからず。韓國は元我國と同一の境域に屬し、次て神功皇

后の之を征服せられし以來久しく我國に服屬したるものなり。然れども叛服常なく、叛けば則ち討たざるべからず、貢を缺けば則ち責めざるべからず、遂に之を所有すること却て之を所有せざるの勝れるに若かざるの時代を現出せり。時に唐朝新たに起りて其勢力半島にまで及びたるを以て天智天皇は斷然三韓をすて給へり。之をすてられたるは彼の英明なる天智天皇なり、而して其後間もなく彼の大化の大改革行はれ、大寶律令發布せられ、國内の整頓亦徐々として出來たること等を考ふれば、幾分か當時の我國も亦彼のノルマンヂーを捨てたる英國と其跡を同じうしたる點なきにあらざるが如し。素より今日に在りては韓國を處分する方法も十分に考究せられ、從つて名案も亦少からざることなるべし、或は風を化し、或は俗を移し、或は彼此國民の移住を行ふ等夫れ〴〵萬世の爲めの方案を講ぜらるゝならんも、此際十分に覺悟して之が處置をなすにあらざれば、今日韓國を保護國となしたりといふ我等の歡喜は偶々大なる荷厄介を子孫に貽すといふ結果に至るやも測るべからず。但し歷史上の事實は繰り返さるゝといふものゝ、之れ所謂杞憂にして、まさかに今日の國民と千年以前の國民とを同一視し、其失敗を繰り返すべしといふにはあらず。然れども鴨綠江を境として其防禦に力瘤を入れるといふ事のみに甘んずれば彼の羅馬人のライン、ダニューブ兩河の天險を恃むと同一にして抑退嬰的精神の依つて起る處となるべきを思ふ。

以上述べたる如く、外に向ては和戰二樣の覺悟をなし、内に向ては島國と半島國との融和統一を計るといふ大責任を果たすについては、學問によつて智識を進め、殖産興業によつて國富を增し、又敎育によつて君國を愛するの氣象を盛にすべき必要あるは勿論なるが就中最後にいへる君國に對する忠勇の念を養成するの一事、最も今後の緊要事なるを思ふ。彼の或有名なる西洋人を初めとして皮相の見をなすものは曰く、日本に在りては敎育益々開け、國民の智識彌よ進むによりて、之と反對に漸々弱國となるべし、生命を惜まずと

いふ佛教思想も今日已に薄らげり、又此思想を骨子としたる武士道の時代も漸々遠ざかりつゝあり、學問の進むに從ひて己れ一個をのみ主とする自我の念盛となり、教育の進歩と國民の勇強とは概ね反比例をなす、又富が進めば勇強の念之と相伴はざる場合多しと、これ一應の理ある議論なり。されども萬世一系の皇室を戴き、嘗て一度も領土を蠶食せられたることなき國體を有する我日本國民には世界に絕えて其類例を見ざる一種特別の國民教育の材料あり。即ち教育勅語にある「一旦緩急あれば義勇公に奉じ」といふ精神なり、即ち天子の御爲め、國家の爲めには生命入らず、財產も亦入らず、財產如何に多くとも國家にして安全ならざれば其財產將た何するものぞ、斯の如き富は恰かも猶太人の富の如かるべし。生命全しと雖も我皇室に多少なりとも疵のつくことあらば其生命畢竟何するものぞ、君辱らるれば臣即ち死す。此精神は幸に我國に特有のものなり。故に一方には殖產興業を盛にして國富を增し、又大に言動を世界的にすると同時に、一方にはいよく教育に力を用ひ、此我國特有の國民精神を益々盛にすることを講ぜざるべからず。其精神は日清戰役、日露戰役の間にあらはれ、十分末頼もしきものなることを證明せられたり、彼の日本海の海戰に當りて東鄉大將の信號せしを見るに「皇國の興廢此一擧にあり云々」とあり、此句全體は實に我國體と我精神とをあらはしたるものなり、就中最初の皇國の二字を見たるときは未だ他の句を見ずとも我忠勇なる將士の胸中已に奪ふべからざる決心を生ぜしこと疑あるべからず。我國民たるもの最も此點に注意し、以て戰捷後の任務を果たすの覺悟なかるべからざるなり。

勞働市場の將來

（凱旋兵士の失業問題）

法學博士 桑田熊藏

勞働市場なる語は我邦人には耳新らしく聞ゆるならんも、歐米諸國に於ては常に經濟學者の間に用ゐられ、

今や全く金融市場、商品市場等の語と同じく、經濟界普通の用語となれり。即ち勞働の需要供給の關係よりして起る賃銀の高低、失業勞働者の多少等の事情を包括するに勞働市場なる語を以て之を示す。歐洲各國の勞働局の報告を見るに各種の勞働者の賃銀の高低、失業者の多少等を定期に表にてあらはすこと恰かも物價表の如くするを常とす。我國に於ても經濟學者、殊に社會問題に意を用ふる人は勞働市場の景況につきて絕えず相當の注意を拂はざるべからずと信ずるなり。

戰後我國の勞働市場の將來は如何なるべきか。事實的にいへば百萬の壯丁が戰地より歸るにつき其中には多數の勞働者を含めるに相違なきが、扨是等の人々が悉く內地に凱旋したる曉には我國の勞働市場に如何なる影響を與ふべきか、此れ頗る重大なる問題なりと考ふ。之について樂天的觀察をなすものは曰く、百萬の壯丁凱旋したればとて何ぞ憂ふるに足らん、戰爭の爲めに中止せられたる政府及び民間の事業は、再び着手せられてこゝに勞働の需要增加すべく、加之戰後產業の發展に伴うて種々なる事業に於ても勞働の需要增加すべければ百萬の壯丁をして手を空しうせしむるが如きことは萬々あるべからずと。成程或程度に於ては此等の推測は當れるやも知れず。然れども官民の事業とても俄かに戰爭以前の狀態に復することは困難なるべく、又戰後產業の發展といふも數年の後ならばいざ知らず、近き將來に於て之が爲に數多の勞働の需要を來すことは先づ〳〵望なき事にはあらざるか。之に加ふるに軍需品の製造事業は戰爭の休止と共に全く閉止せらるゝこととなれば之よりして生ずる失業の勞働者は決して少しといふべからざらん、然らば即ち百萬の壯丁が凱旋することとなれば悉く其職を得んとすること實に容易ならずといはざるべからず。但し農民の子弟にして出兵したるものにありては鄕里に歸りて農業に從事することを得るが故に失業の憂は比較的少かるべしと思ふ。何となれば農業に於ては工業に比して勞働の需要に彈力あるを以て、工業が勞働の需要に一定の限度あると趣を異にすればなり。要するに百萬の壯丁が

凱旋することは勞働市場に至大の影響を與ふるものなり、之がために數多の勞働者が失業の地位に陷るの不幸を見るべきことと素より疑を容れず、然らば即ち之に對する處分果して如何。或は凱旋の壯丁を滿韓地方に屯田兵として置くべしとの意見を立てたるものあり、然れども屯田兵の制は軍隊組織の最も古風なるものにして今日の軍制には到底採用すべからざるものなりと聞く。北海道の屯田兵の如きも其成績餘り良好ならざるの事實あり、又露國のコサック兵の如きも一種の屯田兵なるも其成績は一般の思惟する程宜しからざることは今日世人の漸く認めつゝある事實なり。若し屯田兵の制にして有効なるものならしめば凱旋兵士の幾部を滿韓地方に置くは勞働市場の方面より、又軍備上の方面より實に一擧兩得の方法の如く見ゆるも、然し右述べたるが如き理由によつて此方法を採用すること能はずとすれば、他に何等かの適當なる方法を見出さゝるべからざるなり。

予の見る所によれば滿韓地方に凱旋兵士の幾分を割きて農業殖民を設くるといふこと最良の方法なるが如し。聞く、韓國には未墾の土地尙甚だ多く、殊に王室の御領地には最も多しと。今其等の地方に農業殖民をなして凱旋の兵士をして永住せしめ、農業を營ましむべしといふ案を有す。素より此方法たる之を行ふに當て强制的になし能はざるを以て、凱旋兵士の志願によつて之をなさしめ、政府は之に對して相當の保護を加ふることゝせば宜しからんと思ふ。其手續は先づ日本政府より韓國政府に向て若干の土地を借り受くることを約し、其土地を殖民に分配することゝするなり。分配の方法については彼の獨逸に行はるゝRentengut、亞米利加に行はるるHomesteadの組織を模範とすべし、今此等の規則の大要を述べんに亞米利加のHomesteadの制といふは太平洋鐵道の兩側に於て官有地を人民に拂下をなす場合に行はるゝものにして各人に對して拂下をなす面積は百六十エークル以內なり、拂下を受くるの要件としては其土地の耕作を初むるか、或は其處に住居を定めざるべからず、拂下の代價は割拂の方法

によつて之を納む。拂下の當時に於ては只借地權を得るに過ぎざるも拂下後五ヶ年其地に住居し、耕作に從事したることを證明するときは初めて完全なる所有權を獲得す。此土地については賣買讓與に關して種々綿密なる制限を受け、容易に他人の手に移ること能はざる樣になり居るなり、又獨逸のRentengut の法律は啻に官有地のみならず、大地主の土地をも任意の契約によつて農民に分割して賣り拂ふの制度にして其代價を拂ふについては割拂の方法によらしめ、之に關して法律を設けて準則を示す、凡そ小作料の廿五倍を以て標準となす、一旦買ひ得たる土地は永久に之を賣買讓與すること能はざる約束を結ばしむる場合あり右は極めて大要に過ぎざるも此等の規則を參考して借地の面積を一定の廣さに制限し、一家族にて耕作し得る面積を以て之が標準とし、漫りに土地兼併をなすなからしむることを勉め、而して又此借地に對しては政府の嚴重なる監督を施して容易に之を賣買讓與するなからしむることゝすべし。此方法によつて借地を若干の兵士に附與するときは自ら韓國内地に於て我國の農業殖民も出來、韓國の經營に於て少からざる便宜を得べし、而して亦勞働市場の攪亂を防止するの方法としても恐らくは之に若くものなかるべきを信ずるなり。（文責在記者）

社會問題と價値問題

法學博士　福田德三

社會問題は根底に於て價値問題である。近世の產業革命が社會問題を生じたと云ふの意は、畢竟する所產業革命とは價値革命の他の名たるに外ならぬからである、而して又此意味に於て、社會問題は倫理問題としてコソ、尤も重要なる意義を有して居ると、云はれなければならぬのである。經濟問題であると云ふ事夫れ自身に於て、既に倫理的意義の上に築かれて居る事を語るのであるが、社會問題と云ふの意は更らに進んで

根本的の價値問題に觸れて居るのである。即ち此意味に於てバー、エキセランスに倫理問題として始めて十分の了解を得らる可きである。墺國の學者マイノングは、人が人に對するに於て人に對して如何に價値あるやを、研究するのが尤も進歩した倫理學の職分であると云て居る。社會問題と云ふ事の文字の上から云つても人と人との交渉の上に就ての問題である事が明かであるが、近世の社會問題の發生の由來を尋ぬれば猶更以て此意味を確むるのである。企業者對勞働者、第三階級對第四階級と云ふ、所謂經濟階級の對抗と云ふ事に於て、「社會的」と云ふ形容詞が用られ始めたのである。此「社會的」である事の問題が即ち「社會問題」なるものである。此「社會的」と謂はるべき關係は廣い意味に於ける社會的――「社會」なる語へ「的」を加へて形容詞とした――なる語とは甚異るのである。其中の極めて限られた特定の種類の關係のみを指して狹い特殊的の意に於て「社會的」と云ふのである。階級と云ふものに顯はれて經濟上の利害を全然異にすと信ぜられて居る二の種類の人々の間に於ける交渉を指すのである。即ち「社會問題」と云ふのは此く階級を形造つて居るとせらるゝ人と人との間の關係に就ての問題である。如此人と人との關係に於て一方の人の他方の人に對する對人價値の變動が即ち近世の產業革命である。器械の發明蒸汽力電氣の應用等と云ふのは其手段たるに過ぎなかつたものである。根底に於て、人が人に對する關係に就ての人の負ふ所の價値の、世界に於ける這の箇の大變革が無かつたならば、十九世紀の大發明大發見と云ふ事は、單に技術の上に止り、社會上の大變動の出立點を供すると云ふ事は出來ないのである。今此價值變動は一言を以て掩へとならば、次の二に歸着すると云ふの外はない。(一)共に價値對象たる二つの者の間の價値關係の大變動である。即ち價値の對象としての物(財と名ける)と、同じく價値の對象としての勤勞(人的給付と名ける)との相互關係の變動である(二)從て此二つの者に對する價値主體の判斷の大變動是れである。財と人的給付と處が此二の事實は次の結果を生ずる。

の關係、並に此關係に對する價値判斷が變動すると云ふ事は、財の所有者と人的給付の所有者との間の相互關係に大變動を來したと云ふ事是れてある。而して財の所有者は即ち企業者として顯はれ、人的給付の所有者(發作者)は即ちプロレタリアの階級として顯はれる。即ち近世の產業革命と云ふ事は、企業者對勞働者間の價値現象の革命であると謂ふ事が、此に於て明かてある。而して社會問題の提案者は何を求むるかと云ふに、外の事でない。異なつた價値關係に相應す可き社會關係の修正案の通過を要求する事是れてある。社會問題の鼓吹者、社會主義の主張者は世人の思ふが如く謀叛人てはない、破壞者てはない、悲觀論者てはない。否々或意味に於ては、彼等コソより善き社會の忠實なる建設者たらんとするのである。彼等コソ永い將來に向ての樂觀を立て樣とするのてある。但し其要求が實際の變動以上に奔逸した過當なものたる時は、性急てあると云ふのは多く破壞の基てあると云ふの意味に於て、破壞的性質を帶びて來るのてある。乍併根底に於て價値革命を否認する論者は手の就け樣のない破壞論者てあつて、到底社會問題の提案者の比てはないのてある。唯彼等は受働的てあり、保守的地位に置かれてあるから、皮相の觀察者に看破せられないと云ふ、特典を有して居るのてある。反之修正案の動議を提げて全社會の肩上に置く革命論者は、勢ひ發動的ならざるを得ない、突進的ならざるを得ない。從て動もすれば誤解せらるゝのてあり、又弱い人間の事てあるから、極端に馳せると云ふ事になるのてある。銀貨國が金貨本位に移らうとする時には、金貨本位論者は盲斷輕擧の非難を受くるを免れないのと同樣てある。以上を以て、社會問題の眞面目な研究は先づ價値問題から始めなければならぬ事と、社會問題が經濟問題として先づ顯はれ來た事、而して其れが段々進めば根底に於て倫理問題であると云ふ事を、見出すに至らなければならぬと云ふ事が粗々明白てあらう。

然るに社會問題の提案者は中々怠けては居らぬ、絕へず新しい地位を占め新しい論點を供給して來て居る。

而して近時に至ては企業者對勞働者と云ふ極めて特殊的な、或意味に於ては技術的な關係から、一歩を進めて、問題の全面に涉て基礎を形造つて居る所のものに觸るゝに至つた。ソレハ何であるか。家族と企業との價値問題、是れである。

蓋し企業者對勞働者と云ふ時には、其軒輊は甚顯著てあつて、全然相對抗して居るものと、普通容易に考へらるゝが、經濟上の觀察から云へば實は其對抗は内容的なるよりは寧ろ外形的であるのである。何となれば兩者は共に經濟的の活働、即ち經濟行爲の負擔者であると云ふ點に於て、經濟上全く同量同質のものに歸するのである。均しく經濟行爲を營むと云ふ共通の目的を有して居るのみでなく、此兩者の對抗と云ふ事は此共通の目的あるからコソ始めて有り得るのである。此れが無ければ、對抗も亦無くなつて仕舞ふのである――其詳しい説明は餘り專門的になるから已める――然るに、玆に家族と企業の對抗と云ふのは、コレよりも遙かに根本的なのである。家族は經濟行爲の負擔者若くは經濟行爲の組織として存在するものではない。反之企業は全然經濟行爲のみの爲めに形造られた組織であるのである。即ち此兩者の對抗は既に玆に胚胎して居るのである。言を換へて云へば、家族對企業の問題が起て來て、社會問題は從來に嘗てなかつた新生面を具へて來たのである。然るに此新生面の出て來たと云ふ事は、更らにヨリ大なる意義を有して居る。家族對企業の社會問題に於て、價値革命は愈々切實な解決を促しつゝ、吾々に迫つて來るに至る事是れである。而して如此根本的對抗の地位に立て居る企業と家族とは、何に依て價値革命の現象を發作するものであるかと問ふに、此兩者は均しく經濟行爲を營むと云ふ共通の目的は有して居らない、乍去更らにヨリ大なる共通の或るものを有して居る。何であるか、答へて曰ふ。家族も企業も共に今日の經濟組織に於て單位を形造つて居るものであつて、相共に存して、國民經濟なる大なる組織を構成して居る事是れである。吾々今日の經濟組織の單位は――國家並に教會を誤て此等と併稱する學者は予

壁の論を否認するであらうが――企業と家族との外にないと云はなければならないのである。デアルカラ家族對企業の價値關係は、經濟行爲に於ける其れでなく、經濟組織に於けるの其れである。他の語を以て云へば、動的方面に於て考へらるゝ價値革命でなく、靜的方面に於てするのである。モ一ツ言葉を換へて云へば、現象的考察に於てゞなく、實體的考察に於て大變動が起ると云ふ事なのである。其時に其場合……に從て、形態を變へて行く上の價値の變動でなく、常住的、普遍的に考へらるゝ價値の變動である。價値革命と云ふ事は茲に至て終に其根底に觸れたと云ふは此意に於てゞある。其變動の至大至深であると云ふは此れが爲めてある。今此變動は先如何なる邊に於て顯はれて來たかと云ふに、同じく人が人に對しての價値の變動として顯はれて來たのは言ふ迄もないが、其の顯はれた方面、形態は甚異つて居る。企業對勞働の問題は主として經濟問題として顯はれて來た。經濟問題として顯はるゝと云ふ事は人が人に對する價値の中、貨幣の價値に於て言顯はされ、思惟せられ、測定せらるゝ方面に於て先づ變革が端緒を啓いたと云ふ意味なのである。然るに企業對家族の價値革命は、其貨幣の形態に於て顯はれたものは、寧ろ一部分に止まつて居る。從て此問題は經濟問題としては、未だ夫れ程の重要を有して居ないかの如くである。是れ淺薄な經濟論に於て此問題が甚輕視せられて居る所以である。蓋しラムプレヒト教授が尤も奇拔な立論を試みた如く、今日の經濟生活の特徴は神經銳敏(否過敏)と云ふ事是れである。而して此經濟生活の劈頭に立て居る企業は亦此神經過敏時代の最好の典型である。反之他の經濟單位たる家族は未だ多く此風潮の爲めに流し去られて居ないのである。營利經濟、交換經濟の甚發達したと稱せられて居る今日に於て、此滔々たる風潮を外に見て、自ら經濟の最後の金城鐵壁となつて居るのは家族である。今日の家族内に於ては、家族以外の世間を普く支配して居る營利主義は行はれて居ないのである。家族内に於ては未だ共產共有主義が行はれて居ると云つて不可ないので

ある。即ち家族内にあつては自我と自我、人格と人格とは其全面に渉つて、ピッタリと相接觸して居るのである。他の語を以て云へば、家族に於ては個人性は或意味に於ては掩はれて居るのである。從て人格と人格との軋轢と云ふ事は、個人性の對抗の儼然たる營利主義の企業組織に於けるが如き事はないのである。蓋し貨幣にて言顯はされたる價値の家族關係内に甚だ振はない事と、家族間の價値關係が對抗的方面を甚だ缺いて居る事では、互に原因たり、結果たるものであるのである。然らば何故に家族以外、殊に企業生活に在ては、貨幣價値が先つ尤も切實に前面に顯はれたるものとなつて居るかと云ふに、人格と人格との對立、自我と自我との軋轢——或は衝突と云つても差支ない——は、甚高度に達して居る。其結果は即ち神經過敏、精神不安の狀態を惹起す。今貨幣價値は此不安な狀態を緩和するの要具として大に必要なのである。貨幣は——純客觀性の價値の負擔者として云ふ——人格と人格との衝突を滑ならしめる油であるのである。若し今日の複雜な、劇甚な營利主義的社會生活に、貨幣と云ふ純客觀性の價値の負擔者が存して居なかつたならば、神經過敏な人類は到底生存に堪へ得られないと云ふ事になる。貨幣は獨り人格の實在と其所有とを分岐せしめる事、ジムメル教授の精論した如くなるのみでなく、又人格と人格、自我の在と在との隔絕——或意味にての——を得せしむるものである。勞働者は其給付に對して、貨幣を支拂はれると云ふ事に於て、雇傭關係に得て起り易い人格の壓迫を企業者から受くる事少くて濟むのである。貨幣價値にてのアブフヰンドングを受くる事少い家婢の如きは、同じ勞働者の內でも人格の毀損、自我の壓迫を蒙り易い地位にあるのである。商人利を重じて別離を輕んずと詩人は嗟嘆するが、實は餘り別離を惜まれて、人格的接觸を近密に保たれては、眞正なる自我發展、人格實現と云ふ事は望少い事となるのである。——但し予は之れを以て、家族の羈絆を厭ひ、貨幣價値を以て凡てとする近世のヘテーレ的家族關係を求むる傾向を攻擊するを緩めるものではない

商業道徳と云ふ事の抑も淵源する所は、此に存す可きである。英語にビジネス、フレンドシップと云ふ事がある。英國の商業的友誼と云ふのは、或點に於ては最高の倫理的要求の要件を具へて居るものである。蓋し此くの如く貨幣に於て、人と人との關係の價値を言顯し了ると云ふ事は、根底に於て、より多く、人格の獨立、自我の發展を助くるのである。人格が人格との接觸に於て全く摩擦し了られては到底如此進歩の餘地を有せなくなるからである。貨幣が其間に介立して或度迄は却て隔絶、孤立、分岐と云ふものを得せしむるから、今日の様な個人性の伸張が得られたのである。然るに家族生活の内にあつては、人格は相互に接觸し盡し、相互に掩ひ去ると云ふ事が其尤も誇りとし、其尤も美しき所とするのである。此間に隔絶の要具を存する必要はない。自我を沒却し、個人性を抑へ、共産共有的に一の統一體を形造つたものが家族と云ふ經濟單位なのである。是れ即ち此家族關係の上に就て云ふ價値現象が、多く貨幣なる純客觀性の價値負擔者を待たない所以てある。是れ即ち家族關係の價値現象が企業對勞働の場合に於けるが如く先づ經濟問題として顯はれて來ない理由である。然るに近時に至つては此重大な價値革命は家族以外に於ける或る實際の事件に於て、經濟問題として顯はれて來た。社會主義の論者は慧眼直ちに之れを捉へ來て、價値革命の基く價値變動を人類社會生活の全面に涉て認めしむ可き修正案の提議中に加へた。ソレハ何デあるか。即ち世に所謂婦人問題是れである。女權擴張問題是れである。エンゲルスの家族の起源、女權の史的發展に關する研究は即ち此要求に應じて出て來たものである。今日は最早母權說に基く此等の女權論は學者の一般に容れない所となつたが——尤も米國並に之れを受賣する我邦の論客中には此頃になつて、ヤット物珍サウに母權說等を說くものもあるが、コレは社會主義の爲めに甚不面目な事である——婦人問題と云ふ大問題は此れが爲めに捨てられたと見るのは大なる誤謬である。母權だの、ゲンチル制だの、ホルド說だのを少しも藉るを要せずして、此修

正案は確乎たる要求を提出し得るのである。而して此婦人問題と云ふのは、決して家族の間から起つて來たのではない。其以外に於て先づ起つて來たのである。家族以外に於ける婦人が、先づ其變動せる價値關係を認めしめんとして動き出したのである。家族内に於ける婦人は無論此變動に大に預ては居るが、發動的に進んで、其中心の叫を公けにする事はせなかつたのである。出來ないからである。何故と云ふに、其變動は尤も切實に具體的に世に知らしめる事を得可き、經濟問題とならないからである。其經濟問題となつたのは極めて近時であつて、而も經濟上の動態に於てなく靜態に於てゞある。即ち獨逸の新民法に於て妻の獨立財産の認められたと云ふ一事件がせイ〳〵其尤も切實なるものたるに過ぎない。然るに家族以外に於ける婦人はサウ平氣で居られない。現實緊急の必要は、時々刻々其異なれる價値に相應する異なれる社會的――狹き意味にての――地位を得可く鬪はねばならぬ事となつた。而して此鬪爭は經濟上に顯はれて來るに迨んで、始めて尤も的確のものとなり、有力のものとなつたのである。――殊に婦人勞銀の男子の勞銀に比して甚低き事第一の問題である――經濟學者なるジョン、スチユアート、ミルー婦人の價値變動の大運動に於て進歩の筆頭に立て居た英國の學者なるを注意せよ―の「婦人の服從」論玆に於て顯はれたのである。而して是れ實に今日の企業對家族の大なる社會問題を喚起するの基となつたのである。予は既に豫期以上の長文を費したから、企業對家族の社會問題其物を玆に論ずる事を敢てしない。唯次の一事を斷言する。國民經濟の最大問題は價値問題である。國民經濟の尤も圓滿なる進歩、尤も健全なる發達は、實際生活に於て起つて來る此價値革命の現象を正しく觀察し而して之れに順行する事にある。此意味に於て予は常に經濟問題は畢竟倫理問題を外にして考ふ可からずと主張するのである。而して價値革命の現象は一方に於て、企業對勞働の低度の社會問題に於て先づ顯はれて來るが、若しも一國民經濟にして健全なる發達の道程上にあるものならば、必

ずや獨り此れに止まらないで、更らに高き社會問題として婦人の價値變動が起つて來る可きである。殊に大戰爭を經過して社會上百般の變動を受けねばならぬ、我邦に於ては、必ずや凡ての方面に於て大なる價値革命――産業革命は其小なるもののみ――が起る可きである。否既に其見易きものに就ては起つて居る事を證據立てゝ居る。輸出入關係の變動、物價の高低、賃銀の上下等は即ち是れである。乍併此等のものは單に其一を以て止るものではない。一波は一波を生じ、一風は一風を呼ぶ。世上の識者果して如何なる研究を重ねて居るか。徒らに戰後の經營なる無意義の套語を繰返す計りが能事ではない。人格の修養を無視した成効主義、速成主義、實用主義の敎育論者、賢妻良母主義の女子敎育論者須らく先づ人格價値の問題に就て潜心考究して見る可きである。先づ人の人としての價値の充實を圖らない小智小技に長けたクラークや、社會に於ける婦人としての價値の近世的要求に應ず可きを念慮して、早く既に妻たり母たらんとするバック、フキッシユや、吾々は既に充分に有して餘りある。政治、軍事學問界の俊才と相驅馳して優に獨立濶歩し得る大企業者、之れと相對峙して優に地歩を占む可き進歩的勞働者、男子と相對立して、人格の大、品性の高、思想の精に於て相讓らざる閨秀の起つて近世生活の要求に答へ得て餘ある、人の人としての價値の大に增進するのでなければ、戰勝國と云ふ語は所謂虚名に歸するの外はない。予の繰返すを許せ。最高最大の社會問題は人格の價値の問題であると。眞正の經濟問題は終に倫理問題を措て外にないと。

中央公論に寄稿の約ありて果さず、偶昨宵經濟學協會に於て坂谷新藏相の今後の我邦の大問題は、經濟上のシステムの改善にあるを説くを聞く。予は藏相の論に甚た服するものなり。而もシステムの改善に先つ大問題は人格の價値の增進に在り、人の人としての價値先づ增進するにあらざれば、システムの改善到底起る可からざるを惟ふを禁ずる能はず、嘗て勞働條件の改善を以て我邦經濟政策の根本問題なるを提唱せしが、今乃ち更らに根本に就て立論せんと欲し、此篇を一氣に呵成す、立論の粗笨、文辭の不備謹んで責を負ふ。

（三十九年一月二十一日夜稿）



露國の內情

（ノーオエウレミヤ所載）

こは同紙の主幹スウオリン氏の所論にして現下世界の最大活劇を演じつゝある露國の內情を知らんとする人は必らず一讀すべし。

（一）

現今露國の社會は如何なる趨勢に在りとなす可きか彼の革命黨は自己の權下に其社會を屈從せしめん事を努め居る事なるが我社會は數百年來官吏の後見を受くるに慣れたるを以て今も亦革命黨の權下に諂諛屈從せんとする者なるか抑々また我社會は何者にも諂諛屈服する事なく直進經行して只法律にのみ服せんとする者なるか

是等の問題を眞面目に我讀者に提出し現今僅に其花を開きたるのみにて未だ菓實を結ばざる革命の此困難なる場合に是等の問題に就きて一考せんとする者なり

勞働者委員會報（革命黨の機關紙）が豫告したる全國政治的の同盟罷工は幸ひに實行せられざりき銃砲の音も聞かず閃々たる劍光をも見ずに此擧の失敗に歸したりしは何よりの事と云はざる可からず勿論この同盟罷工は到る處の鐵道の運輸を停止せしめ人民を飢餓に苦しめ藥舖を閉店せしむる等の事を演出して如何程人民と社會とに迷惑を與へたるや知る可からず左れど社會は何時までも此擾亂に從順を守る者にあらざりき商店は商業を營み馬車も開通し鐵道も運轉し電燈も點火するに至りたり然し馬車も鐵道も皆不定の運轉に過ぎず遞信者は鐵道の運轉を停止せしめざらん事に努力したるも僅に其の目的を達したるに過ぎざりきモスコー府は革命に從はず日々諸新聞も發行したるも彼得堡は其に反して無住所政府（革命黨の者は自己の政府即ち事務所を斯く名づけたり）の命令を奉じて植字勞働者は勞働を廢して集會や示威運動に加はりたり彼得堡は今や全く無政府の狀態なり何となれば政府は既に二回も一般都市の政治的同盟罷工の演出を傍觀して何等鎭定の方法をも講ぜざりき斯の如き政府は我輩また之を何とか稱す可きや

勞働者委員會は既に現然たる壓制政府の如き勢力を有するに至れり彼等は官報ルースキリ　インワリード等の二三新聞を除くの外は一切の新聞を禁止して自ら勞働者委員會報を發行するに至れりノーワヤザーズニ新聞の主幹ミンスキー氏は委員會に向て同新聞は無住所政府と其所信を同うする者なるが故に發行を許されん事を懇願せり勞働者委員會は是れ或は可ならんかとの說ありしも若し同紙の發刊を承認せばノーオエ　ウレ

ミヤ、スウエト等の發刊を禁する能ざる可しとの説ありて遂にミンスキー氏の懇願も拒絶せられたり委員會は此事を社會に發表せり是れ彼等の正直なる事を示す者なるも其諸新聞の發刊を禁止すといふ如きは實に意地穢き行動といはざる可からず

彼等は勿論自由の新聞を恐れ恰も壓制政府の如くに植字職工も新聞記者も悉く自家の手足の如く為さん事を望む者に相違なし彼等の無住所政府——壓制政府は其反對黨の有名なる機關新聞を禁止せん事を決し新聞社印刷場に闖入して其用紙を押收せり而して一日を隔てゝ勞働者の機關紙は發刊せられ一部二十コペーカを以て市中に賣りたり其新聞は之を政府の官報に比すれば中々に立派なる者にて彼のウイツテ氏を始めピリレーウ將軍の如く恰も刑罰を恐るゝ學校生徒の如くに事毎に己を辯護する如き説は少しも為さゞるなり是れ勞働者委員會は何事に對しても辯護を為すの必要を認めざるの勇氣ある事を示す者なり然し同新聞の文學上の記事に至りては殆んど半文の價値もなく只其無學を暴露せるに過ぎず

(二)

露國の革命は必ず一怪物と共に現出す可しとは余が幾度も論じたる所なるが今や此怪物は現出して其勢ひ甚だ熾んなり傳聞する所に依ればペンザンスカヤ縣の某地方にては皇帝ニキタと稱する者現れて一萬二千の兵を率ゐて起り諸村落には革命黨の服裝に變裝したる將軍の幾人か徘徊し居れりと風聞せり露國風の將軍の役を演ずるは舞臺の上にハムレツトを演ずるよりは甚だ容易なる可し由來自稱帝王は露國特產物も同樣なり故に余は革命の過ぎ去る事を衷心より希望し全國の政治的同盟罷工の不成立に終りたる如きも余の悦ぶ所なり然し此同盟罷工の中止は兎に角に勞働委員會の布告の出たる結果なるは明かなり若し第三回の全國の政治的同盟罷工の起る事あらんか此度は人民は起ちて罷工者を壓殺す可し同盟罷工の損害は第一回の政治倶樂部にて能く此事を明かにせられたり斯の如き事は新聞若くは小册子の刊行物の助けを要する運動なり

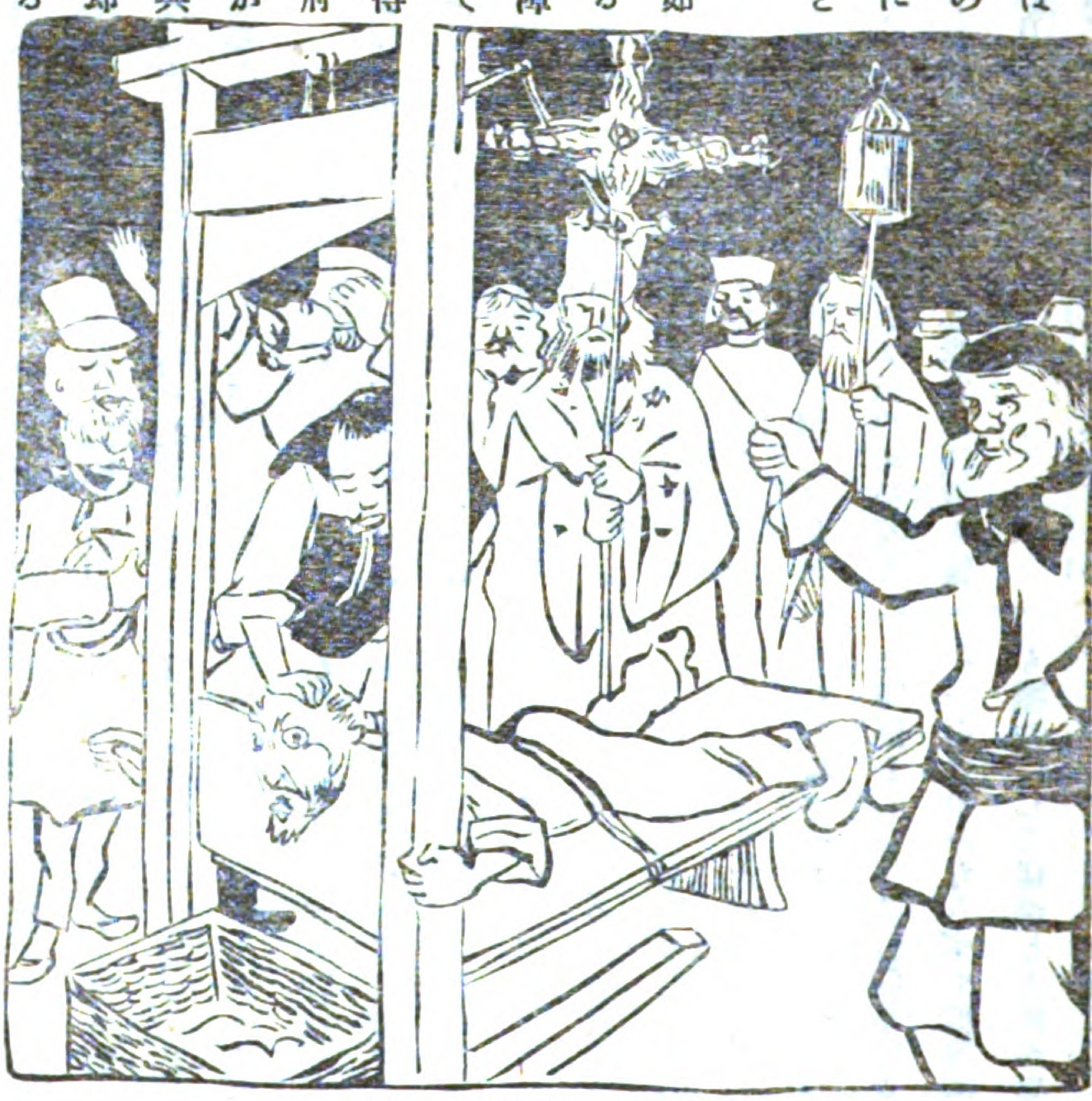
電信郵便事務員の同盟罷工既に着手せられたりとの風聞あり郵便電信局の官吏が其俸給の少額なる事を訴へ居りたるは既に久しき事なり今や彼等は唯り其經濟問題の為めのみならず政治上の動機に依りて同盟罷業を企てゝ威嚇せんとせり政府は此威嚇に對して果して備ふる所ありや世界何れの處にか斯の如き出來事あらんや左れど我が露國の為に不幸なるは又左の一事なり即ち近來詔勅を書き綴るの速かなる事(露帝は爭亂に對して國政改革その他多くの詔勅を續發せり)恰も新聞の論説を書するが如き有樣にて全く公平なる思想を有する者にさへも種々の意味に解釋せらるゝなり陛下より切角賜はりたる貴重なる自由の權利の如きに對しても何等の註解も説明をも與へられざるなり國民議會の召集は延期せられたり議會の召集は一日も猶豫す可からざる緊急事件なるも政府も社會も之を遲延せしめ居るなり議會なくんば露國の存立さへも期す可らず

政府の一大失策誤謬は政府が出版、言論、集會等の自由を萬事約束し且つ實際に是を與へながら其に伴ふ可き法律を發布せざるに在り社會の舊秩序は詔勅に依りて一掃せられ新秩序は勝手次第に立てられんとする有

樣なり演說家が辯舌を振ひて或は各縣の自治を主張し或は社會共和政治を唱道せり軍隊にも民間にも到る處として擾亂あらざるはなく市街には爭闘を演出し邸宅は燒棄せられ流血淋漓として慘狀を極め一言にいへば革命の眞最中にて人民は只其激怒の勃發を以て革命と心得猛獸の如くに暴行せり而して政府の態度は如何といふに恰も休暇中の如し

余が意見は如何といふに即ち下の如しウイッテ伯の政府は明白確實なる憲法を發布して之を以て國家の保障となさゞる可らず斯くしてこそ始て政府は憲法に依據する官憲たるを得べし今日政府の爲す所を見るに政府は國民に一切革命の方法を授けながら社會にも人民にも他に何者をも與へざるなり然かのみならず政府は却て社會人民が今日まで有し居りたる一切の利益便宜を失はしめ生活勞働の安全は勿論鐵道利用の便益その他郵便電信電燈水道等あらゆる便利を悉く失ふに至りたり今や我が國には是等の者は全く存在せざるも同樣なるに至れり現今正當合法なる政府と相並て自稱政府(革命黨)も政治を布き民衆は合法の政府よりも自稱政府の命令に從へり合法の政府は行爲よりも談論を重んじ恰も社會が果して自由を受くるに堪ふるや否やを試驗せんとする者の如し若し社會が全く是に堪へずんは何故に其約束したる事を全く取り上げざるか社會が既に現出したる一大怪物に恐れ同盟罷工と國家の頽敗に畏怖するに至りて社會は始てウイッテ内閣の前に膝を屈し我等を救ひ憐めよと言ふ可きか而して政府は其時斷乎として一切舊時の如くに行動せんとするか然し今日は試驗の時代にて社會は恰も小兒の如くにたゞ戰慄し居るのみなり

是れ一方より觀たる點にて政府の利口なる事を示すなり然し他の一方よりすれば社會も亦左の事を借問するを得べし曰く政府も亦何等(憲政)の經驗に乏しく甚だ淺見にて自ら露國の事情にも自由の何たる事にも通ぜず政治學の何物たる如きは全く無識にて自ら何を爲す可きや知らず内閣



GIVING LIBERTY IN RUSSIA.

NICHOLAS—"Stop! Stop! I'll grant you a constitution."

—*Simplicissimus* (Munich).

會議に集まるは皆に學ぶ所あらんとして集まるに非ざるか然し政府の勉學は何時成業するや明かならず但し露國に就きて怪物と革命とにつきて學ぶを得べく是等の者の露國に存するや既に久し我が露國政府は立憲政治の如何なる者なるやの明瞭なる觀念を果して有し居るか是れ甚だ至難なる學問にて只獨裁國の政治のみを取りたる老朽政治家には到底その力に堪へざるに非ざるか再びまた海外に向て諾曼的人民に對し我が邦を治むるを得べき大臣を吾人に遣はさん事を願ふ如き仕儀に立至らざるか

（三）

吾人は果して能く此無政府の狀態より脱出するを得べきか若し我政府にして其言ふ所よりも行ふ所を多からしめば必ず脱出し得るに相違なし政府の發表する言説は一言一句と雖も忽にせず愼重に愼重を加へて批評の擊をして出來得る限り不信任の反對なからしめざる可からず特に現今尙ほ未だ國會も召集せられざる事なれば何等の批難反對もなき場合なれば此事最も必要なりとす政府が其全力を注ぎて發表すと見ゆる政府の報告書に就きても同樣の所感なき能はず吾人は政府の報告書を一讀して是が果して全力を盡して眞面目に然かも合法に發表せられたる政府の公文なるや否やを疑はざるを得ざる者あり左れど是れ政府が非常なる注意と愼重とを以て記したる公文なりといへり

注意の周到は何事にも必要にて例へば今人の注意周到なるや其外出せんとするに當り先づ時計を見更に晴雨針を見て天候を卜し萬一にも風邪などにかゝらざらん事を慮り散歩に出るにも一々醫師に相談して種々の事情を考慮する如き有樣なり政府が何事に對しても注意周到なる可きは當然なるも政府の注意と一個人の注意との間には其周到なる可き點に大なる相違なかる可からず一個人は只己れ一人の事を慮れば其れにて充分なるも政府は更に廣く目下無政府の狀態に陷り居る各方面の事に注意せざる可からず余はウィッテ伯の手腕と政治家としての天才とを確信する者なるも氏が某所に於て爲したる演説をノーオエ　ウレミヤ紙上にて一讀し是れが果してウイッテ伯の言なるや否やを疑ひ大に奇怪に感じ或は是れ余が誤讀に非ざるなきやを疑ひたる程なり「政府は人民を鎭撫する力を有せず何となれば政府は人民の信任なきが故なり」といふ如き言をウイッテ伯より聞くは實に意外なりウイッテ伯は其信任の無き事を何處より聞知せりや何人が國民に對して政府を信用するや否やを自ら問ふ者あらんや人民は斯の如き質問の意を解せず何故に斯の如き質問を提出せられしやを怪しむなる可し彼の國會に於て政府の不信任を決議せられたる場合にさへも政府は之を以て國民の意志に非ず一黨派の意思に過ぎずと認むる事さへあるに非ずや左れど我國には未だ國會も無く唯一の實力ある黨派としては其目的を遂ぐるが爲めに方法の何たるを選はざる革命黨の一あるのみならずや彼等革命黨は其目的を遂ぐるが爲めには其生命をも犧牲にして猛進し人民が果して彼等に信賴するや否やの如きは敢て問はざるに非ずや革命黨は其主義主張を人民に鼓吹し人民をして彼等が能く其所信を斷行する者なる事を確信せしめ人民に對する自家の愛を表し人民をして革命黨と其所信を同うせしめん事を期せり革命黨は全部是れ

活動と勞働との表顯なり彼等の眼孔は烱々たり其顏色は火の如く熱し其言論は衷情より迸る所の眞摯熱切の雄辯なり彼等は其前途に横れる危險を恐れずまた其歩趨に躊躇の細心を用ひず只專心其の反對者の謬見劣弱僞善不信を叫んで止まざるなり故に彼等革命黨は成功の爲に戰へり又彼等の發布する意見書は少しも姑息の妥協を許さゞる正々堂々の意見書にて一切の讓歩を以て悉く是れ屈辱なりとせり政府は果して斯の如くなるを得るか我政府に就きて智力天才義務又は祖國に對する愛を那邊に見出すを得るか勿論例外もなきに非ざる可きも概して言へば上述の如し

ウイッテ伯は其自ら坐乘の準備をなしたる國會を稱して腐朽船なりと言ひ又其自己の位置境遇を以て暴風激浪の露國の海中にある者と言ふを得べし是れ全く眞實の言なり然してウイッテ伯は決して此腐朽船を厭忌せざる可し彼のゴロウイン、ココシキン、リウオフの諸氏はウイッテ伯に勸めて國會の召集を廢止し常設會議を設けん事を慫慂するもこの常設會議は果して鋼鐵艦なるや否や倘疑問なり此鋼鐵艦と思はるゝ船も其腐朽船と同様に共に着港せずに沈沒するやも識る可からず之を海戰に於て實驗したる所に徴すれば鋼鐵艦も木船と同様に然も瞬間に其乘込と共に沈沒せり國會は猶豫なく召集せざる可からず之に依りて激浪怒濤の間に漂蕩し居る露國と其政府とに堅固なる地盤を與へざる可からず

若し露國政府が地方議會々員の言を信頼して國會の開設を廢止し其れに代ふるに常設會議を組織する如き事あらば是れより如何なる災害を生ずるや知る可からず或は共和政を生じ或は無政府主義を生ずる事なきに非ざる可きも善良なる自由は得て望む可からず此善良なる自由は只それ立法の全權を有する國會に之を望む可きのみ



RUSSIAN PROMISES.

WITTE (raising his hands)—"To think that I should have promised them safety from attack!" —*Floh* (Vienna).

（四）

怪物は既に現出せり怪物は自由自在に露國を横行せり或者は此怪物を稱

して皇帝ニキタなりといひ或は皇帝ザハルなりといひ或は革命と稱し或は農民暴動といひ或は黑隊(賤民隊)或は赤隊(暴民隊)と稱し人各〻其見解に依りて是を名稱せり恰もレルネの怪蛇は多くの頭首を有せる如くに此怪物も多くの頭首を有して皆その頭の稱を異にせりレルネの怪蛇の爲にはヘルクレスの勤勵ありたり然るにヘルクレスはジヒテルの子にて既に幼時に蛇を縊殺し長じて後多くの勳功を立てネメイの獅子レルネの怪蛇を殺し又人肉を以て馬を養ひたるザオンドの王を征し遂にアマゾン人を征服して其女王を捕虜となせり彼は神裔皇族の血統を受けて其能力と智慧と敏捷とを以て勝利を得たりしなり我が露國にヘルクレスは何處に在りやヘルクレスのある事を余も耳にせず卿等も聞かざるなりヘルクレスは政府にも無し政府は壯年活氣の人才を要す可き者なるに今の我が政府は既に其力を消失したる老耄老朽の人物を以て組織せり又莫斯科の地方會議にもヘルクレスに彷彿したる人物を見ざるなり地方會議には熱心なる雄辯家活潑なる熱情家思慮深き人物に乏しからず左れど一人の政治家もなく露國を動す程の雄辯を爲す人物は一人もあらざるなり革命の暴擧に拍手し國事犯の爲に二十四年間獄中に繋がれたるカラウルフ氏の智慮ある演説を靜聽せる地方會議には一人の人物もあらざるなり

怪物は露國を横行して活動せりセバストポールには水兵の一揆あり怪物は唯り政府に對してのみならず全露國に對して露國の自由獨立と其良制度の爲に戰ひを宣せり地方議會に於てペトルンケーウイチ氏は政治的暗殺なるもの我れ其意を解するも政治的掠奪は其意を解せず我は卿等の意を解する能はずといへり彼等地方議會員は革命黨を以て尙ほ彼等が手套をかけ燕尾服を着け恰も高貴の紳士の如くに日々大臣や地方長官又は市會議長などを訪問して秩序恢復の談論をなし居る者と想像せり然るに革命黨は方法の如何を問はず其血も自己の權利も敢て惜まざる權勢家にして又虚榮家なり彼等は其同盟者を到る處に見出し賤民にも暴兵にも命令を與ふるなり其命令たるや何人も督せざる命令なるも亦凡ての民衆に聞ゆる事恰も警鐘の音の如き命令なり彼等は命令を下より上に上より下に傳へ恰も暴君が其僕を毒樹を取りに遣すが如くに其命令を傳へ——僕は主君に其取りたる毒を持來りて自ら死するが如し革命黨は恰も嗅覺の鋭敏なる犬の如く能く自己の味方を嗅付け手まれ足まれたて敢て談判を要せずに人々を引き付け民衆は皆彼等に從へり是れ恰も美人の中に在るドン　ザアンの如く美人は皆彼の爲に惱殺せらる可し嗟卿等は露國の革命は果して如何なる者なるやを實驗せざるなり革命は今僅に始められしばかりにて革命はたゞ僅に其爪先きを現はしたるに過ぎず左れど是れ實にレルネの怪蛇たる事を記憶せざる可らず而して此怪蛇の征服者たるヘルクレスは是れ全露國全社會全露國民なり左れど全露國は今何事を爲し居るか彼が言は一も聞かれず國民は皆その堵に安せず或は慟き叫び或は恐れ慄き或は外國に逃れ或は資金を外國に投出し或は官憲に信賴せり而して官憲は口を酸くして喃々辯ずる所多きも更に要領を得ず彼等は何處に何人と何事を爲し居るにや彼等は雲の上を翔けり居るに非ざるか

日露戰爭後の列國海軍

曩に我が戰後の海軍に就きて論じたりし巴里シエークルは今又戰後の列國の海軍に就きて述べて曰く

日露戰爭中に起りたる海軍は現時の各國海軍に最も興味ある運動を惹起さしめたり。然れども此運動たるや齊一にあらざれば、其が一般の趨勢を見出さんことは甚だ困難なり、何となれば各國海軍の採擇する處の艦型は何れも相同じからざればなり。各海軍當局者の其見解を區々にせるは甚だ著しきことにして、各國が去る六月以降計畫せる設計中に、幾分にても鮮明なる成説を發見せんことは殆ど庶幾すべからざるのことなり。されば其見解の如何に就きては、今こゝに説明するを得されば、單に各國の見る處を列示するに止めん。



A NEW ORDER OF THINGS FOR RUSSIA.
FREEDOM (to the Czar)—"Is this to be my throne?"
—*Amsterdam.*

先づ第一に擧ぐべきは英國なり、英は海軍の大勢力にして、其が日本との同盟の地位は八月十日の對馬海戰の結果に就きて、大に同國海軍の造船計畫に裨益する處ありたり、のみならず英國の一士官は東郷提督の艦隊に搭乘して、各運動に參加して研究する處ありたり。故に英國は何れの他の歐洲列强よりも多大の教訓を得たる筈なり。同國海軍當局者は、爾來永く取り來りし習慣を破りて、今日は最早其造艦の設計に就きて公示せず、六週間前にポーツマウスにて起工されたる新戰艦の特性に就き、又裝甲巡洋艦に關する計畫に就きても秘密を格守せり。此戰艦ドレッドノウトに就きて知れ亘れる處は、甚だ少く、其噸數が殆んど一萬九千噸其の速力が廿一浬、其機關の力が二萬三千馬力、其砲熕が三百五ミリ砲八門二百三十四ミリ砲の十門なることの明かなるのみ。又裝甲巡洋艦に至りては何人も其如何なるものたる可きかを知るものなし。合衆國にては、デウエー提督の主宰する海軍省の本部は、一萬六千噸と一萬八千噸との噸數を有せしめんとの見地より

して國會の承認したる戰艦ミシガンとサウス、ダコタとの起工を停止せしめたり。されど造船官會議は、此噸數增大のことを非認したれば、十の九迄は最初の設計通りにせらるべし。

露國にては、海軍當局は極東の事變の爲めに、著しく其見解を變改する處なし、見よ露國は日本が千九百四年の始め即ち戰爭以前に注文したりし者と全く同一の戰艦を英國に注文し、又旅順口にて各戰鬪に參加したりしバーヤンと同一艦型の裝甲巡洋艦を佛國に注文したり。要するに露國は眼を過去に着け居るものにして、其の戰艦と巡洋艦とは戰爭以前の時代のものに屬す。

次いで獨逸にては、大噸數の必要なること十分に認められ、日露戰爭の教訓は他の何れの國に於けるよりも重視せられ居れり、政府が一面千九百年の艦隊建設法に修正を加ふるが爲め、又一面明年に及びて戰艦と裝甲巡洋艦との一新種類を創出せんが爲めに、準據したりしものは、實に主として此教訓なり。獨逸海軍當局は千九百年の案中に見えたる巡洋艦の上に、六隻の新裝甲巡洋艦を增加せんことを求めたり、而して此等の巡洋艦を以て甚だ有用のものと信じ、戰艦の數と同一に達する迄、之を增加することを必要とせり。而して其戰艦に至りては、其數にあらずして其實力の增大するを見る、即ち獨逸の計畫は今日にても依然三十八の戰艦建造の方針を執り居れども、今日迄一萬三千二百噸以上に進められざりし噸數が、一萬七千若くは一萬八千噸とせられんとするのみならず、其砲熕の最大口徑の二百八十ミリなりしものが、此等の新戰艦にありては、既に各國海軍が數年來採り來りし三百五ミリ砲を裝置せらる可し。猶裝甲巡洋艦の噸數も亦一萬千五百噸より一萬五千噸に增大さるゝことゝなれり。



THE BIG FIRE IN RUSSIA.
NICHOLAS—"Strange! I thought to blow the fire out, but I've only fanned it."
—*Ulk* (Berlin).

次に又佛蘭西にては、海軍當局は議會に一の造艦案を提出したるが、其大略を示せば、此案は噸數一萬八千、速力十九浬にして、水雷艇の攻撃

を防止するにも大口徑砲を備ふのみなる艦と、他に二種型の裝甲巡洋艦とを建造するにあり、其他豫算委員會は一面に於て千九百六年度に前記戰艦三隻の起工を認容しつゝ、總噸數一萬八千內外、速力二十浬四分の一にして唯一種の大口徑砲（二百七十四ミリ）と一種の小口徑砲とのみを備ふる裝甲巡洋艦を建造することを要求したり。

吾人は以上擧示したる處によりて、日露戰爭の教訓が歐洲の諸海軍に於て同一樣に解せられ居らざることを知る、即ち噸數の增大は英、佛、獨、露に於て認められ居れども、合衆國海軍は必然的のことゝは、斷定され居らず、又中口徑砲を廢することは英佛に見るのみにして、露國は過般日本が注文したる香取の如く百五十二ミリ砲を有する戰艦を注文し、合衆國の戰艦も亦同樣中口徑砲を有すべし、唯獨逸の新戰艦に至りては、今猶噸數の知れ居るのみなり。又各國海軍は何れも三百五ミリ砲を採るに至りたれども、佛國の議會のみは最大砲熕の口徑を減少するに賛し、英國も合衆國も裝甲巡洋艦の必用を認めざれども、之に反して、獨佛露の海軍當局は之が必要を確信せり。



THE RUSSIAN IDEA OF FREEDOM.
—Maybell in the Brooklyn *Eagle*.

而して水雷艇の發達增加の趨勢に至りては、只獨逸に於て之を見るのみ。此時に際して日本の計畫を知るの最も興味あることたるは、齊しく人の認むる處。日本の海軍當局は、去る六月より六大本位戰艦の建造を計畫したり、即ち三百五ミリ、二百五十四ミリ及び百二十ミリの砲熕を有する一萬九千噸の戰艦二隻、三百五ミリ、二百四ミリ及び百二十ミリの砲熕を有する裝甲巡洋艦（日本當局は斯く呼稱せり）二隻と三百五ミリ、百五十二ミリ及び百二十ミリの砲熕を有する第二級の裝甲巡洋艦二隻となり。而して戰艦の速力は十八浬四分の一たる可し。

之を要するに日本は戰艦裝甲巡洋艦の何れもに、三百五ミリ砲を裝置し、又均しく百二十ミリの中口徑砲を採用せり。而して其戰艦に與ふる速力は極東の戰鬪に參加したりし戰艦

の有したる以上のものにあらず。從つて吾人は此日本の設計が確に歐洲諸海軍の進歩と相一致せざるを認む、而して以上列擧し來りし六ヶ國の造艦方針を概見すれば、日露海戰の教訓が各國夫々異樣に解せられ居ること、及若し强ひて其間に近邇する處の見解を求めんには、最も類似せりと覺ぼしきはまだしも佛蘭西當局者の見解と日本當局者のと異なりたることを云ふより外なきなり。

其は兎に角、爾來經驗上の教訓を缺たりし多くの海軍の問題を、幾分か解決規定すべき筈なりし極東の戰鬪が、其斯待されたりし結果を生ぜざりしことは明なり云々。

前號に豫告して本號に掲載する能はざりし

幸田露伴氏
竹越與三郎氏
堺枯川氏

の三文は次號の誌上にあらはるべく又

中村進午氏

の論文も仝號に掲載せらるべし



燈下の想ひ

島村抱月

○唯物觀でなく、唯心觀でなく、別に超絕一味の境は認めながらも、なほ其處に、宿命と言はふか、盲運命と言はふか、黑い冷たい、至嚴至酷な、機械的計畫が天地を支配して居るやうに思はれるのが予の性癖である。

○而して此の二つのもの、超絕一味の實體と機械的宿命的計畫との合體した所には、一種崇高な、而も物凄いやうな、荒凉限り無い天地が開けて來る。

○されども、此の天地を明かに知識の鏡に寫し取らうとする時は、むしろ下つて唯物觀に入るの傾を生ずる。機械的、唯物的といへども、之れを絕對觀に移すとき

は　ここに所謂物、所謂機械以上の意義を生じ、價値を生じ、併せて趣味をも生ずるの趣がある。

○物と名はつけても、絶對觀に入れば、實は既に物で無いのであらう。唯我等が之れを知識の對當とするとき、則ち物的模索の形を成すに過ぎない。されば假りに是を物と相擬して考量するも、亦た妨げぬではないか。

○之れを意識の表よりいふときは、因果以上の不思議もあれば、意志自在の不思議もある。併しながら一旦之れを意識の背に探ッて、彼處に因果あり宿命ありと觀るときは、やがて展開して來るものは、夫の廓寥の大天地である。

○我等が自然法と呼ぶものは、唯我等の意識の窓より漏れたる、大自然法の一連鎖のみ。始めと終りとは知るべからず。一連鎖斷つときは、其の間もまた不思議である。因果以上といひ、自由の意志といふ、要はみな此の方幾尺の窓に透けたる部面を稱するのみ。

○夫の精神的感染といふものは、神秘の語である。夫の思潮の影響といふものは、理知の語である。二つながら意識の表面を敲くの聲であることには相違はない。今若し之れを意識の背より望むときは、兩者ともに水面に動く波紋の如く、一纖綫の微も因果の連續を離れては存して居らぬ。此所に起こりし一波は、彼處に起こりし一波の連續たるに止まれども、我等の知識は其の連續を見ること能はざるが故に、感染といひ影響といひて、たゞ模稜の辭に之れを糊塗し去らんとするのみ。

○野口某の後には人肉を　り取るものが次いで起こッた。野口某は三人までも同じ方法で人を殺した。藤村操の後には青年の自殺者が相ついで出でた。一昔の前北村透谷、藤野湖泊等の自殺時代も似た狀勢であッた。人は之れを流行といひ、模倣といひ、傳染といふ。されども予は其の底に髣髴として黑闇々たる大機械の動き行くを見るの情に禁へぬ。

○近者我が國にも宗教的機運の勃興といふことが著しく目につく。豫言者、解脫者。弘法者の相次いで出でんとする、はた兩三年來英國ウェールス附近に、宗教熱

傳播の勢の凄じさ、是れも亦た機運といひ、感染といひて輕く説き去らんとする者もあらうが、其の底なる宿命の機械は、如何に作用してゐるのであらうか。何となく想はるゝのは此れてある。

丙午の話

文學博士　白鳥庫吉

日本では大概丙午を以て不吉な年と考へて居るが、是れは全く支那の陰陽説に基くものなることは人のよく知る所である。而して此陰陽説なるものゝ道理のないことも從來人の論じた所であるから、今更之を辯ずるの必要がない。で自分はこゝに丙午といふ言葉の意味と馬といふ言葉について些か話をして見たいと思ふかゝることも此丙午の年に於てはあながち無用の事にあらじと信ずる。

丙午の丙の字をひのえといふのはどういふ意味かといふに、人も知る如く、甲乙丙丁戊己庚辛壬癸の十干を木火土金水の五行に相配して出來たものである。即ち丙丁の二つは火に當るので丙を以て兄とし、丁を以て弟としたのであつてひのえといふのは火の兄といふことである。丁をひのとといふのは火の弟の意味なることも別に珍らしい議論ではない。此ひのえに十二支の午を配したのが丙午で、今年が恰度其丙午の年に當つたといふに過ぎぬのである。

此丙午の年を以て大變不吉な年と信じ、或は惡い事が多いとか、或は大火があるとか、或は惡人が生るゝとか、色々樣々の心配をなす人があるが、然し之を日本語の上から考ふれば丙午といふのは決して不吉な年にあらず、寧ろ非常の目出度い年といはざるを得ぬのである。

第一火といふものは日本では不吉のものでない。日本は日（火）の國であつて太陽を崇拜する。我等の祖先は天照大神である、却て目出たい意味がある。又言語の上からいうてもハ行の音は、或は大きいとか高いとか、ホメルとかホグとかいふやうな目出度い意味の字が多

い。クシビなどというて靈妙なるなることをビといふ。太陽は其自身に於て崇拜しなくとも言葉の上で目出たいのである。此年は即ちヒである、ホである。其れにひのえのえといふのは物の根本をいふのであつて即ち又柄である、原始といふ意味がある、人にあつては、最初に生れたといふ意味であつて兄となる、大中兄皇子などの名にも兄と讀ましてある。兄は即ち根本、原始といふ意味で又高い優るの意味がある。弟は劣るといふ意で後に生れたことの意味である。今年は即ちえであつて優る年である、兄の年である、此れも亦目出度い年である。故に目出度い所の火に目度出い所の兄を配した丙(火の兄)はいよ／＼以て目出度しといはざるを得ぬ。

夫れから午といふのは如何なる意味かといふに午は馬であるは素よりいふまでもない。而して馬といふものは何處の國でも貴ばれたものである。今でこそ馬は荷物を負はせたり、荷車を引かせたり、賤しき勞働に使ふのであるが、昔は決してかゝることをさせず、大概軍用に供したものであつて餘程尊重したものである。若し軍用に非ざれば競走の如き華やかなものに使つたもので、賤業に用ふる樣になつたのは後世の事である。夫れで此馬といふものは昔から日本にあつたものかといふに、古代の記錄にたゞ一箇所出て居るのみである。即ち古事記の須盞嗚尊が天班駒をうちはぎにはぎて天照大神を驚かしたとあるのは人の知る所である。若し此駒といふのを小馬の義に解釋することが出來れば、日本には上代から馬があつたといふ證據として宜しい。さりながら今少し根本に遡つて、日本の上代に馬はあることはあつたが、これは日本にオリジナルなものであつたか否やを調べて見やうと思ふ。若し日本にオリジナルなものとすれば記錄以前即ち言語學によつて研究せざるべからざることゝなる。今馬(ウマ)といふ字と語源を接して居る語は支那の馬(マ)であつて、又南方のシャン族も同一である。其外支那の近傍に於て馬を呼ぶにマ行の音を以てするものは大概支那から輸入せられたものであつて、支那が其本である。夫

だ故に言葉の形の上より觀察すれば、日本の馬が支那から持て來たもの丶樣に考へらるゝ。然しながら自分の考では支那は馬の根本地でない樣に思ふ。馬の根本地は寧ろ漠北(今の蒙古邊)であると思ふ。水草を逐うて生活する氏族が最も馬を必要としたので漠北などは確かに馬の根本地であると思ふ。而して此地方では馬を呼ぶに何といふかといふにモリといひ、滿洲語ではモリンといふ。韓語ではマルといふ。此三國の語は皆語源を同じくして居ることは一目瞭然である。又支那のマといふのも蒙古語滿洲語のモリ、モリンから來たものに違ひない。一體支那はモノシラブル(單綴語)が多い國であるから、外國語の多綴語を採る時でも之を單綴語にする例が澤山ある。故に馬をマといふのも滿洲語、蒙古語のモリン、モリを自國の單綴語に直したものと思はるゝ。であるから自分は馬の本地は蒙古滿洲にして支那は之を輸入したものと察する。又韓語のマルも明かに蒙古語を引いたものである。たゞ日本人がウマといふものを支那から輸入したか、韓國から輸入したかの問題は未だ解決せられぬ。言葉の形のみよりいへばウマといふのは支那のマより來りたること疑ない樣である。然しながら韓語でもマルのルを廢してたゞマといふ場合があり得ると思ふ、例へば韓語では火のことをブルといふが日本では之をヒともいひほともいふ。故に此ブルをヒ又はホといふ例に從へば、マルといふ語をマ(ウマ)といふ樣になつたといひ得るので、此點から見れば日本の馬は韓國から來たもの丶樣に思はるゝ。

扨此馬(ウマ)といふ語が如何なる意味を有するかは自分も研究中のことであるから未だ確定說はないのであるが、ウマといふのは嘆美の語であると思ふ。之を日本語の語根(ルート)より論すればウマ(甘)である、美である、韓語でも甘いことをマといひ、蒙古あたりではアムタイといふ。支那語では味(ミ)美(ミ)盛(モ)などゝいふ語があり、語のルートを比較して見ると何れも皆嘆美の意味がある。故に今の所ではウマといふのは嘆美の詞であると思ふ。かく考へ來れば馬といふもの丶尊重

せられたといふことは其馬といふ名稱の上にもありありとあらはれて居る。今年は決して不吉な年であるまいと思ふ。

馬が古から尊重せられたことは以上の如くであるが、其の中最も尊重せられたものは天馬である。其天馬の中でも最も尊重せられたのは大宛國の汗血馬であらうと思ふ。此話は人のよく知て居る所であるが簡單に述べて見やう。昔漢武帝の時張騫奏して曰く、大宛國に名馬あり、名つけて汗血馬といふ、日に行くこと千里、日中血を汗にかくと。そこで武帝は之を得んと思うて金塊で馬の形を作り、此金馬を以て汗血馬に代へんことを求めた。所が大宛國の王樣は漢は遠隔の地であるから惡いことをした所で如何ともするを得ざるべしと思ひ、其黃金の馬を取つた儘で汗血馬をば漢に送らぬ。で武帝は大に怒つて大宛伐つべしと叫び、李廣利を貳師將軍に任じ、大宛を伐て汗血馬を持ち來るべしと命じた。貳師とは支那語ではない、大宛國の城名であつて、其城に山があつて、其山の中に汗血馬があつたのである。故に貳師將軍といふたのは貳師城を屠りて汗血馬を持て來いとの意味合と見える。貳師は叉ニサイアと語が同じでヘロドタスの歷史にも汗血馬のことが出て居る。然しながらヘロドタスのニサイアといふ牧場と、大宛國の貳師とは場所が違ふ樣である。兎に角名馬を產する野をニサイアといふたものと見える。武帝は李廣利をして大宛國を破らしめて、名馬數十匹、馬三千匹許をとつて終局を告げた。これは馬に關する歷史の中で最も有名なるものである。此汗血馬といふのが眞に血を汗するかといふに此れは實際のことである。此汗血馬のことを西の方ではトルコマン、ポールスといふ、之れも眞に血を吐く。首長く尾も亦長く、日に走ること百哩、前膊の上に氣孔あり、此氣孔より血が出る、これは眞の事實である。支那の千里といふは先づ日本の百里であるが、百里はどうであるか五十里は確かに走る。かゝる駿馬であるから非常に尊重せられたに違ひない。

又アッリアン人種中で特に波斯に於て馬を犧牲として

日の神即ち天を祀る。又白馬を河中に投じて神を祀る。これは馬を尊重するの證據である。馬を日の神に犠牲にするは日の神は最も速いものであるから世界で速く馳る所のものを供するといふ意味で馬を用ふるのである。馬の中でも殊に白馬を尊ぶのであるが、此習慣は古のイラン人に見える。波斯のみならず東方は一般にさうで、又支那でも支那の王と匈奴と會ふ時は白馬を刑すとある。白馬を切て其血を吸ふのである。これは白馬を以て目出度いものとして居るからである。それで目出度い時には必ず白馬が出る、仙人が來る時は必ず白馬に乘る。後漢の明帝の時、大月氏に使をやつて經文を持て來るときも白馬に乘せた。故に白馬寺といひ、又嚮をいふにも白馬非馬にあらずといひ、詩歌にも多くは白馬を入れる。黑馬といふても差支ない筈であるが、白馬は目出度いものとしてあるから白馬を引出すのであらう。かゝる目出度いものゝ年であるから今年は決して不吉な年でないと思ふ。

白鳥博士の談話を筆記せるもの、若し誤謬あらば記者の責なり

峽畝竹川藤太郎氏は清國四川省重慶市に於て發行せる漢字新聞、重慶日報社長にして兼ねて、主筆記者たり、今、疾を以て東京に歸り、江東に痾を養へつゝあり。左に掲ぐるは、氏が病餘の身を以て、筆を呵し、社友某氏に送れるもの、掲げて讀者の一粲に供す。

○四川の大を語らん乎

竹川峽畝

○四川は、古への所謂益州なり、巴蜀なり、其地、山川、險塞、沃野千里、古來天府の實土と稱す、其廣袤を以てすれば、日本全國より廣く、其人口を以てすれば、日本全人口よりも多く、又、支那全國中、其面積と人口とに匹敵すべき行省あるなし。省内所在、山に五金を藏し、地に五穀を産し、其他、人生必需の天產物、一として備はらざるなく、十八省中唯一の寶庫にして、夙に内外人の爲に、嘖々、稱揚せらるゝもの偶然にあらざる也。今日清國を言ふ者多くして、川峽の事情に通ずる者、尠し、聊か、邦人の爲に、四川の大を語らん乎。

○巫山以西に浮世の風を通ぜしめざりし往時に在りては、よしや他國他省と交通杜絶するも、省内の物資のみに藉て、生活するとの何等困難なかりしなり。如今歐美大陸の、彼岸に澎湃たる波浪は、脉々として、來つて岷江の岸を洗ひ、外界に洶湧せる生存競爭の風潮は、旦夕、三峽の險を襲ふて、歩々、侵入するの時、巫山の神も、其昔し楚の襄王に邂て、戀愛の標本を世に示し、日々朝雲を以て帷帳とし、暮雨を以て行水する

程の伊達者なれば、バイオレットや、ローズの香水の、惜くからん筈はなく、何時しか森嚴の態度を崩しつゝ、ハイカラ風の通過を默許したりければ、シヤボン臭き文明の空氣は、滔々として竄入し來るに及び、舶來洋貨の需用、頓かに增加して、外界物資の供給を仰ぐに至りたるもの ゝ、倘し一たび科學的智識を應用して、夫の頑冥なる風水の神の手より、無盡無限の寶庫の鍵を奪ひて、遺棄埋沒しつゝある富源を開發するに力めなば、如何なる工業も、起すべく、如何なる製品も、自ら給するに足るべく、如し拔群の豪傑ありて、此富源、此境土、此民衆を提げ、起つて呼號せば、堂々たる一大獨立國を建設するに足るべきなり。

○

巴蜀の富饒、旣に天下に冠たるのみならず、其地の險、其人の勇と相待つて、武道天下に用ゆるの資源地たり、之を古史に觀ん乎、武王の紂を討つ、實に、巴蜀の師の勇鋭に賴れり。秦の富强を致せしもの、司馬錯張儀等をして、巴蜀の富源を占領せしめたるに因る。漢高巴蜀の力に資て、秦を滅し、卒に天下を有つ、公孫述の蜀に據るや、北、秦隴に連り、東、荊州に逼り、號して、盛强と爲す。諸葛武侯、地を此に相して天下三分の策を樹て、敗餘の劉氏をして、吳魏と鼎足の勢を保たしむ、李雄、此に據て以て跳梁し、晉人之に藉て、以て吳を併せ、隋人之に資て、以て陳を亡ぼし、唐、亦此に賴て、蕭銑を平ぐ。元末明玉珍、此に竊な負ふて、威命を擅にせり、方輿紀要の著者曰く、四川以て天下に爭衡せば、之を上にしては、以て王たるに足り、之を次にしては、以て霸たるに足る、其險を恃て之を座守すれば、即ち必ず亡ぶるに至らんと、能く四川の狀を悉せるものと謂ふべし。

○

四川は、過去に於て、天下を爭衡する者の爲に、重要視せられたるのみならず、將來に於ては、更に列國の視線を集中して、東亞に於ける政事上、實業上、凡ての競爭の焦點たらんとするの運命を有せり。夫れ四川無盡の富源は、世界列國の夙に流涎する所、惟、其行路難の爲に、まだ志を逞ふせざるのみ。

○

而かも、楊子江流域一帶の地を以て、自家の勢力範圍と認定しつゝある英國は、徒らに下流の地にのみ躑躅して、上流の四川を放過するは、佛作つて魂入れざるものなりとの懸念を以て、漢口より重慶に到るの鐵路を布設せんことを計畫し、更に又輓近西藏を自家の勢力範圍に入れたる餘勢に乘じ、西藏より東下して、成都に達するの鐵路を通ぜんことを夢想しつゝあり、此夢想は、夢想として、終るべきにあらず、早晚事實として、現出せんこと、瞭然。

○

雲貴二省を一人舞臺として、至大の勢力を擁しつゝある佛國は、望蜀の慾念燃ゆるが如く、折あらば、雲南鐵路を成都に迄延長せんものとて時々刻々、乘ずべき機會を覗ひつゝあり。

○

楊子江の下流に於て、日に、月に、英國の勢力圈を蠶食しつゝある獨逸が、客冬來、新に領事を重慶に置き、更に總領事を成都に出張せしめつゝあるが如き、米國が曾て一び撤去したる領事館を、今春來、再設するが如き、共に之れ將に大に爲すあらんとするの先聲として見るべく、何れの個處にも、均霑主義を標榜して、野次馬的に馳け出さんとする伊太利が何等の緣りもなき、雲南にすら、領事館の設置を要求したる程なれば、他日四川に來つて、列國の仲間入をせんとするや、知るべき也。

東の方、滿洲に志を逞ふする能はざる露國が、其鋒鋩を南方に向けて、

欝勃の氣を洩さんとするも、英國の高原を扼するあり、即ち南下の志を抛棄せざる迄も、火の燥に就き、水の濕に赴くか如く、幾年來、深く潜勢力を養ひたる、蒙古、伊犁、新疆の根據地より、東南下して、四川に闖入し、實際上よりは、寧ろ外交上に於て、王手飛車取りの機謀術策を弄すべき、好個の資料に供せんとするや、必せり。知らず、我日本帝國は、四川に對するに、如何なる態度を以てせんとする乎。

○

過去に於ては、東亞の問題は、淸國に攅り、淸國の問題は、滿洲に集りき、而かも近き將來に於ては、淸國の問題は、多く、四川に集中し、四川は、東亞大陸上に於ける、第二のバルカン半島として、政治上、實業上、列國の衝爭すべき一大舞臺たらんとするなり、余は、見聞を擧げて、四川の情況を語らんとす、徒爾にあらざるべし。

●川峽の舟楫　川峽が日本よりも廣き四川惟一の排泄口なるを知らば、其舟楫運漕業の、如何に盛大なるかを想像するに難からざるべし、川峽の起點なる宜昌の埠頭に輻湊せる船舶、萬を以て數ふへく、巫山縣雲陽縣忠州涪州等に在るもの、何れも千を以て數ふべく、夔州萬縣等にあるもの數千に上り、更に重慶に至れは萬を以て數ふべく、其他徵々たる山村水郭にして、百二百の船舶あるもの枚擧に遑あらず、行人此に至て所謂帆檣林立なる形容詞の空文字に非るを悟了する也、重慶以西の上流に於ても、亦復然りと雖も、此には只川峽の一區に就て言はんとする也、固より精確の數を知り難きも、幾萬隻に及べる大船小船、入り替はり立ち替はり、一上一下一往一來するもの、眞に絡繹織るか如しと謂ふべきなり、而して之か爲めに糊口を得て、江上に生を終るの苦力、無慮二十萬人に上ると云ふ、此に航行するの船は、支那ジヤンクてふ總稱の内に包含さるべきものなりと雖も、海岸に於けるもの、宜昌以東の下流に於けるもの、及び他の運河に於けるものゝ夫れに比して、其構造形狀少しく趣を異にせり、其種類は荷物船あり、客船あり、大は數百噸なるあり、小は數噸なるあり、千差にして萬別、一々名狀すべからず、而も其帆と櫓とに依て之を行り、竹綱を以て之を曳くもの、悉く同一なり、昔し九郎判官の爲めに臆病者と云はれたる、梶原一流の逆櫓なるものは、川峽の舟の特色として使用せられつゝあり、船の大小に依りて長短同じからざるも、或は三間或は四間、或は五六間にして、電信柱樣の丸太の、先きか扁平に削りたるものを、宛も五月幟の枠と竿とを其儘横に倒したらん如く、舩頭に据へ付けて、上下左右に廻轉し得らるゝ樣になせり、梶原の逆櫓は退却に便するものなるに、此は激湍急流を行くに、艫部にある梶のみにては、意の如く船を轉向する能はざるより、前後相應じて働くべく設けられたるものにして、逆櫓と云はんより、寧ろ前櫓と云ふべきなり、船の進行上通常定めつゝある部署を語らんに、一船の持主或は宰領にして、彼等の社會に於て老板(船頭或は親方)と呼ばるゝもの、艫部に在りて舵を取り、軍艦ならば司令塔とも云ふべき船屋上に屹立せる水夫長、舩頭にある水先の合圖に依り、或は自ら前頭の水路を望見して舵を右すべく又左すべく老板に合圖をなし、更に又一町二町三町先きの岸上にある曳子等と呼應しつゝ竹綱を伸縮し、風の方向を相て帆の揚げ卸しを命令するが如き、云はゞ一船の司令官なり、水先は舩頭に立て手に一丈半許の竹竿を携へ、行く〳〵水深を測り暗礁を探り、波紋を相て進むべき水路を船屋上の水夫長に合圖し、或は船の岩角に觸れ、砂洲に膠着し、渦旋に卷き込まれんとする場合には、竿を以て船を押し、舩頭の櫓を操縱するなり、舳部の常巡員とも云ふべきもの、船の大小に依りて或は二三人或は五六人あり、水夫長と水先との輔助として、帆の揚げ下ろしをなし、桿を操つり櫂を漕ぎ、其他一切の雜役に從事す、是等を外

にして、汽船の蒸汽にも比すべき主要なる動力は、岸上なる曳子の一隊なりとす、

●船の曳子　墨田川の渡し舟の如き小舟にあつては、一人の舵取と、一二人の曳手にて事足れども、此等の小舟は論外として、五六間以上の桅檣を有する船の曳手は、少ふして二三十人、多ふして五十人乃至百人なるものあり、前にも云ふが如く、岸より岸に水を湛へたる峡江の事なれば、渚にても深淵をなし渦旋をなしゝあるか故に、富士川の曳舟の如く、汀邊を徒渉すべくもあらず、又夔州以東宜昌に至る約八百清里の間は、特に兩岸削るが如く峭立して一平地なければ、断崖絶壁の間に、何時とはなく足跡を以て刻まれたる羊腸崎嶇の道(道とは名斗り)、而も増水季と減水季とに依りて變更しつゝある幾條の道を、其時々の便宜に任せて或は高く或は低く辿り、匍匐ふ如くに攀ぢ登り攀ぢ降るなり、此際山脚地角を迂回し、或は龜裂せる谷間を越る爲めに、船と曳手と隔絶して相見ざるに及ぶや、竹綱を三四町乃至五六町の長に伸張し、又兩々雁行して進み得らるべき平夷の地に出れば、再び綱を短縮す、其之を伸縮する毎に、船より大鼓を叩き、或は高聲に呼びて合圖をなす也、曳手の部隊中に、一人或は二人(船の大小に依りて)の綱外づしあり、之は曳手と船との間にありて、彼處の岩角此處の石頭に纏はる綱を引き外す役目にて、奇石怪岩の亂立せる間を猿の如くに跋渉し、深淵の上に蛙形に斗出せる崖角の何等の足溜りもなき劍の峰に身を支へて、綱を外づすなど、側目に見るさへ動悸を催ふし手に汗を握る程なり、船と曳手と力競べをしつゝある綱には、何處にも一點の緩み撓みなければ、之を取外づすには非常の努力と熟練とを要するものにて、若し素人ならんには、足掛りのよき平夷の個處に於てすら、綱の餘勢にて水中に跳れ飛ばさるゝことあり、されば此役目を勤むる者は、輕捷にして膂力あり熟練あるを要するより其勞銀も普通の曳手に倍加せり、曳子等は終始陸上にある者に非ず、境窮まり道盡れば本船に乗り移て櫂を取り、足場のよき對岸に迄漕ぎ行き、或は滿帆風を孕(ハラ)んし驅走する時、本船に歸て休息するなり、五十人乃至百人の曳子を引卒する大船にあつては、本船と曳手との間に於ける雜用を辨する爲めに、一二隻の小艇を伴ひ居るを以て、本船に乗り切れざる曳手を分乗せしむる也、

●勇ましき欸乃　峡江の流れを上下する舟子等の欸乃は、最も勇壯にして此行途に於ける名物の一なり、夫の曳子等を監視する所の苦力頭あり曳子等の側にて音頭を取りつゝ、節面白く木遣り歌を唄ふや、曳子等一同聲を揃へ之に唱和し、恰も學校生徒の唱歌にも比すべき其音聲、峡谷の彼方此方に反響して勇壯言はん方なし、而して其音調の緩急高低に應じて、歩々足並を揃へ、又歌の終結に至る毎に必ずチーチーチーと叫ぶこと、猶ほ樽天王を擔ぎ廻る小供等の、ヨイシヨ〱と云ふか如く、此時は通常よりも其歩調を早めて疾歩する也、本船に歸りて櫓槽ぐ時も亦此の如く、聲調と一致して櫓を動すなり、下江の時は曳子なるものなく、舟子等皆舳部に在りて櫓を押し櫂を槽ぐものにて、流れ急にして船の駛行すると同時に、其歌亦自然急調ならざるを得ず、而して激流を横ぎり急灘を越へ、或は今一と息にて彼岸に槽ぎ付けんとする場合には、歌を唄はずして只アーウ〱と叫ぶ、恰も千萬の鴉群の鳴くが如くにして、其アーウと一叫する間に櫂を一廻轉する也、大船の下る時には櫂に代るに二本の櫓を以てす、櫓は船體と並行して其兩側にあり、長さ六七間、數十人の苦力之に取縋りて運轉するや、其一廻轉櫂よりも快速なるが故に、如何なる場合にも歌を唄ふことなく、アーウよりも一層急調にて、日本人の耳にはヨイシヨ〱と聞ゆるが如くに、早口に叫び將て行く也、

(未完)

歴史に見えたる「萬歳」

有馬祐政

バンザイてふ喚聲は、近來邦人の盛んに發する所なるが、日露戰爭以後、博く歐米人にまで呼號せられて、今や世界各國この語を知らざる者稀なるに至りしは、我が國のため、眞に萬歳を唱へて、祝せざるべからざる吉事なり。

然し、此の語は、本と支那より出でたるものにして、萬といひ歳といふ文字の支那字なるにても、明かに知らるゝ所なるが、試みに其の歴史上に現はれたるものを擧げんか、「漢書」の武帝紀には、詔の中、左の句あり。

朕親登二嵩高一。御史乘屬、在二廟旁一吏卒、咸聞呼二萬歳一者三、

是れ恐らくは最初ならん。次に「後漢書」に記する所を見るに、孝獻帝の時、董卓なる者、凶暴太甚しく、自ら太師と爲り、車服天子に僭擬し、宗族朝に並び列せり。司徒王允等之れを憤り、密かに卓を誅せんことを謀る。中郎將呂布膂力人に過ぐ、卓之れを愛信し、常に布を以て自ら衞る、嘗て少しく卓の意を失せしかば、卓戟を手にし布に擲てり、布避けて免るゝことを得しが、允此の機に乘じて布に結び、內應を爲さしめき。卓入朝の際、允等勇士を宮門に伏せて之れを刺す、卓車より墮ち、大に呂布を呼ぶ。布曰はく、詔あり賊臣を討ずと、聲に應じて矛を持ちて卓を刺し、懷中の詔板を出して以て吏士に令せり、吏士皆萬歳を稱し、百姓道に歌舞せりといふ。

其の他、「北史」の高思好傳には、軍士皆曰はく、安南王來らば、我輩唯須らく萬歳を唱へて奉迎せんのみとあり。「五代史」劉延朗傳には、高祖忻州に屯す。屯兵忽ち擾じて、高祖を擁して萬歳を呼ぶ、高祖懼れて三十餘人を斬りて、而る後止むと記し、「宋史」韓世忠傳には、世忠の子彥直、六歳世忠に從つて入つて高宗を見る、命じて大字を作らしむ、即ち命を拜し跪きて、皇帝萬歳の四字を書せしかば、帝之れを喜ぶ、其の背

を掛つて、他日の合器なりと曰はれたりとあり。正史以外なれども、漢時代の作たる「西京雜記」には、昭帝の時、茂陵の人寶劍を獻ぜり、上銘して曰はく、直千金、壽萬歲と。又後漢王充の「論衡」にも、漢高祖の時、陸賈の新語、一篇を奏する每に、左右稱して萬歲と曰へり、と記せり。更に白樂天の桐花詩に曰はく

爲レ君長高枝。鳳凰上レ頭鳴。一鳴君萬歲。壽如山不レ傾。

之れより先き北周の庾信の表には、水遠二千年一、山稱二萬歲一の句あり。初唐四傑の一人盧照鄰の詩には、九州四海常無レ事、萬歲千秋樂未レ央。其の他謝偃の記には、懸二千齡之期一、流二萬歲之響一。盧綸の詩にも、山呼二一萬歲一、直入九重城。又王建の詩には、天子千年、萬歲未レ央、明月淸風とあり。劉駕にも、天子壽萬歲、再拜獻二此觴一の句見ゆ。蓋し概ね天子の長壽を祝せるの辭たるなり。

顧つて我が日本に於てはいかんといふに、又決して近代の事にあらず。「日本書紀」によれば、夙に雄略天皇の頃に於て唱へられたること明かなり。是れ恐らくは我が國における萬歲の最初なるべし。其の記事をのべがきにすれば左の如し。

五年春二月、葛城山に獵したまひし時、瞋れる猪草の中より不意に現はれ出でゝ人を逐ひしかば、舍人樹にかけ上りて、色を失ひ、爲すことを知らざる間に、その猪直ちに來りて天皇を噬まんとせしが、天皇剛健武勇にましませしかば、弓を用て刺し止め、脚を擧げて踏み殺したまへり。後其の舍人を斬らんとしたまひしが、皇后聞きて悲痛に堪へず、諫めたまふやう、國人皆、陛下かりしたまひてしゝ好みしたまふ、むしろ可らざるかと謂へり、今陛下瞋れる猪のために舍人を斬りたまはゞ、陛下はたとへば豺狼に異ることなからむ、と曰はれしかば、天皇御感斜ならず、即時皇后と共に車に上りて歸りたまひき。其の際、天皇親ら萬歲と呼びたまひ、且つのたまはせらるゝやう、樂しきかな、人皆禽獸を獵る、朕は善言を獵り得て歸ると、喜びながら還御まし〱しきといふ。第十四卷二百四十

一頁（國史大系本）に見えたり。

次に見えたるは、「續日本紀」にして、實に桓武天皇の御代なり。延暦七年四月、去冬より雨ふらず、もはや五箇月を經て、灌漑已に竭き、公私望み斷えたりしが、癸巳の日早朝、天皇沐浴、庭に出でゝ親しく祈りたまふ。しばらくあつて、天闇く雲合して、雨降ること滂沱たりしかば、群臣舞踏して、萬歳を稱へざるはなし。因つて五位以上に御衾及び衣を賜ふ。咸な以て聖徳至誠祈請の感ずる所なりと爲せり。第三十九卷七百三十九頁（國史大系本）に出でをれり。

降りて、後醍醐天皇の延元元年に、又萬歳を唱へしこと、「神皇正統記」に見ゆ。其の年正月十日、官軍又破れて、足利高氏の軍大擧來り犯せり。依て天皇比叡山東坂本に行幸して、日吉神社にましくけり。其の間に、内裏も皆燒け、累代の重寶も多く失せにけり。昔よりためしなき程の亂逆といふべし。然るに、陸奥守鎭守府將軍源顯家卿（北畠親房卿の嫡男）この亂を聞きて、義良親王を先にたて奉り、陸奥出羽の軍兵を率ゐて責め上り、同十三日近江國につきて事の由を奏聞し、十四日に江を渡りて坂本に參りしかば、官軍大きに力を得て、山門の衆徒までも、萬歳をよばひき。同十六日より合戰始まりて、卅日終に朝敵を追落す、やがてその夜還幸し給ふ。卷の六に記るされあり。

以上の事實によりて考ふるに、我が國にありては、上下共に、皇室又は國家に對する、歡喜の眞情を發洩せんがため、古より此の萬歳の語を用ひしこと明かなり。而して室町時代以後よりは、或は雅樂、或は俗謠などの名にさへ附けられて、謠曲高砂には萬歳樂の名見え、又幸若萬歳てふ名稱も傳へられ、下りては、地方民間に行はるゝものに、三河萬歳、越前萬歳等の名ありて、此等は今猶ほ存する處なるが、いづれも主として正月の賀儀に對し、謠ひはやさるものなり。

然るに、今や誰人に對しても、其の幸福長久を祈る際に、必ずバンザイを唱ふること、なれり。又以て時代の思潮の變遷を察知し得べきことならずや。

怪物傳（二）

覆面冠者

一

啊呍鉢羅婆

日露戰役を現じた日本の社會は、一二年來、種々の人物を、吾人の前に出して居る。特に、靈魂の救濟を呼べる宗教社會に、最も著しいやうに見受くる。我は神なり、と稱せる宮崎某の出たのは、つい先頃のやうであつたが、間もなく、大阪朝日に、自ら豫言者なりと廣告せる某出て、續いて、法學士川上某も、無我苑に入りて、轄然大悟せりと自稱して、讀賣新聞に、人生の歸趣を出してゐる。加之、雜誌明星紙上にも、豫言者なりと稱せる文學士某ありと。アヽ、是れ何等の現象ぞや。

二

併しながら退いて篤と世間を點檢して見ると、宗教界に、斯くの如き人物が出るのが、今日に初まつたとてなく、數十年、數百年、數千年前より、旣に屢々吾人の經驗してゐる所て、別に怪しとすべき現象でもないが、兎に角も、青年社會より、右の如き人物が、頻々として、出て參るのが、局外より眺めて、余輩は、言ふべからざる趣味を感ずる。

然かも、怪物傳の記者として、渠等を見るに、その豫言者等は、社會的現象としては、或は若干の價値があるかも知らぬが、その人物は、經驗なく、波瀾なく、一本調子の――學校の窓より人生を眺めて、轄然として、大悟した連中が多く、甚だ興趣に乏しいので有る。といつて、余輩は、敢て、近時現出しつゝある宗教的人物に對して、侮蔑の意を持つてをる者てない。何れも、眞面目に、人生を見て居る人て有らう、身にしみ〴〵と、靈魂の救を叫んでゐる人であるに相違あるまいが、人物といふ點から見ると、單純て、どうも乳臭いのに興が醒める。

そして、余輩は、世に惡魔外道を以て稱せらるゝ、

淫祠邪教の中に、幾多の人物――といふと、語弊はあるが、我れ等の如き俗人の眼より見ると、閲歴に富んだ趣味の多い人物を見受くるのが、奇妙といへは奇妙て有る。

余は、その中より、啊呍鉢羅婆と稱する一種の人物を引つこ拔いて、紹介しやう。

三

啊呍鉢羅婆――何心なく、電話帳を繰つて居ると、「ニ」の中に、酒醤油仲買の西田某と、酒類營業の西谷某との間に、西田アムハラバと稱する名が見ゆる。住所を見ると、小石川區關口臺町。電話番號は、番町八百九番。

啊呍鉢羅婆――是れ如何なる人物ぞ。試に、小石川關口臺町に赴き、その住居を見ると、門構への厳めしい建物、庭には、塵一本も無い。そして、屋内は、凊閑として、人聲だも仕ないのである。……暫らく佇立して居ると、目白僧園の方より來れる二頭曳の馬車は轆々として、此の建物の裡に入つてゆく。式臺に出て、迎ふる者を見れは、綺麗に着飾れる二人の少女。

啊呍鉢羅婆、――アヽ是れ如何なる人物ぞ。余は、凝乎と、馬車より出づる人物を見て居ると、髪を長く延ばして、後邊に垂れたる白衣の道人てあつたのに、意外に打たれたのてある。

路人に問いて見ると、今、此の邸内に入つた白衣の道人は、一部に、今世尊を以て唄はれてゐる啊呍鉢羅婆其の人てあつたといふのに、二度喫驚したのてある。

啊呍鉢羅婆、何等奇怪の名ぞや。然かも、姓名の奇怪なるが如きは、二の次、渠は、戒律堅固を以て名ある釋雲照師を呼ぶに、「賣僧坊主」を以てし、自ら任ずるに、化物退治を以てして、此の目白臺に、邸宅を構へたといふのてある。即ち、髪を長く延ばせる、此の白衣の道人は、釋迦の再來を以て任じてゐる大宗教家てあつたのてある。

馬車に跟いて、世尊に會つて見やう。

四

先づアムハラバの詳細に入る前に、渠に關する風聞

の余が耳に入りしものを揭けて、序言に當てよう。渠は、傲然として、釋雲照律師の住宅と、筋向に門戸を張つたばかりでなく、雲照律師が、貴族や、富豪の間に、布教を試みてゐる其の例に傚ふて、同じく貴族富豪の間に、勢力を扶植せんとしてゐる。

そして、勢力扶植の第一着手として、噓か、實か、知らぬが、今は冥界の人と爲つた田中宮內大臣の夫人を信者の一人と仕た。啻に夫人を生擒せるに滿足せず、田中氏其の人とも親しみ、實に田中氏の手を以て、侍從武官長岡澤精氏とも、親しんだのは大手柄、即ち、渠は宮內大臣と侍從武官長の兩岐よりして、その大抱負を、他の宗教家の入る能はざる方面に攄べんと仕たのである。加之、將を得んと欲せは馬を射よの筆法に傚ふて、婦人社會に注意の眼を放つたのは、宗教者の常手段とは言へ、渠は最も無遠慮に、巧妙に、その手段を盡したのには、驚かれる。斯くて、田中夫人に於て、成績を收めたのであるが、當時渠の眼に留まつたのは、下田歌子と、舊との河野廣中夫人。下田歌子女史は、如何であつたか、聞き洩らしたが、河野廣中夫人の如き、一時は、非常な熱心を以て、啊呍鉢羅婆の說法に耳を傾けたので。河野夫人のみならず、婦人社會に一種の勢力を有せる原亮子――金港堂夫人の如きも、屢々啊呍鉢羅婆の門に出入したやうに聞いて居る。渠は、斯くして、徐々と、勢力を作つてゐたのである。

渠は、百尺の竿頭に、一歩を進めて、西村捨三氏や、中村元雄氏等と知つてゐる因緣を以て、前の內務次官松平正直氏と懇親を結び、同氏の紹介を以て、當時福岡縣知事の職になつた深野一三氏や、熊本縣知事の德久恒範氏等とも、親んでゐた。そして、休職陸軍大佐大生定孝氏を麾下にして、軍人社會にも手を延ばしてゐたやうに、我輩の耳に入つてゐる。

以上の如く、渠は、好んで、中流以上に勢力を扶殖せんとしてゐたが、地盤は、寧ろ地方に作るの覺悟を示してゐた。北海道と、九州とは、最も希望を置いた處で、特に北海道には、啊呍鉢羅婆の大伽藍を建立せんともくろんでゐたやうに見えたのである。

所謂淫祠妖教なるものは、多くは、下層社會に根底を定るのに、啊呍鉢羅婆は、好んで中流以上に勢力を扶殖せんとしてゐたので有る。

五

余は、此のアムハラバに就ては、右に擧げたやうな風聞を小耳に挾んでゐたので有る。そして、その教儀なる者も、略ぼ耳に入つてゐた。

渠自身の宗教上の閲歴は、全然不可思議を以て、蔽はれてゐる。まだ西村捨三氏の下に土木局の一屬吏であつた時、一夜不思議の夢想を得た、十一個の光明、燦として眼前に映じたのである。而して、天に聲あり

我は一字金輪の如來なり、汝灌頂の三昧に入れ

と呼はゝれる聲は、瞭然として、耳に入つたので、豁然として、大悟し、身を禪定に入れて、立教開宗したのだと言つて居る、即ち、自ら揚言して、無師の獨覺なりと誇つて居るので。然かも、渠は節を折つて、叡山に上り、專ら一字金輪の頂法に思を潜め、山に在ると三年――渠自身は、一切經を讀み盡せりと稱してゐるが、之は余輩の保證する所でない。出山後は、南葛飾の砂村に窮居して、研究に耽つてゐたが、啊呍鉢羅婆の名を以て、世間に現はれたのは、三十三年四月。最初は、日本橋の中洲に、救世の口を開いたので。

* * * * *

以上は、宗教上に於けるアムハラバの閲歴。であるが、余輩の聞く所を以てすると、渠は、無師の獨覺なりと稱してゐるが、叡山に上つて、一字金輪の頂法に思を潜めたる外に、上野淨明院の住職山田妙運に就て佛典を學んだとあり、眞言宗の大澤尹澤に夢の佛說を聽いてゐたともあり、淺草傳法院の村田錫準に就て、同じく一字金輪の頂法を聽いたといふ說もあるが、渠は、一切を沈默に附して、傲然として、無師の獨覺を以て任じてゐるのが、床しくもあり、滑稽でもある。

六

讀者よ、渠の人物を書く前に、余は、今少しく、渠の教旨を讀者の耳に入れて置く。渠自身の作つた文章が、曾て余輩の手に入つて居る。その一節を擧ぐれば

斯うて有る。

宗教は時機と機根との二者備はらざるべからず機根の不適合なるが故に阿含も用ゆべからず律も用ゆべからず天台の一念三千も坐禪頓入の法も現目修業も念佛往生も同じく之用ゆるに足らず空海所立の他の現教に超越して利益現前現著なるも同じく之を用ゆべからず其機根既に過ぎ去りたればなり是等の宗祖は昔日皆機根と適合せんが爲に各如來所設の法門を如法隨時に廣宣流布せしと雖も明治の今日に於ては其機根過ぎ去りたれば到底之を以て衆生を濟度すると難し今は唯一の最上最極の一法門のみ殘れり即ち我教旨たる一字金輪の頂法是なり唯此法のみ能く末法に於て眞俗二諦に住して現當二世世間出世間に被益度脱し得るなり

渠は、這樣な風に、阿含も、律も、天台も、禪も、念佛往生も、そも〳〵渠の教旨と最も關係の多い眞言も、その機根過ぎ去りたるが故に、取るに足らずと排斥して、獨り一字金輪の頂法を以て、世間出世間に被益度脱する、衆生濟度の良法なりと稱してをるのである。

余は、爰に渠の主唱してゐる教旨の是非は言はぬ。別に渠等信徒の間に重んぜられてゐる安心章といふものが有る。之を讀んで見ると、おぼろげながら、なんだか見當が附いてくる、曰く

信とは、密嚴加持成佛を信ずるなり、行とは頂輪如來の末法を念持するなり、故に我教徒たらん者は密嚴加持成佛の灌頂を受くる時刻と同時に安心は定るべきものなり

斯うだ、アムハラバの信とは、密嚴加持成佛を信ずるので、行とは、頂輪如來の末法を念持するので有る。密嚴加持成佛の灌頂を受くると同時刻に、安心は定まるのだと言ふのである。だから、アムハラバの教旨では、灌頂といふやつが、最も重んぜられてゐるのも、無理が無い。そして、その灌頂なるものも、金額の多寡に依つて、階級を立て、上等、中等、下等と三級に分れて居るから、面白いのである。

* * * * * *

以上、あら〳〵啊呍鉢羅婆の概略を記るした。余は、事の異なるを以て、毛嫌するやうな初心では無いが、余は渠を怪物傳の第二に收めたのは、夢に十一面觀音の現示を得たる啊呍鉢羅婆世尊其の人でなく、蓮門教の祖島村ミツと鄕國を同うして、柳川より身を起こし、半頃紳商の娘を娶つて、鐵道會社の重役に榮華を極め、躓いて、監獄に落ち、變じて宗教家と爲りたる西田和協其の人の生涯で有る。――余は、此の大變化を長髮と、白衣の裡に藏める啊呍鉢羅婆が、二人の少女に迎へられて、屋内に入つたのを、凝乎と眺めてゐたので有る。(つゞく)

余の愛讀書

魯　庵　生

自分の愛讀書をお話し仕たところで何の興も何の利益も無いが、併し折角のお尋ねだから之まで讀んだ數四の書物に就いて少しくお話し仕ませう。愛讀書などと申すものは迂濶にお喋べりすると直ぐ腸を看透かされるやうなものだが、兒供の時分に最も愛讀したのは八犬傳で、十七八の時までに最初から大團圓まで繰返したのが四五遍、其中の或る箇所は十遍以上も讀んだ。夫故有名な文句は諳誦してゐました。(今では却て忘れましたが。)

併しそれは中年以前で、中年以後先づ愛讀したと云つて宜いのは陸放翁詩集、東萊博議等で、夫から三年以上暫らくも座右を離さず、始終机の上に置いたのが寒山詩闡提紀聞で、其時分は毎日一回必ず讀まない事は無い。殊に面白くない不愉快な事があつて胸中悶々として堪られない時は此一章を繙いて朗々と高誦すると胸次濶然として悶々を一掃する事が出來た。就中「男兒大丈夫作レ事莫ニ莽鹵一、勁挺ニ鐵石心一直取ニ菩提路一」云々の詩の評(中卷)は最も愛讀した。此詩の評語を朗々と誦すると頓に不退轉の勇猛心を振作して如何なる煩悶の時でも如何なる喪心の時でも俄に爪の頭まで勇氣が充滿して來るやうな氣がした。

此闡提杞聞が緣となつて白隱の著述を一時讀出して見たが、他のものは愛讀するといふほどにならぬ。一體自分は禪宗坊主が何だか嫌ひて、古木寒巖的の態度が氣に喰はなかつた。が、種々の理由から何となくハーミット、ライフが好きだつたので、其方のインテレストから禪宗の語錄などは面白く讀んだ。中にも賣茶翁の生涯が面白くて賣茶偈語を愛讀した時代もあつた。些か文字三昧の嫌ひはあるが「竈焚二松卵一煮二松風」なんて句が氣に入つたもんだ。禪宗坊主では無いが陶淵明詩集を愛讀したのも此時代であつた。

小說は兒供の時から好きで、神稻水滸傳に憂身を扮して今牛若の魔法が遣ひたくなつたは誰も彼も同じであらう。併し馬琴も京傳も三馬も蒟蒻本も黃表紙も八文字屋本も唯面白く讀んだといふだけて愛讀といふほどの事は無い。唯一つ、西鶴の一代女を讀んで一番最後の「夜發のつけ聲」から「皆おもはくの五百羅漢」へと行く此二節を讀んだ時は人生の暗黑面が現前したやうな氣がして一種の感に打たれ、一代女は三遍まで繰返たし。近松の作も一時は無暗と讀みちらしたが、其中て油地獄と天網島を一番面白く思つた。就中前者は恐らく日本ては二つと無いものであらうと感服した。

以上は皆廿二三年前の咄て、今日は是等の書物を一冊も持つてをらぬ。總て愛讀書といふものは始終轉々するもので終生一徹するものでは無い。聖書或は論語等其他聖賢の書を愛讀書と云ふものが屢々あるが、是等は座右の師とし仕へ處世のモットォとし仰ぐもので愛讀するとは少しく性質を異にしておるだらう。實際自分も手近の書架に聖書や論語や孟子を置き、折に觸れては誦讀するが、愛讀するのでは無い、以て精神修養の爲にするのである。

今日自分の些かの藏書中最も多いのはトルストイに關するもので、レサーレクションなど實に愛讀したのてある。併し乍ら自分がインテレストを有つのはトルストイの人物及び生活て、其著作でも無い、其議論でも無い。レサーレクションなど小說としては餘り大傑作だとも思はない。が、トルストイの思想の集大成と

してはレサーレクションは實に面白い。トルストイの人物及び生活と對照して見ると中々面白い。夫からトルストイは中々警句に富んでるから、細かに讀んで拾ひ上げるると頗る面白い文句がある、恐らくは其中にはトルストイのaplosismを作るものがあるだらう。

メレジユスフスキーが小説家としてはトルストイよりはドストエーフスキーを推したのは自分も同感で、ドストエーフスキーの罪と罰とは是までの內の最大愛讀書である。十年前に譯したのはツマリ此本の面白さを口で話して聞かせる事がドウシテモ出來ぬから拙いながらも飜譯して見せやうと思附いたのである。自分が此本を讀んだ時は古人が月の落ちると共に段々と屋根へ昇つたと同じやうに、夕方薄暮くなると椽側から到頭庭まで出掛けて薄明りで讀んだ。三日寐ずに讀んで了ひ、讀終つた時は睡眠劑を飮んでグッスリと寢込んだ。夫から飜譯に掛つても、較やともすると筆がお留守になつてウカウカと讀出した。人を魅する筆力と云つて此位恐ろしい力のあるものは外に無からう。

夫からドストエーフスキイの侮辱を讀んだ時も矢張同樣であつた。自分は其時まで能くいふ「卷を掩ふて嘆ずる」といふ語を形容詞だと思つてゐたが、此侮辱の主人公の少女ネリーが終焉の回を讀んだ時は實際に思はず卷を掩ふて長大息をした。

元來露國の文學といふものは他國の文學とは餘程趣きを異にしておる。獨乙で哲學を有らゆるサイヤンスのサイヤンスと云ふと同じく、露國では有らゆる科學及び哲學が研究したる結果を統合して之をライフに實現させるのが文學だとしてある。夫故文學は總ての科學及び哲學を總合した大元締(オホモトジメ)であつて一番大切な重いものになつておる。夫だから文學は敎育上にも重大な位置を占め、理科でも醫科でも工科でも文學を必須科目としておる。今日では大學組織が實際變じてるかも知れんが、此事はクロポトキン公の自傳にも見えてるから實際である。夫だからライフを表現したものでなければ文學として重んずるに足らんので、アート派から云はせれば間違つてるかも知れんが、露國の文學は

實に此の如くてある。露國の小說を讀むには能く此邊の消息を含んで置かなければならない。

トルストイは例の涅覓哲學を振廻して己れの作のアンナ・カレニナてさへ呪つた位て、其藝術語の如きは餘り極端て、全然同意する事は出來ぬが、併し宗敎、政治、社會諸般の問題に對する奇警な觀察や辛辣な批評や猷勁豪健な文章は明かにコンマンヂング、パワーの尋常ならざるを證明しておる。ノルダウ一輩の皮肉論て殆ど葬むらるべき人物て無い。勿論トルストイは哲學者て無いから思索上大いなる價値を置く事は出來ぬ。其論理にも不備の點あるを免かれない。併し乍らトルストイの偉大なるは區々一國家又は一社會に跼蹐しないて遍く世界の人類の木鐸を以て任ずる大精神てある。此大精神を以て思想壇に立つたものは昔しからさへ決して多くは無く、今日に於ては實に杜翁一人てある。夫故に自分は所謂トルストイズムの信者ては無いが、トルストイの作には一種のインテレストを有しておる。

一葉集を愛讀したのも矢張同じ意味て、芭蕉の豪宕な句や幽玄の句を喜ぶよりは一層芭蕉の人物及び生活を面白く思つたのてある。芭蕉傳を書いたのはツマリ此結果てある。

隨筆物も隨分好物て、所謂珍本こそ漁らないが普通のものは一と通り眼を通した。其中て面白いと思つたのは春臺の獨語、江漢の春波樓筆記、柳里恭の雲萍雜誌等てある。支那の翻刻物だが鶴林玉露など面白く思つた。一體隨筆は散漫たるもので取纏まつた知識は無いから、隨筆學問は兎角腦力を散漫たらしむる弊があるが、併し kill time に最も妙なるは隨筆てある。

扨て以上は自分の狹隘淺陋なる讀書範圍を披攊したもので、博覽精透なる識者の前には甚だ恥入るが、凡そ思想界に住するものは勿論其以外の人ても讀書の影響を若干受けないものは無い。夫故に愛讀すると否と、崇拜すると否とを問はず讀書の經驗を語るは最も有益てある。讀書は或る意味に於ては有害てあるかも知れぬ。殊に印刷術の進步につれて益々愚劣な著述が公刊

せらるゝ世の中では何等の目的も立てずに亂抽澀讀するは決して推奬すべき事では無い。併し乍らアンドリュー・ラングが云つた通り同じ無何有郷に彷徨せしむる動力があるものの中にも讀書は鴉片を服するより猶だ勝しかも知れぬから、愛讀書などと四角張らずに、博覽多識なる諸君のBiographia Literariaを聞きたいものである。自分の讀書談の如きは甚だ索然たるもので赤面至極である。

○

中村春雨

僕が愛讀書の第一に數へ上ぐべきものは聖書である、もう十年來、朝に、夕に、寢ても醒めても讀んでゐるが、何遍繰返しても讀む毎に新らしい味が出て來るやうで、混々として盡きざる靈の泉を掬んでゐるやうな氣持がする、文學的に見たら無論舊約の方が面白かろうが、常に自分を啓發し、誘導し、師父の如く我心を導いてゐるものは、新約書、殊に四福音書である、別に註釋書には據らないで、我流讀に讀んでるからこんなに無盡藏の興味があるのかも知れない、兎に角此の書物が一つ世界から失はれたら、他に幾千卷の倫理や哲學の書籍があつても、人生は落寞たるの感に堪へまいなどと獨自に定めてゐる。

一體、宗教や、哲學めいた書物が好で、その種類の者は手當り次第に讀む方であるが、科學の書物でも、進化論だとか、精神病理學だとか、犯罪論だとか云つた風の、人類の全景若くは直接、人心の一部にタッチした書物は、喜んで讀んでゐる、併し、その中、此れが愛讀書だと云つて、名指して話する程に深く入つてゐないのは汗顔の次第である、社會主義の書物もあまり讀んでゐないが、是非研究を要するものだとは信じてゐる。

文學の書物は、素より大好物で戲曲でも小說でも、新體詩でも、評傳でも、大家のでも小家のでも、貪食したい方であるが、西洋物で是まで最も多く讀んだのは英譯のツルゲネーフである、御承知の通り、さすがは大藝術家で、不知不識、讀者を美の王宮に囚にして行くやうな力がある、譬へば、春のおぼろ月夜に、花

の下蔭をそゞろ歩きでもしてゐるやうな氣持でチョッと夢の世界である、トルストイも少しは讀んだが、これは亦、秋霜凛烈、肌に砭するの感があつて、現實の世間を眼前（まのあたり）見てゐるやうな心得がする、何れも面白いが、僕の一箇の嗜好から云へば「アンナ、カレニナ」時代のトルストイが、今後の日本文壇を支配して行くべき主要なる潮流（カレント）の一を作るべきものではなかろうかと思はれる、少くとも、今の文壇には、あの調子が缺けてゐると思はれる、文明批評といふ大きな範圍から見れば一つ輪の中に入るべきイブセンヤ、ゴルキーなどの作風、否、その思想の流れを導き入れる事も、素より必要であらう、

話が大分横道へ外れたが、日本の文學者で、僕の最も好きなのは、近松巢林子である、三馬も好いか、「浮世風呂」「浮世床」の外は、あまり感心せぬ、馬琴の八犬傳は、先年讀みかけては見だか、何んだか讀み通す根氣が續かない、猶、書物ではないが（活きた書物かも知れぬが）新聞の三面記事が面白くて、僕は毎朝讀んでゐる。

―

○ 島村抱月

文章で一番感化を蒙り、又一番面白いと思ふたのは時代的にいへば平家物語、曾我物語、上田秋成の雨月物語、西鶴の著作、就中五人女、一代女等である。又駿臺雜話も面白いもので、あの中にはなか〳〵の名文がある。白石の書いたものは大抵好きであつて、就中藩翰譜の一部などは愛讀したものだ。德富蘇峯氏の國民之友の第一號の文章などは當時の幼な心に愛讀したものだ、（此項の標準からいへば又別である）。

英吉利の詩人ではシェーレーが一番好きだ。又小說家ではジョセフ、コンラッドの短篇など面白いと思ふ。此人は現在英國小說家中でも若い方の人で日本でいへば蘆花、春雨といふ格である。グレー、ウッグ（Grey Wig）などは短篇を集めたものだが、ハセチック、ユーモアに富んで居てなか〳〵面白いものである。（記者）

○ 白鳥庫吉

自分の專門はすべて皆研究すべき書物ばかりであつ

て、多少批評を入れて讀まなければならぬものであるから、愛讀書といふことゝなると却て專門外の文學書などを申上げなければならぬことゝなる。然しそれは所謂專門外のものであるから珍らしいことはないに極まつて居る。だから此事は御免蒙りたいと思ふ。然し强てのお尋ねであるから一言申上げれば、ランケの歷史などは非常にエライもので繰り返して讀みましたし、又シルレルの詩は常に愛誦して居るものです。

（記者）

上田敏

新らしい美や新らしい智識を味ふのは何時でも面白い。但し此新らしいとは、自分に新らしいといふ意味て、他人には陳腐であらうが常套であらうが構はぬ。此調子は私は書物を讀む事が多いから、Kalevala の後に、巴比倫尼亞の敍事詩を見たり、Sappho の斷篇を飜譯と首ッ引きて繰返して味つたり、河東節の本も一寸と覗く、山海經も用に立つ事があるから、Grimm の御伽話や、今昔物語と同じやうに見て置きます。それ故これといふ愛讀書を擧げる譯には參りません。

尤も十數年前を追憶して考へれば、其時大層面白かつた Gibbon の羅馬衰亡史は今に折々讀て見ます。藝術を愛する熱心を起させたのは Winckelmann の美術史て、同時 Pater の論文には、ひどく感心させられました。此頃愛讀して居るのは Aucassin et Nicolete に Mabinogion 近代の書では Maeterlink の論文と Loti の燕京雜記とです。

綱島梁川

お尋ねの愛讀書と申す程のもの小生には殆んど無之候。曾ては何々文集、何々詩集などと、兎角花やかなる方にのみ心惹かれし事も候ひしが、其の後心の傾向の轉變と共に、讀書の嗜好もおひ〳〵と變はり來たり、『バイブル』、『基督の模倣』、アウレリウスの『瞑想錄』を始めといたし候て、パスカル、スピノーザ、乃至は老列莊、維摩、碧巖、白隱などいふ道書がかつたものが親しまれがちに相成、更に近來に至り候ては、何と限らず其の折々の心の聘せ候まゝに枕頭の書多くもあらぬを手にするやうに相成申候。讀書慾の荒凉我れながら打歎かれ候次第にて候。



官尊民卑の滅減すべき徵候

『日本人』

維新改革の結果、門閥よりも實力を重んじ、大體に於て最も力を顯はしゝ者最も高官を占むるかの如く、西郷大久保木戸諸氏を初めとし、此に次いで要路に立ちし者孰れも實力を以て推され、山縣伊藤等諸氏亦た實力を以て顯はれ、かくて功を樹てゝ能の明かなる者官の上位に居り、力ある者は即ち官に在る者にして、官に在らざる者は即ち力なき者なりと見え、世を擧て官を之れ尊ぶの風を生ぜり。降りて民權自由の聲盛んに出づると伴ひ、官尊民卑の打破せざるべからざるが唱道せられしかど、世は依然として官尊民卑の狀態にして、苟も官に立たざれば力量の如何を認められず、爲すこと有らんとせる人々は先づ官に立たんことを求め如何にして官に立たんかといふは其の最も腐心焦慮する所にして、政權爭奪の希望は愈々益々熱度を加へ來たれり。憲政黨内閣の下に官吏の大更迭を行ひ、尋いて山縣内閣起りて文官任用令及び文官分限令を出だし濫りに官に入るを禁ぜる、皆な官を以て人間爲すべき事の最上點として爭ひしもの、官尊民卑の風は一世に普れかりし。

然るに桂内閣の第二流内閣の名に於て現はるゝや、往きに權力維持に專らなりし第一流の者は、自ら内閣に立つを大人氣なしとし、元勳として閣員を牽制することゝ爲りたるが、今回桂内閣の民心を失ひて勇退せざるを得ざるに至り、新に西園寺内閣の成るや、新内閣員の多くは前内閣の次官若くは次官相當の地位に在りし者、即ち第三流内閣が以て目すべきものにして、第二流の者も入閣に熱心ならず、却て冷笑を含みて傍觀しつゝあり。由來第一流を以て自ら居り、他に呼ばるゝ者少しとせず、第二流は更に夥しく、第三流に至りては殆ど計へ難き程なるに、此等第一流第二流の者は多く閣外に立ち、第三流中の一部分のみ内閣に立つとありては、現内閣員と同等以上の者の外に在るや甚だ多く、其の多き中に他日政權を爭ふもあるべく、現に既に着手せる者なきに非ざらんも、政府の重もなる地位に立つ者は必ずしも國家の重もなる人物ならざること此に至りて明瞭と爲り、世人一般に當代の大臣の如き人物は他に多く之れ有り、單に官に立つのみが人の能事にあらず、其れ以外猶ほ優に活躍すべき地位の存するに傾かんとす、是れ官尊民卑の新たに變化せんとする時期に非ずして何ぞ。

工場法の制定

『國民評論』

法學博士　桑田熊藏

工場法の如きは國家經濟上及び社會上必要なるのみならず、又戰後國

防上軍事上一日も忽にすべからざる處のものたり元來該問題たるや、七八年以前より議論ありし處にして、曾て農商務省は農工商會議に諮問し卅四年工場調査に取掛り、爾來幾星霜を經しに係らず、政府は今に之れを議會に提出せざるは、抑も何が爲めなるか、予輩の大に怪む處なり。聞く處によれば、政府は、勞働時間の制限、女子及び幼年勞働者の制限は、工場資本主の利益を害し、工業發達を沮碍するものなりとの、一部の反對を恐れつゝあるものなりと、若し然りとせば、之れ洵に事物の道理を辨せざるの甚だしきものなりと云ふべし。勞働時間の制限、女子及び幼年勞働者の制限は、一見工業機關運爲の自由を缺き、工業の發達を沮碍するが如く見え做すと雖も、勞働者の保護は、現在に在つては勞働者活動力の涵養となり將來に在つて健康なる勞働者の養成に却つて工業の發達を助長するものなりと云ふべし。現に歐米各國工業發達の國に於ては、工場法の制定せられざるはなく、而して該法あるが爲に、工業發達を助長こそすれ、其發達を沮碍せしの例は、夢にだも見る能はざる處なり。我國政府が、蒙昧なる工業資本家の愚論を容れて、工場法の制定に躊躇し、我國勞働者の保護に力めざるは、予輩の常に遺憾とする處なり。抑も國民經濟上及び社會上、工場法の必要なることは言ふまでもなきことにして、之れ等は多く識者によりて常に議論せられたる處なるを以て玆に事新しく絮說するの要なしと雖も、予が絶叫して世人の注意を喚起せむと欲する處のものは、國防上軍事上、該法の一日も速かならむことを欲するにあり。前世紀の初め、プロイセン王國に於て徵兵檢査官かライン地方に於ける壯丁の體格を檢査せしに、其壯丁の體格が、他地方の壯丁に比し、頗る不良なるを發見せり、之れライン地方は當時全國中、工業尤も盛なる土地にして、其工業勞働者として從事せしものが、體格不健全に陷りしは、全く工場制度の劣惡なるが爲なりとして、工業勞働者保護法を制定せり、之れ即ち千八百三十年代のことにして、獨逸に於ける此種法案制定の先驅をなせるものたり。

夫れ何れの國、何れの時代を問はず、工業地は人民の體格不良に陷り從つて其死亡率も多きは明かなる事實なり。今や我國は工業國として、國民經濟の基礎を定め國民の多數を驅りて、工業勞働に就かしめざるべからざるの時に方りて、工業勞働者の保護を閑却するが如きは、單り國家經濟の資源を涵養するの途にあらざるのみならず、國民の體格を不良の狀態に陷れ、延いて國家の兵力を微弱ならしむるものなりと云ふべし。顧ふに健全なる國民の母たるものは、亦健全なる體格を持たざるべからず、然るに今日の如く、將來國民の母たるべき天下の子女を驅りて、長時間の勞働に苦役せしむるが如きは、健全なる母を遺るの途にあらずして、總て又健全なる國民を遺るの所以にあらざるなり、此事たる啻に婦女のみに限らず幼童は實に未來の國民を組成する要素なり彼等にして其敎育不完全にして又其心身の發達充分ならざらんか將來の國民を奈何にせん、從來の例を見るに紡績工場に在る婦女幼者の勞働は十二時間晝夜交替のものあり、又工場の都合によりては廿四時間交替のものあり、殊に甚だしきは、卅六時間交替のものすらありき、斯くの如きは男子にありては堪え得るとしても婦女幼者の體格に適せざることは明かなることにして、婦女に在つては其生殖機能を害し、國民の保存者たる任務を全ふする能はざるべく幼者に在つては到底軍國民たること能はざるは瞭かなりと云ふべし、國民體格の不良は、國家の兵力を弱め、國家兵力の弱きは、國防の微弱を來し、國防の微弱は、外列國の侮りを招き、健全なる近世國際的國家の生存を保つの所以にあらざるなり。思ふて玆に到らば、工場法案の制定の急務なる知るべきなり。

陰陽道の害

大内青巒

此は六合雑誌に出てたるものにして甚だ趣味あり利益あるものなれば長きをいとはず其要を抜萃して掲ぐることゝせり

陰陽の害——若い人などが讀むとインヤウドウとお讀みてございませうが是はオンヤウドウと讀む方のお話てございます、文字の上から見れば陰陽といふことは、或は日月といふことにも、或は晝夜といふことにも、或は男女といふことにもなるので、インヤウドウと云ふ文字てお話をすることになれば種々の材料が有らうと思ひます、然るに私はオンヤウドウと云ふ讀方の方からお話をすれば區域の狹い話になつて參りますので、區域の狹い話でございますが其害は非常に廣い、それが今晩諸君と御相談をしたい所以てあります

陰陽道といふことは今ては皆樣が殆ど御承知ないお方もあるかも知れませぬけれども、我日本に於て昔時の所て見るとなかく立派なお役所があつて立派なお役人が取扱つて居たものてあります、今日の所ては其名が無くなつてしまいました、其名は無くなりましたけれども其實はなかく世の中に蔓延して居りますので、深く人の腦髓に浸込んて居つて恐らく四千八百萬の人々の大多數の人は此陰陽道のために支配を受けて居らぬ者は殆どあるまい、自ら知らぬとに拘らず此支配を受けて居る程のものてあります

それはどう云ふことてあるかと云ひますと、其物柄を擧げて見ますと毎日皆樣が御覽になる所の新聞紙にても或新聞紙の如きは毎日妙なことが書いてある、今日は何の星に當る日だなど書いてある質(たち)のものはそれがヘヤ陰陽道てあるのてあります、それのみならず今年は何の年であるか、乙巳の年である、斯う云ふのも陰陽の支配を受けて居るのてあります、あなた方に年齢を問ふ、或は十九、二十と言ふならば陰陽道の支配は受けて居らぬけれども、一體あなたは何の年てございます、斯う云ふと私は巳の年てある或は丑の年てあるといふことを言ひ始める、これは陰陽道の支配を受けて居ることになるのてあります、又一月一日即ち元旦の有樣を見ると、注連を張る、松を立てる、供餅を据える、屠蘇を飲む、種々樣々の事を爲すも九分九厘まて陰陽道てあります

此陰陽と云ふものは我日本全國四千八百萬人が多く其支配を受けて居るのてありますけれども、それを今世の中て最も流行して居るもので言ひますと、九星術といふものがある、幹技術或は幹技学といふものがある、或は家相、人相、方角、日の吉凶、年の吉凶、フサガリヒラク、種々のことを言ひます、それが非常な勢を有つて居るのてありますから、何時頃から始つて、どんな種類があるものか調べたいと思ひますが未だ暇無くして調べませぬ、また調べたならば一席や二席の話て話し切れるものてないと考へます

さりながら初め何處から此樣なものが來たか、何時頃から始つたものてあるかといふことを考へて見ますと、支那に於ては餘程古くから有るやうてあります、皆樣にお調のお方もありませうが史記の列傳に日者傳と云ふがある、其前後の所を見ると、墨子といふ人——彼の孟子が揚墨を敵として爭つたあの墨子の上に既にヘヤ此陰陽道の噂が有る樣子てあります、それて日者傳の終の所に名前が七つ有る、佛教て申せば天台、眞言、淨土といふやうなものてありませう是等の連中の可笑しい話が列傳中に載せてある、或時光武皇帝が是等の占者連中を集めて問ふて言はれるに何月何日に婦を取らうと思ふがどうてあらうか皆占つて與れといふ御命令てあつた、さうすると今言ふた七者の五行家日可——宜しうご

ざいます、堪輿家曰不可――それは宜しうございませぬ、建除家曰不吉――宜しうございませぬ、叢辰家曰大凶――極く惡うございます、歴家曰小凶――イヤ大凶までゞはございませぬが少し宜しくございませぬ、天人家曰小吉――凶てはございませぬ吉てございます、さりながら大吉とは參りませぬ、太一家曰大吉――斯う七人が七人ドガチヤガのことを言ひますから辯訟不決以狀聞――何れに依て日をお極め遊ばしたが宜いか纏りが付きませぬといふことを申上げた、それて光武皇帝は自ら決斷をせられた樣子てあります、云ふやうなことてあつて古いところから有りはありましたけれども、少しも當てにならなかつたと云ふことは古いところから有るのであります、それに拘らずどうして是が非常な勢力を有つたものかと言ひますと唐朝宋朝などに至つてなかなか立派な人達が此事を鼓吹して居るのてあります

古いところは周の世頃から始まつて漢の時代には前に申した如く其派が七派も有り唐朝宋朝になつて名高い韓退之、朱晦庵の餘にも載つたといふことが分つたならは支那に於ての來歷は略思ひ知ることが出來るので、支那は陰陽術の生れた故郷てある

我國に來てはどうてある、是が諸君と注意して御相談したい所てあります、我國に於ては詳しい事はヤハリ分りませぬけれども、一說に據ると天平年間即ち聖武天皇――殊に孝謙天皇の御代に用ゐられた皆樣御承知の吉備大臣（吉備眞備といふ人）が支那に留學すること數年、其頃の支那の學問を多く傳へた、我日本に漢學を傳へたことの功勞は大いなるものてあります、其漢學の總てを傳ふると同時に此陰陽道を傳へた、それは唐朝のものを傳へたかどうか、年代から考へますと李虚中（リキヨチウ）あたりの術てあつたか、それより或は吉備眞備の方が年代が先きかも知れませぬが初て吉備眞備が陰陽道を傳へたとなつて居る、さりながら此事か日本に根を張りましたのはそれより二百年ばかり經つてからて、天子樣て申しますと花山院天皇の時代、年號は寬和年間、其頃名高い阿部晴明といふ者がある此人は人間だか化物だか分らないやうな男てある、芝居や小說などて見ると信田森の狐と結婚した保名といふ者の子てあると申しますから生れつき怪しい男てある、此阿部晴明が書いたといふのてある是にも異說があつて僞作てあるとも云ひますけれども、此方の側てはバイブルの如くに貴んて居る「三國相傳陰陽管轄簠簋內傳」といふ書物が五册有る、簠簋は支那に於て祭をするとき供物を盛る器てあるが、其れを書名にしたのはどう云ふ意味か分らぬ、一名を「金烏玉兎集」、是は陰陽を日月に藉りて言現はしたのてありませう、太陽には烏か居る太陰には兎が居るといふので此方から見れば確かに陰陽を言現はして居る、我日本に於ての推步、占考、家相、人相、方角、人の一生の運命を測ると云ふやうなことを弘めた元祖となるものてありますが、此は支那の李虚中（リキヨチウ）や朱晦庵の說とは異つて三國相傳てありますから日本の神道、天竺の佛教、支那の儒教、種々樣々のものを混ぜたもの、儒教かと思へば儒教てなく、佛教かと思へば佛教てなく、神道かと思へば神道てない、雜入して一種奇々怪々なる說を立つたものてある、それが阿部晴明一箇の迷信謬說として世の中から排斥せられなんだ、排斥せられなんだばかりてなく恐多くも上朝廷に於ても厚く御信仰になつたのてあります、御承知の如く我日本には古くから博士といふものを置かれて四道博士があつたことは御承知の通りてある、明經博士、明法博士、文章博士、算道博士があつて其外に陰陽博士を置かれた、陰陽道といふが儒道、佛道、神道といふものと相並んて陰陽道といふ一種の立派な確かなものとなつて朝廷に於かれても陰陽寮といふお役所が出來た、其陰陽寮に陰陽博士が總ての吉凶禍福を占ふことになつた、それ程勢力があつたものてあるから此陰陽道よ

りお祭をする上に付てのお稽古まで出來て來た、それで今も吾々が今日は元日である元日は是々の物を喰べなければならぬ是々の物を喰べると一年の間禍を免れる、元日に斯う云ふことをすると一年中禍がおると云ふやうなことが今日に至るまで四千八百萬人の頭の底に、皆樣は眞面目に信用せぬにしてもお父さんにもお母さんにもお祖母さんにも千年以來浸込んで來て居るから、おばあさんが涙をこぼしてお前は生意氣に其樣なことを言が若しヒヨト間違があつたらどうするぞと言はれると諸君の頭が亂れるのであります、それを亂さずに遣つ付けるやうな人ならば或は不人情な酷薄なる人間かも知れぬのであります、此の如く吾々の腦髓に入つて居りますのが、今日の世の中は文明であるとか、開化であるとか人間が悧口になつたと云ふから、そんな事は脱けてでもしまふかと云ふとなか〳〵脱けない、大きな聲をして言ふては惡いか知りませぬが此處には他人は一人も居ない、露探などは一人も居ないと思ひますから大きな聲でなくお話をしても宜いと思ひますが、今度の露西亞征伐の戰爭は昨年二月八日に手が着いて十日に宣戰の　詔勅が下つた、あの準備は一昨年から立派に出來て居ることは御承知でありませう、あれが何故昨年二月八日まで延びたか、東郷大將の出立したは五日である、是は去年のお年廻りが惡い、お年廻りの惡い時に遣つ付けたならば禍が起るかも知れぬ、それで節分を經過して五日になつてもう宜いと玆に初て東郷大將が立つたと云ふ話である、此の如き事は笑ひ事でない、是がうまく行つたから宜いがうまく行かなかつたらどうする、それは九星術幹枝學を馬鹿にするからだとなつて來ると吾々何の面目を以て阿部晴明にお詫をしたものでありませう

然らば陰陽道といふものは其樣に害ばかりあつて益のないものであらうかと云ふとさうは往かぬ、此陰陽道といふは前の申した通り朝廷に陰陽寮を置かれて陰陽博士が有つたが、鎌倉以來朝廷の總の事が衰へて、それに付いて陰陽寮といふものも思ふやうに行かず、陰陽博士も十分に養ふことが出來なかつたでございませう、けれども此事柄は大切でございますから只今の土御門伯の家が此事を学つた、土御門家が家元となつて同家に於て天文推步のことを学つた、それで暦を作つた、奈良の時代に支那の暦を採用してそれより幾度も變化して居りますが、近代になつて五六百年以來は支那との交通は絶へて居る、支那より長崎邊りへ商賈に來る位のものである、然かるに暦日推步は一日も間違はず明治六年大陽暦を用ゐるまで土御門家が作つた物で、何月何日日蝕がある月蝕があると云ふことに間違つたことはない、是は確實に陰陽道の効と云はなければならぬ

此種の害を除かなければ實業家は今日は日が凶い明後日は日が吉いと云つて居る中に今日と明後日へは相場が狂つて儲け損つたといふことが出來るかも知れぬ、東京に留學するに今年は方角が惡い三年經たなければ他所に出ることが出來ぬとか云つて勉學の期を失ふこともあらう、病氣の時に親の死際に逢へぬことが起るかも知れぬ、今年は西に向つては出られぬから親が死んで歸鄕することが出來ないといふことが起るかも知れぬ

さりながら或は場合に於ては此事が用を爲すことが屢々有る、それは恐夫恐婦私も其一人であるが私よりモチツト恐夫恐婦である者を扱ひます時には理屈を言つても分らぬ、それはお前行つても無駄だから止しなさいと言つても、兎に角承りせんければ氣が濟みませぬ、それぢや外ぢやないが方角が惡いからと言ふと、さうすると止すので其位の質のものには御用に立つ、神武天皇樣が戰爭をなさるに方角をゑらばれた、或は只今の恐夫恐婦の類かどうかは知らぬが、戰ひをして庶兄の五瀨命が死な

れて敗軍になつたのは方角が惡いからだ、吾は天日嗣であるに日に向つて戰つたのは惡い、日を背に負つて戰へば勝つと云つて戰をしてお勝ちになつた、さう云ふことは或方面から考へれば好い方の方角論である其樣なことを亂世の頃になると立派な武將邊りが時々やつたやうであります、楠正成が兵氣を鼓舞するために天王寺に行つて、聖德太子のお書遺しの未來記があると云つて、天王寺の坊さんと馴合つたものか今日まで其樣なものはないが楠正成公それを讀んで鎌倉征伐の計畫をした、之を兵が信じて兵氣が旺盛になつて勝つたと云ひますが、是等は英雄人を欺くの一言で解釋することが出來ると思ひます

其樣に効を爲すことも有りますが世上誰も彼も其樣な事に迷ふやうになれば、其爲め家庭も亂れ社會も亂れ、遂には國家の大變を起すやうなことが無いとは言はれませぬから、是は出來るだけ此弊を矯めなければなるまいと思ひます

もう一つ禪宗には妙な人が有る、禪宗にはそんなのが多いが井伊掃部頭の舊藩地江州彥根に淸凉寺といふ寺(井伊家の菩提所)がある、其處の漢三和尙といふが隱居して(其あとの弟子の覺巖は松代の佐久間象山と友達でありますから時代はさう古くない)、其隱居處の近處に一人の醫者があつた、漢法醫で漢學をやつて居りますから李盧中、朱晦庵あたりの說を得たものが九星術幹枝學の信仰のある醫者らしい、其が折々遊びに來る、或時漢三和尙が灸を點へやうと思つて小僧に艾を解かして居た、所へ醫者が來て隱居さん何をなさいます、灸を點へやうと思ふ、それはお止しなさい今日は不淨日でございます、左樣か小僧今日は不淨日だとよ止さう、と云ふので小僧は艾を仕舞つた、暫く醫者と話をして談話盡きて醫者は告別して出掛けて行つた、すると直に小僧を喚でコレ〳〵灸を點へて吳れ、小僧は今日は不淨日だと云ひましたが、ウヽ不淨は今歸つて行つた──斯う云ふ見識を持つて居つた、不淨日だと云はれると直に馬鹿なことを言ふなと遣りたいのが並みである、がさうやると家庭に悶着が起る、それでお婆さんが今日は不淨日だと言へば罷うかと云つて置いて、お婆さんの目や耳にとまらぬやうに遣つて宜い、漢三和尙は醫者が不淨日だと云へば止さうと云つて止させて、止したかと思へば不淨は歸つて行つたと云ふて遣る一方は情けない話で不淨を背負つて歸つて行かなければならぬことになる

此の如き考を以て世に處したならば九星幹枝といふもの丶支配を受けて神經病人のやうな情けない者にならずに濟むかと思ふ

是に附ては歷史上からも、其說の上からも其弊の在る所を詳しく調べてお話したいのでありますが、今日は其大要だけ申上げたまてゝあります



倫敦タイムス社大英百科全書
特賣の絶對期限

二月二十八日以後は現時の價の二倍なり

大英百科全書を半價を以て約束し且月賦仕拂に應ずる倫敦タイムス社の提供は二月二十八日を以て撤回せらるべし

其日を以て大英百科全書販賣に關する一切の特別設備を絶對に終了すべく其以後倫敦タイムス社は今日の如く直接の購賣に應ぜず普通書肆の手を經て尋常販賣法に由るが故に最廉のクロース裝釘すら五百七十圓即ち現時の價の二倍に騰貴すべし、然れども倫敦タイムス社が半價を以て供する猶ほ若干の時日あれば今を以て若し迅速に申込まるゝ時は些細の仕拂をなして直ちに此貴重なる全部の送達を受け爾後小額の月賦を以て仕拂を完了するを得べきなり

倫敦タイムス社は千九百十九年に到る迄大英百科全書を販賣する絶對管理權を有す

併し乍ら二月二十八日以後は唯普通書肆の手を經て、販賣す

大英百科全書は今後書肆の手を經て
目錄原價にて販賣されべき事

倫敦タイムス社が大英百科全書を江湖に普及せんとする計畫を立つるや實に左の件々を期したり

（一）　倫敦タイムス社は暫時の間目錄原價の半價以下にて本書を供給すべき事
（二）　此半價以下の賣價の仕拂は簡易なる月賦とすべき事
（三）　此條件にて販賣するは大英百科全書を廣く江湖に紹介せんとする爲めなる事
（四）　此販賣は唯一時的にして其以後は正當の利潤を有する目錄原價に再び復する事

今や此復舊の時は目前に來れり。

紹介的的賣價の目的は達せられ、本書は遍く普及せられ、今日にては最早大英百科全書は一家の必要品にして何人も此深

大學者が己れの爲め將た家人の爲め絶えず必要なるを否む能はざる事を一般に承認するに到れり大英百科全書を更に完全にし最新ならしめんとしたる倫敦タイムス社の一歩を進めたる計畫は繼いて實行せられ、最終の巻即ち第三十五冊は千九百三年四月を以て出版したり倫敦タイムス社の嚢に大英百科全書所載の事實に就ての競爭問題を提起するや實に本書が實際に有効なるを能く説明し得たり。一萬一千の應問者が十二週間を涉讀研索に費やして最も搜尋に熟せざるものすら竟に能く難問を解答し得たるは大英百科全書が六十萬の項目を擧げたる索引に由て容易に日に生ずる疑問を解釋し能ふを證明す

一言以て云へば大英百科全書は倫敦タイムス社が其管理權を獲たる時よりは更に限りなく貴き文化の一要素となれり。蓋し補遺十一巻を增冊し有らゆる智識の各部門に渡りて最新ならしめたる今日は合衆王國に於て本書を使用する者其以前に比較して七倍の多きに達したればなり

勿論此の如き偉大なる効果を收めし所以は倫敦タイムス社が例外の簡便法を設けて販賣に奮勵せし爲めに外ならずして廣く江湖をして迅速に求めて試用せしめんと誘導したる紹介的賣價及び嶄新なる月賦制度に原づくもの頗る多きは云ふまでもなく是れ實に成功の一大秘訣なりき

而して此誘導的販賣は日本に於て猶ほ數週間繼續せらるべし

二倍されべき價

二月二十八日を以て直接日本の公衆に向つて大英百科全書を供給する倫敦タイムス社の販賣は終に撤回せらるべし。此の以後大英百科全書は倫敦タイムス社より唯僅に一割引を以て受くる書肆の手に由つて從前の如く普通販賣法を以て供せらるゝが故に公衆は最早月賦購買の便宜を得る能はざるなり。倫敦タイムス社は千九百十九年まで合衆王國に於ける販賣權を享有するが故に普通小賣相場が有効となるべき二月二十八日以後は倫敦タイムスが販賣權を有する間は今日供給する賣價の二倍たる目錄原價――即ち最廉のクロース裝釘すら五百七十圓を値ひする目錄原價より一錢をも低減する事を爲さゞるべし。倫敦タイムス社が實價より下れる價を以て大英百科全書を供給したる此初期の販賣の不利益を補償せんと欲するは實に此目錄原價を以てする書肆の手を經ての將來の販賣なりとす

此時に於て公衆の即金を仕拂ふ價は今日の二倍なり

横濱市山下町七十番地
倫敦タイムス社 日本本社

東京日本橋區通三丁目
大阪市東區心齋橋筋博勞町四丁目
丸善株式會社

京都市寺町通六角下る
丸善株式會社臨時京都出張所



（菜轉載）

後備大尉

生田葵山人

上の卷

恐ろしい程死傷のあつた戰爭の後五日目の事である。自分とは古く知合の老大尉が突然手紙を寄越して、自分は今度召集されて、明夜戰地へ出發すると報知して來た。此の老大尉とは、もう六十近い年配で無論後備だつたのである。戊辰の變以來會津征伐に從ひ一兵卒から身を起し、西南戰爭の折は中尉で出陣して、所々方々へと轉戰して、功勞もあり、大尉となつて、名譽ある勳章も受けたのであるが、奈何したものか休職となり、今に至つたのである。日淸戰役の折は、もう戰爭が終り懸けに召集せられて、其の威かめしい軍服姿を些と見たが、任務は僅か三箇月程で、間も無く郊外の其の住居へと歸つて、嗜好な花造りに憂身をやつす身となつて居たのである。

驚かれる程の大酒家で、飲むと屹度悲憤慷慨に堪へ無い樣な身態度をして、沈痛な聲張上げ、賴三樹三郎や、藤田東湖など勤王家の詩を吟じ出すのが癖である。笑ふ聲の大きな、眼にはいつも善良な光りを湛へて居る。子供は一人有るが至つて病身で、郵便局へ勤めて居る。大尉はいつも口癖の樣に

『此奴が弱いもんだから、自分が二人前の働きをして國に報いんけりやならん。』

恁う云つて罵るもの丶、可愛がる事は一通りぢやない。妻君と云ふのは、老大尉とは打つて變つて莫伽に身體の小さい、いつも悲しさうな顏をしながら笑つて人には愛想を云ふ。で、此報知を受取つた時にも、一番に想出されたのは此不憫な妻君の顏だつたのである。翌日の夕暮、自分は家を出て、大尉を見送る爲に停車場の方へと足を向けた。事實を云ふと自分は永らく病氣だつたので、宣戰の詔勅も、機敏な水雷艇の働きも、海軍の勝利も、陸兵の勇敢な活動も、皆寢床の中で、新聞の號外を讀んで知つたのであつた。で、自分の胸に映つて居たのは、矢張戰爭前の靜な光景であつたが、久振りに恁うして出て見ると街の樣子がガラリ變つて居る。此夕は近頃にない靜さで、大空は暗色を交ぜて紺碧の色を見せ、日の沈んだ邊りは薔薇の花瓣を散らした樣な色彩を見せて居る。空氣は淸う澄んで、少し冷氣を覺えしめ、毛織の單衣の上に柔かに觸れる。口笛を吹いたならば直ぐ天の樂堂に通ずる樣な思がして、誰人をも憎めない。別れた人を懷かしく思出す心地よさ丶であつた。憂愁も、惱みも皆此夕暮の大空の中に溶けて行きさうに思はる丶のであつたが、其れが然うでない。夕の光りの中に輝く高い建築物も、綠の立樹迄も、之から來る夜の暗の中に休息しやうとの面影は見えず、星影の中にも瞬いて活動しやうとの容

子が見えるのであつた。些と片側の電信柱を見ても然うて、無名の愛國者の手で、我軍大勝利の號外が貼出されてあつて、電信柱は昂然として空に嘯いて居る。

少し廣い四辻に出ると、其處に遊んで居る小供は總て戰爭の眞似事をして餘念なく遊んで居る。此間迄菜の花開いた、開いた〳〵といたいけに唱つて居た女子供の口からは、勇ましい軍歌の聲が聞える。殊に目立つて見えるのは繪草子屋の店で、歌麿の繪や、女禮式作法と云つた艶麗な繪は、何處かの隅に取片附けられて、見る目の限り戰爭の繪が掲げ連ねられて、戰場に臨まぬ者に、戰場の慘憺さと、悲壯なる光景とを示して居る。毒々しい其繪の具の遣ひ樣や、無暗に人を刺戟して心に疲れを覺えしめる書振りなどが、なんて多くの愛國者の眼に吟味されやう。謳歌して其前に群集して居るのである。

新刊書籍を商ふ雜誌店の店頭に立つても然うて、優美な文學書籍や、緻密な學術の著述は、藥にしたくても見出されずに、總てのもの丶上に戰の字が冠せられた書籍のみが陳列されて、殊に戰爭の繪入雜誌や、畫報などが、金摺りや銀摺りの表紙に飾られて、燦然として人目を奪つて居る。人は蟻の甘きに附く如く其前に集まつて、何か新らしい眞理を見出さうとする樣な態を裝うて眺めて居る。あ丶此處に何として新らしい眞理が發見されやう。彼等は只單に好奇心を滿足させ樣として居るのに過ぎないのである。

道行く勞動者の群も、話して居る事は戰爭の事である。八百屋の店頭に立つて走物の相場を胸勘定して居る若い内儀さん達も、我軍の勝利の事を語つて居る。農夫も職工も床屋の下剃も、貴族の子弟らしい

のも、皆語り希ふ所は一つである。

「頼母しき我國、我が國民！。」

思はず絶叫したく覺えた、彼方を見ると皇居の松が枝は、夕暮の空に薄墨の樣になつて殘つて居て其邊りから留守師團の喇叭の聲が響いて居た。

自分は道を右に取つて公使館の多くある街を通り拔け、だら／＼坂を海軍省の前へと出ると暗はもう了然其黑い翅を擴げて了つて、大空には星が金剛石の樣に燦爛として輝いて見えた。都の街で此處程威かめしい氣に入つた處は無い、突當りは宮城。此方に寄つて司法省、外務省、控訴院、左の彼方は貴族院に衆議院、右の彼方は陸軍省に參謀本部と近世の宏壯な建築建並んて、茲は丶一國首腦の街て、我國の繁榮も、勢力擴張も、皆此街から畫策されるのである。不圖見上げる海軍省の數多くの長方形の窓は、總て燈火に輝いて、窓硝子を透して忙しげに人が往來して居るのが眼に附く。定めし幕僚達は、戰地に發する重要なる書類を作るのに忙殺されて居る事であらう。其とは反對て、外務省に隣合つた敵國の公使館は、旗竿は白く中空にと立つて居るもの丶、旗は降され果て丶から久しく、庭に面した窓と云ふ窓は、總て盲目の樣に閉ぢられ、燈影の一つだに洩れない狀態が何の事は無い死の館で、軈て地の底に泯んて行く樣に見えた。

日比谷の公園を左に見て眞直ぐに、外濠を超え、賑しい道を幾つか過ぎ、軈て目指す新橋の停車場へと着いた。いや恐ろしい混雜だ。直行の發車迄には、未だ一時間餘りもあるが、行く可き人は大抵集まつ

て居る樣子てあつた、煙草の煙は天井に低く漂ようて、ともすれば電燈の光をさへ朦朧とさす。見送る者、見送らるゝ者と、彼處に一團、此方に一團と集合つて居て、其れが大低軍人てある。人熱蒸れの一種の臭氣は構內に籠つて居て、驛夫や赤帽は、其間を何か忙しさうに驅廻つて居る。自分は慿る群集の中を掻分けて、中等待合室へ進んて行つたが、需むる人は見えなかつた。此處も、もう見送り人と、見送らるゝ人て一杯だ。總ての話の模樣て戰地へ向けて行く人達と定まつて居る。

『まあ精々身體を厭うて、歸りには金鵄勳章を下げて歸り給へ。』

見ると若い士官の一群てあつた。哄然とお互に笑合ふ聲がしたが、其時恰度階上の壺屋のレストラントて。

『萬歲!。』と一整に叫ぶ聲が聞えた。其處にも大方戰地へ行く人を見送る一群があるてあらう祝聲は二階の窓から一旦街路へ出て、其れから更に此待合室へ傳はり這入つたものらしい。之を聞いた若い士官の一組は、其處て打合される盃の音を想起したらしい。其中の一人は衣兜から時計を取出し。

『未だ四十分ある。一つ河合中尉の健康を祝さう。』云ふかと見ると、一同打連れて室を外に二階のレストランへ急ぐのてある。其れと恰度入代りに自分が待設けて居た大尉は這入つて來た。

下の卷

『やあ。』と云つたのが先づ互の言葉てあつた。見る〳〵大尉の顏は喜びに輝いて。

『君か‥‥君に逢はれるとは思はなかつた。

病氣は奈何した。何しろ火急なものだから暇乞に上る隙も無かつたんぢや。』

疊懸けて云ふのである。自分は痼疾の病氣が兎に角褥を放れる迄に立到つた事を述べ。續いて此の老友の身の上を祝すと、愈其の顏を元氣よく喜びに輝かして。

『まあ、喜んで下さい、之で日頃の願ひも叶ふたと申すものぢや。何の露助奴。戊辰の役から鍛へた此の腕の手練を見せて遣るのによか對手ぢやあはゝゝゝ。』

然ながら祭の庭にても臨む樣な調子て、些の憂愁の影は見えない。

『第二軍の方に御附きになるのでせうね。』

不意と自分が尋ねると。

『さあ、其が私にも能く解つて居らんぢやて。當分廣島に滯在しとるぢやらうから、改めて手紙を差上げる事としやう。』

異樣に眼を輝して瞶るのである。咄嗟自分は軍の秘密と云ふ事に心附いた。あゝ秘密々々世に是程有難い事があらうか。親子の間にも、夫婦の間にも、城廓を築いて尊重せねばならぬ事で、總ての美しい事溫情い事を密つと黑い影に包んで了ふ、秘密と云へば此老大尉が頭に髷を戴いて初めて戰場に列した時、其身が後世汽車に乘つて出陣しやうと思附いた事であらうか。陣羽織を唯一の勇ましい軍服と心得て、拔刀隊を陣中の花と唱つた時、何として我軍が下瀨火藥を用ひ、無線電信を應用しやうと思ふぞ。老大尉が左右を回顧つて愉快の情に堪へ無いらしいのは、今の狀態を見て夢では無いかしらと思つて居るに

逢ひ無い。

撃劍の道場で鍛錬へ上た巖丈な身體には、個人主義とか世界主義とかゞ這入つた今樣のぢやない。其當時の純の純なる生一素の忠君愛國の精神が、彈切れる程積め込まれて居るので、隼鷹の樣な眼を見ても直ぐと其れと知れる。如何に其武者振りの勇ましさよ。帽は古びたりとは云へ、軍服は舊式の仕立風とは云へ、顋から頰へ懸けて生えた白髮交りの虎髯は、總てを償つて餘りある程の威嚴を見せて居る。況して其佩劍の麗しさは、恐らく將官達でも眞似の出來ない事であらう、中身は度々自慢に聞かされた、來俊光なのである。

「留守中は賴みますぞ、私は二人振り働いて來ますぢや。」

送つて來た血色の惡い息子を白眼と眺めて此處でも係う云ふのである。

二人が係くて話して居る中に入場を促す鈴が鳴り響いた、改札口から人雪頽れの中を搔分けて。大尉を先きに、自分及び外の朋友らしい人達と連立つてプラットホームへと進んで往つたが、大尉は絕えず快活に、さも嬉しさに堪へない風に話して居る、二等の明いたのを撰んで、其處へ腰を落附けると、窓から其髯面を出し、更に多くの見送人と大聲に話す、其眞正面に身體の小さい妻君は立つて、自分等始め多くの人に挨拶するのであつたが、大尉とは打つて變つて悄然たる樣て、落附かぬ心を無理に落附かして居る樣な、此方から云ふ事は何も聞入れずに只。

「どうも有難う御座います……。」

と無暗と繰回して、頭をのみ下げて居る、恐らく其小さい胸には後始末の事が一杯になつて居るのであらう。

其中に發車の時刻は愈々迫つて來た、驛夫や車掌は注意して客車の傍に餘り近接せぬ樣にとする、見送人は此處のみに非ず、列車の其處此處の窓の下に一杯になつて、中には若い妻君の幼子を抱いて、別離の情に堪へない態に見送つて居るのも見受けらるゝ。

隔たつた彼方の扉から一つ〳〵驛夫が烈しい音を立てゝ、此方へと閉ぢて來るのが、騷然たる人聲の中にも異樣に響いて、自分等の前をも過ぎて彼方へと閉ぢながら遠去かつて行く。天井から釣下つた電燈の光りは、見送人の多勢を白く描いて、窓に立つ出征者には、今が最後の別離の瞬間であると想はしむるのであるが、大尉は那麼事には更に無頓着であつた。と、相圖の車掌の笛は鳴響いた。一種凄然たる感は、各自の胸に傳はつて、悲壯の思ひに打たれる時、列車は煙を吐いて靜に動出した。刹那誰れの口から發聲せられたともなく、

「萬歲!。」と聲は我等の見送人の中から起つた。自分も病後の身を忘れ、切に大尉其人の出征を祝して、聲のあらん限り聲を合して高く叫んだ。弱い息子も口を開いて叫んで居る。身體の小さい妻君は何と思つてか、其手にして居た手巾を振つて、小聲に慥く合唱したらしい。あゝ其合唱然し其眼は濕んで居た。

大尉は此の勇ましい聲に送られて、然ながら欣喜の情押難く見えて、窓から半身を乘出し身分も、傍

に居る人をも忘れて、高く兩手を擴げて、同じく、

『萬歳!。』と一段と聲高く叫んだのである。

汽車の進むのをも忘れて猶も窓から半身を出して手を振動かすので、自分達も熱心に半巾を振つて合した。何たる健氣なる老軍人の擧動よ。汽車は轟々の聲を殘して次第に彼方へと距つて行くのであつたが、自分は猶も其方を瞶つて、只勇ましいとの念の中に不圖恁う感じた、不吉な事ではあるが、此老軍人は決して生きて還つて來ぬであらう、我等と顏を合すのは今の時が最後であつたに違ひ無い、其れは餘りに彼れが戰場に前進するからで、某年某月某日の戰爭が濟んだ後、戰場の掃除隊は必ず多くの戰死者のある場所とは飛放れた處に、一個の老軍人の屍體が横はつて居るのを見出すであらう。然して其掃除隊は口々に。

『奈何して此將校は這麼に前進したのであらう?。』

不審の言を發するに違ひ無い、一然りながら此老軍人が自分達の知己である事も、其れから敵の流丸を受けて倒るゝ最後の刹那に於て、今自分達に見せた樣に、脊高く延上つて兩手を擴げ、

『萬歳!。』敵前に勇ましく大唱した事も恐らく心附かぬであらう!。

汽車は今金杉橋の上を通つて居るらしい、一段と高く轟々の音が聞えた、回顧つて見ると、プラットホームの人影は、彼方に雪頽れて往つて自分の傍には、大尉の夫人が未だ立去らずに、二三の人に挨拶されて居て、其小さい身體に似合はぬはつきりした聲で以て、

『はい、其れはもう覺悟して居りまする。』

と、應へて居るのが聞かれた。

（完）

眞白男浪

（寒き濱邊に立ちて、米野口君の南遊を思ふ）

岩野泡鳴

友よ、旅路は椰子の樹かげ、
暑き葉ぶきのむろを出てゝ、
幾代寂びれしひとつ島の
磯に屢打つ眞白男浪——
君や、身づから詩とぞ碎け、
こなた小寒の濱に通ふ。
遠く南の風はぬるみ、
あはれ島かげいとも無言。

夢のまなこを過ぐる如く、
うすら綠のすそを引きて、
君が心は胸に響く。
これぞまぼろし、うつゝながら、
友よ互ひの聲を離れ、
しばし自然の寂びに飽かん。

新體 律詩

吉野臥城

寄土井晩翠二律

一

歸り臥す沼ぞひ草家の秋深く、
白雲の一片飛んで風寒し、
朝雞の歌やほがらの露明り、
夕雁の聲や淋しき蘆さやぎ、
放浪ひし七年の夢いま醒めて、
人生の五十路の命半過ぎぬ。

二

八重葎荒れたる畑の草を鋤き、
細き灯に詩を思ひつつ老いなむか。
秋晴や一籬の黄菊馨るにも、
寂し身は北の都の君を戀ふ。
高澄める空に輪を描く鳶の影、
横ふせる山を彩る櫨の色、
狩人はむなしく銃を負ひかへり、
燕子はことさらに水の上を飛ぶ。
逍遙の二人詩も無うイみて、
眺めにし夕廣瀬川、今奈何。

○

うつつの悶え、——朝の夢
信の御苑をうかがへば、
未敷の蓮華の活光り、
金色寶樹常照らふ。
照葉さやかにまかがやき、
金花ゆららに風渡る。
くしび樂の音、——魂融けて、
望あらたに生くるかな。

○

美しや、干潮に築きたる砂の城の、
茜さす夕日にかがやく見てぞ思ふ。
秖にただ力武に贏ち得し國の榮え、
程も無う颶風に瞬く灯のおとろへ、

文明の常花薫ずる國の生命、
とこしへに油しつきせぬ生火の照らむ。
あはれ今、危き途に立てる蒼生、
疾く覺醒めよ、――偉いなる靈の光見よ。

○

「天の火、天の火、いま降り來る。」
義の民叫びて北を指しぬ。
か黒き煙は渦卷きのぼり、
深紅の焔は虛空を染めて、
「見よ、書く文字は自由平等、
惡むは壓制、疾く拂ひ去れ。」
劒の魔軍うちやぶられて、
歡呼の人波湧きかへるかな。

○

秋の日、木犀めぐりゆけば、
草家にすがれる風の胡蝶、
「みかどの赤子は震ひ泣くに、
さくにの司は酷う吹いて、
うまし香にゆめな醉ひそ、
自由に翔らば生命呪はむ。」
さはあれ光を慕ふ渠は、
傾く日影に西へ飛びぬ。

○

おもひえ堪へぬ夕暮ひとり、
高きに登り遠く望めば、
連る草野秋いま深く、
横はる山落つる日紅し。
牧の笛の音愁を帶びて、
篁狩のひと空しく歸る。
面影の子よいづち去にけむ、
惆悵として詩歌なき身や。

○

霞めるや彩花金華、八重ざくら、
風匂ふ寧樂のみやこの夜更くれど、
燈明う玉樓の絃歌湧きかへり、
大路ゆく公達の醉若きかな。

靜寂の郊外草は露を帶び、
殷々の鐘に悲しき響あり。
ああ雲に双肩きゆる廬舍那佛、
小さなる威に矜る子をいかに觀る。

○

君よせめては酒にも醉へな。
人の情は滿干のうしほ、
誓ひし劍かうべをめぐり、
契りし戀の花も蝕む。
凋む晝顏月に甦り、
稔らむ小稻長雨寒し。
何をくよくよ浮世の噂、
雲に臥して歌をおもはむ。

○

柳靡れ、鷄鳴いて、
桃、李きそひ咲く、
平和の郷、
水車の村、
流清う、
ひと美し。
奏樂の入輿の日
かたはらに笑むは誰ぞ。

○

英雄のみ靈漂ふ杉村や、
こぼれ日に物影動く廟の晝、
苔蒸せる石のきざはし音を生み、
赫耀と紫金の屛龍を吐く。
いそのかみ古りにし廊に風鳴りて、
瀨を荒み走る廣瀨の水咽ぶ。
於噎遊子、千代に名を得む歌も無う、
世を歎き、君を懷ふに涙し流る。

○

眼清き夕の天使、ゆふつづよ、
點せ、汝が聖なる燭——愛の光。
笑めよ、今樵りて歸る人の背に、
守れよ、野の草に眠れる羚羊を。

うち騒ぐ水の胸には默示垂れ、
頂垂るゝ花に生命の露注げ。
紺青の高天に鋭く煌きて、
世界を護り、闇に泣く子を慰めよ。

歌

尾上柴舟選

○　若麻績長風

行春のおもかげせめてうつさばや三年秘めたる戀の小鏡

鐘こもる夕べの雲の地に落ちて風とまぎるゝ大野の秋や

東海やほまれの雲の高湧きてローレル植うる人によき曉風

ほのじろき雲に明けたる川添や霧のやうなる蕎麥畑かな

秋のいろことごと羅衣によそほひて舞はゞや今宵白菊月夜

○　陸前　小川眞淸

許されぬ戀にいかりて冬の神の秋姬襲ふおとか木枯

紅き白き花さまざまに化粧して詩人まつごと露野はあけぬ

なつかしき人ます方の雲を見て小島の礒にもの思ふかな

白雲のたなびく山の石に踞してしづかにおもふわが世わがうた

○　小谷寒鴉

その夜より奇しきものゝ音胸ゆるとはたながるゝとやすまぬ思

星寒く霜降る夜の八街をいづくともなくさまよふ身かな

わかやぎし血汐はつちのむねに堪へずけさ春風と吹きて出でけらし

○　佐久間霧江

閑古鳥やぶる寂寞のをりをりを寫經とゞめて聞くや小法師

鐘のねにまたかへりみる七丘や去るに堪へぬ古羅馬の秋

わがうたに千人よき姬まひいづと一夜を夢に笑みたるも夢

○ 鈴木 靜

空を行く天軍の駒いななくやたそがれ雲の紅亂れたる

○ 佐々木海棠

あなすると冥府の柱にさく〳〵とわが名削るとひゞく斧の音

○ 吉岡夕舟

白壁にきみがみ名かき蝸牛を這はせて見たり山の五月雨

いもうとは藪にひいでぬ皷うち琴彈じては君をまつをり

山に往めば霧はなれよりうたゝねの夢をまもりの燈滋々たり

東風

繞石選

四つ手網張り乾す東風の夕かな　三餘

大弓場の幕の紫東風が吹く　同

東風に飛ぶ榊の幣や神の庭　同

朝々や東風吹く九十九里が濱　同

洗ひ干す馬の腹掛や東風が吹く　同

刀撫して東風に向ふや馬の上　同

夕東風や鹿尾菜とる子の腰の籠　同

烏帽子買ふて戴くや東風眉に吹く　同

朝東風や朧にのこる杉の月　同

鳥影や外は東風吹く窓障子　仙骨

朝東風や溫泉へ通ふ籠の客　不老

朝東風や凧を手にして練兵場　四綠

豆人形東風吹く紙に包ませつ(伏見)　握月

橋際の凱旋門や東風が吹く　仙外

播州は松の名所や濱の東風　桃村居

東風吹くや馬市のある濱の村　同

普請場や東風に舞ひ立つ鉋屑　石羊子

東風吹くや山懷の畑を打つ　同

峯の松麓の松や東風が吹く　松亭

濱の松吹くともあらず東風渡る　同

東風吹くやとけて流るゝ飴細工　鳳梧桐

東風吹くや島を巡視の御用船　同

漣や東風吹く池に鮒を釣る　山笑

東風吹くや駒をひかふる染手綱　同

東風ふくや田舍飾りの馬の鈴　瀧北

磯松に東風吹く浪の高音かな　同
小屋かける野天芝居や東風日和　初聲
東風渡る巣に雛鵜の首細き　同
松青し東風吹く沖の島はれて　同
甲板に出て見る東風の出船かな　同
串柿の東風吹く軒に殘りけり　華水
手の平の煙草吹殼東風が吹く　同
鯛入れて恵比須の籠や東風が吹く　同
朝參る高津の宮や東風の吹く　夕村
竿に干す提灯いくつ東風の吹く　同
東風の濱驛鈴高くならしけり　同
放鳥の式たけなはや東風渡る　同
東風吹くやカナリヤの籠搖り動く　龍人
歩み遲き膏賣や東風が吹く　同
東風切つて射る强弓の矢叫びや　同
東風吹くや友禪つるす呉服町　同
東風吹くや淺く流るゝ蜆川　青龍
東風ふくやかすみて見ゆる貢船　同
東風吹くや磯の小徑の蝶螺殼　同
東風吹くや芹田に水の溢れ落つ　五遷
潮滿つる鹽田に東風の渡るなり　同

東風吹くや伊勢の七濱鹽曇り　同
東風吹くや蛙の卵水きよき　同
卒業や東風暖き鄕の道　碧子
東風此頃そゞろに動く旅心　同
浦の春東風ゆるやかに出舟哉　同
東風吹くや伊勢の小店の紺暖簾　同
よく釣れて今日も東風吹く日なりけり　同
松に風渡る宮居や白幣　蝶衣
東風入るや梅の館の青疊　同
東風吹くや江亭殘る雪ながら　同
朝東風に十反の帆をまきにけり　同
蛸舟や東風吹きそめし播磨潟　同

三月分課題　芹　二月十五日限
四月分課題　籠（春）　三月十五日限
寄募俳句は東京市本郷區駒込曙町大谷正信宛

▲歌募集　毎月十五日〆切
寄募和歌は東京小石川區原町百三十三尾上柴舟宛

川柳を募集す

川柳十則

三面子

第一則　寫實を旨とすべき事

古池の句に正風の一派起りし如く初代川柳の選びたる川柳は旨として寫實なりしかばその風調大に振ひたり言葉の洒落に強いて可笑しみを加へ經書の聲色を使ふて君子ぶるの類短詩の仲間入かなふ可らず叙景人事何にても想か調かに於て川柳式に寫實すれば佳き川柳たちどころに成るべし

第二則　〝バレ〟句をせざる事

實なればとて見せまじきもの云ふましきこととあり〝バレ〟句とは川柳界にて猥褻なる句のことなり柳原の往來にいかゞはしき書籍を鬻ぎて人の怪まざりし時代は昔の譚となりぬ今時メッタな句をなさば警視廳とてそのまゝには見逃さず恐るべし

第三則　新しき事物に目を着くべき事

川柳は前句附に起り寶暦安永天明の頃最も流行を極めて文化文政の頃よりは次第に其品位劣りたれど兎にも角にも多年の間普く都鄙の間に行はれ來りたることなればウカと古き事物に取り附かば存る句と指し合ひて而もそれに及ばざるべし近頃の俳句の陳腐なる一には題に限ある爲か何でも新しきを寫して古人を驚かさゞる可らず

第四則　天地間の森羅萬象何でも題となる事

山行かば山に歌あり海行かば海に詩あり川柳豈自然を詠ずること能はざらんや北だこれより内に入る可らずと札を建てたる俳句の畑を踏み荒さずんば可なりまして人情風俗の機微に至りては專ら柳句界の特産にして十七字の間に活躍す目に映ずるもの耳に響くもの凡て川柳の題と心得べし餘り氣を取られて電車に引き殺さる可らず

第五則　句の上に題の意味聞ゆべき事

初心の人或る時屠蘇の題に「春ながら娘の顔に散り紅葉」といふ句を讀みたることあり余評して「散り紅葉」にては耻らふ風情に聞こへ且つは顔の

赤らむこと屠蘇に限らず捨つべし」と云へり柳句とて印象の不明瞭なるは極めて興なし成るべく題の語を入れさもなくば意味の聞こゆる言廻し肝要なり判じ物にて人に頭を使はせ餘計な罪を造る可らず

第六則　古人の名句を翫味すべき事

川柳に教科書なし活字本にては雜誌五月鯉（久良岐社發行）川柳（柳樽寺發行）の中の評釋をはじめ藤波樂齋氏編類題川柳名句選島崎松琴氏編分類評釋川柳名句選内山出寶臺氏編古今狂句一萬集などみな良き參考となるべしことに大華山人校訂の川柳大全上下二冊を俳風柳樽三十編まで位の粹を拔きたる類題秀句柳樽大全といふの化身にして寶暦安永天明頃の名句之に盡く古本は尙よし手に入らずば借りても古人の聲調を味ひて新しき工風を凝らさざる可らず借りたるは必ず返すべし

第七則　俳句俳諧を參考すべき事

一茶ばりの俳句は川柳のよき手本なり俳諧の附け合にては俳諧鐫武玉川などの句味ふべし今は容易く手に入らざるを恨とすたまに端本あり逃さず買占めて珍とすべし

第八則　披露は後日に廻すべき事

フと浮びたる自分の句は如何なる駄作にても其場にては古人を凌ぐ思あり書いても送り語りても聞かせさて明日となれば多少の疵を見出して四五日も經たばおほかたはいやになるものなり一年に一句殘らば上手の數に漏れず己が句の披露は後日に廻すこそよけれ

第九則　運座は當て氣を愼むべき事

其場限りドッと受ける句と我他人共に永く佳しと思ふ句とは兎角兩立し難し一氣呵生が皆まであしきとにはあらず運座などにてはそれからそれへのツレ笑ひに計らずも高點を獲ることあれどまづは後日我ながら淺間しと見る句ばかりなりされば運座のみは我獨りエラシと心得て宗匠も朋輩も眼中に置く可らず鍛錬は平日に在り

第十則　川柳を尊敬すべき事俳句と云へば禪僧を思ひ川柳といへば下女を聯想すこれ全く末世の駄句が爲せる業なりよき句は十七字式の短詩にして先生も作るべし婦人も試むべし親の前に讀上げてよろしく衆人に披露して差支なし川柳を尊きものと思ひて信心のともがら一句にても二句にても投ずべし此世の極樂往生は疑ある可らず

▲川柳投句規則

一　一人何句にても差支なし
一　二句以下は葉書にてもよし、二句以上は封書にすべし
一　字體を明瞭に認むべし
一　封筒には「中央公論川柳」と朱書すべし
一　毎月十五日〆切の事
一　反省社宛の事

最近の大珍事　大勳位の大氣焰

ヤングストバンカー投

地獄の釜の蓋も明くといふ一月十五日の曉。元老の口の蓋大に明いて。宛ながら閻魔大王の火炎の舌を吐いたやうな珍無類の珍談があッた。見る眼嗅ぐ鼻の新聞記者先生また直接に之を聞かぬではないけれど。肝腎な當夜の主人公から口留めをされ。若し之を破れば未來永劫の出入差止めと制札を立てられたので、亡者ならぬ記者先生一同慄ひ上ッて、申合せたやうに其の眞相を書かぬ。其れらのため當夜列席者の外、餘り多

くは漏れぬのだ。トコロを玆に素葉抜くから珍談と爲るのだ。

處は銀行集會所て。所謂銀行倶樂部の懇親會だ。實は韓國統監伊藤大勳位の赴任を送るのが目的て、大勳位、並びに部下の木内、岡、古谷を主賓とし。陪賓は名にし大隈伯。並びに新大藏大臣坂谷芳郎博士などて。主人側には澁澤、松尾、園田、早川、相馬、豐川、池田、村井、安田、等チヤキ／＼の銀行家約百五十人の名が註せられた

大勳位は中々の氣焰て。大隈老が一隅に一群を相手に饒舌を弄するを尻にして。燃え立つストーヴを圍みながら『何ぢや。日露談判ぢや。彼はウイッテと小村と丸て段が違ふから我輩も評論の餘地が無いワ。併し日淸談判て。小村はテンから間違ッて居る。先づ慶親王や袁世凱に滿洲が露國に取られて居るを其れを日本が百万の大兵と二十億の軍費を出して露國と戰ッてから。今淸國に還附する揚びと爲ッた。淸國は果して之から滿洲を統治することが出來るかドウぢやと問詰める。袁世凱などは勿論出來ると言ふも知れぬ。言へば占めたものぢや。直ちに淸國の兵力から財力から洗ひザラシ並べ立てヽ。サア斯の通りて統治が出來るか如何ぢやと論じ詰める。論ずれば乾度向ふが閉口するぢや。底て一通の詫狀を捲上げるんぢや。併し光緒皇帝陛下もエラク御心配ぢやからといッて。滿洲を日本の委任統治にする。之に判を捺すが宜いと頭から懸るのぢや。斯う急所を抑へずに。最初から個條書などを出して。日本も向ふも丸て同じレベルに立て。權利の義務のと論じ合ッたのは全く小兒の藝當ぢや。向ふに蹴散らされるに極ッとるぢやないか』大勳位の吐く息は頗ぶる酒臭し

大勳位は一轉語を下して『ナニ伊藤は斯う言ても實行することが出來やうかと。出來る。我輩は現に韓國王に其れを遣ッたぢやないか。我輩が韓國王に謁した時。先つ陛下の健勝を祝すると。國王は日本のため韓國の獨立を保たれて誠に有難いと御座ッた。我輩は直ぐ其れに付入て。全く御諚の通りである。日本は實に韓國

のため大戰をして。今も多くの軍隊を置いて之を守護して居る。就ては外交權其他の總てを日本に御委任に爲つた方か宜いと申した。韓王はヤレ先祖に濟まぬの。其れ丈けはのと。頗ぶる六ヶ敷い御機嫌であつたが。併し我輩は當今の時勢、古來未來の形勢とを述て。斯うするのが最も韓國並び王家の御爲めぢやと說いて。到頭韓王の御同意を得たので。即座に調印を得て了ッた」語り終つた大勳位の氣焰宛ながら虹のやうだ。

聽て主客其の坐席に就くと。大勳位は一應招待を謝して後「我輩は上御一人を除けば眼中全く人無しぢや、而して唯だ我が國民の忠勇なるを恃むのみぢや。百万の兵を出し。二十億の資を捨てゝ。其れて結果が件の通りでも。國民は曾て一度も嫌な顏をせぬ。租稅も能く納める。何一ッ不平をいはぬ。斯る忠勇な國民は世界万國の例があるものでない。之がまた歷史や敎育で養はれるものでもない。全く皇室といふものを奉戴して三千年來曾て渝らぬ國體の致す所である。諸君は時々大藏大臣の官邸などへ呼ばれて。イヤ國債に何十万何百万應じたのと。恰かも自分の金でも出したやうに大きな顏をするけれど（此の大きな顏をするといふのを大勳位は實に二回まで繰返されて。銀行家に取ては實に痛快な一大鐵棒であッた）其の實銀行は職工や農民が種々辛苦て貯めた錢を集合して資本としたのでないか。諸君は大きな顏を仕ても若し彼等が悉く之を引出したら何とする」「大勳位は慨然として更らに一歩を進め「日本も戰前は僅かに五億の國債が有るばかりぢやが。戰爭て二十億から新規に起して。今年度は又四億三千万圓を募ッて。來年度は多分十億も要るぢやろう。滿韓の費用ばかりでも今年は三千万圓て濟むが。來年は五千万圓から掛る。外債を當てにするのは。他の懐を當にするので。何を以て元利を償還するか。其の利息ばかりでも大したものぢやないか。諸君も銀行家などゝ大きな顏をしても勞働者などの懐ばかりを當にするやうては困る。我輩は此等の事を考へると實に憂慮に耐えぬ。我輩は是から韓國へ往て。韓國の人間になる決心であるが。併し陛下の御信認の厚い事と。國家

の前途を想ふと心より憂慮に堪えぬ」大勳位は玆に至つて慷慨の涙滂沱たる有樣であッた。

大勳位は又『世間で軍人が跋扈するぢやろうなどいふものがある。山縣が如何に槍先の功名で威張ろうが。大山が威張ろうが。兒玉が威張ろうが。此の伊藤あり。一歩も左樣なことを許さぬ』といひ〳〵三びまで鐵拳を揮ッて食卓を打ッた。大勳位の意氣の激越であつたことは實に豫想外だ

スルと大隈伯は立上つて。滔々と米國南北戰爭後の經濟やら。普佛戰爭後の獨逸の財政やらを長〳〵と陳べて。例の恐ろしい悲觀説を並べ。我輩も伊藤侯の意見と寸分も違はぬ』などと相槌を打ッた。大勳位の得意は玆に至て去るとながら。銀行家連は實に驚ろいた。斯の如き悲觀説を説法されやうとは。實に思ひの外なので。中には侯伯を招待したことの寧ろ馬鹿〳〵しいのを思はざるを得なんだ者もあッたらしい。殊に賓客の一人たる藏相坂谷氏としては到底沈默すべきでない底で坂谷氏は恭々しく起て『伊藤侯爵閣下。大隈伯爵澁澤男閣下並びに總ての諸君』などゝ例の切口上で『侯閣下伯閣下の如き國家の先進元老たる御方が。衷心より國家の前途を考へられて仰せられたことは。我々後進殊に乏しきを財政の當に承はる自分に於ては。最も貴重すべきの教訓として心肝に銘じます。併しながら侯伯兩閣下の仰せられた如く日本の財政は悲觀すべきもので無いといふことを自分は信じ且つ斷言いたします。若し侯伯閣下の唯今のお説が外國へでも傳はッたら。日本公債はドシドシ下落する。實に大變であります』とて恐る〳〵侯伯の悲觀説を反駁した

大勳位は猪口才なと言はぬばかりムックと起上ッて『坂谷〳〵。お前は我輩の説を誤解して居る。我輩とても日本が財政上破産しやうなどゝは毛頭も考へぬ。唯だ四十年大政に與かッて我輩の經驗から老婆親切で諸君を戒めたばかりだ』などゝ言ひながら。兎にも角にも公會の席上で。國務大臣を呼捨にまでした。平生『陛下の國務大臣に對して閣下の尊號を去るべきでない』などゝ説法する大勳位としては實に意外の沙汰

だ。是もお酒の致す所てゞもあらう。尤も呼捨てにされたは坂谷大臣ばかりてはない。日本銀行總裁松尾氏なども『松尾お前は日本の紙幣か通用するのは日本に限るよを知らぬか。ゴールドが無くなッたら正貨準備を如何する』などゝ。分り切つたよまて並べて他を罵る。玆に至て大勳位全くの泥醉漢と爲つたらしい

談次大勳位は又『我輩は憲法を拵へるに失敗した。最初は衆議院て万事を纒めても。貴族院て根を抑へられて如何するよも出來ぬ。是は實に我輩の意外て。又失敗とする所ぢやから。種々其の改良案に苦心しても見たが。韓國へ赴任するよと爲たので其れも出來ぬ。澁澤君。君の婿だとかいふ穗積などの憲法論は。アリャア大間違ぢやよ』

此のやうな談があッたので。若しも一々新聞紙上に遠慮なく掲載されては。實に面白くないといふので。豊川良平氏が大に心配し骨を折つて。列席の新聞記者に若し之を掲載するなら。向後斷然當倶樂部へ出入を止めるからと金打をさせたのだ。其れから主人役の重もな人々は大勳位をはやし立てゝ。二次會だ二次會だといつて。到頭築地の瓢屋あたりへ擔ぎ込んだ。是れ以上は言はゞ私會だから立入らぬ。唯だ銀行倶樂部の懇親會は。一種公會の。イヤ少くも半公會の性質を有するものて。其の席上の光景や演説筆記やは。總て是れで新聞雑誌に掲載さるゝの例てあるから。拙者は玆に遠慮なく前記の事實を貴誌へ投書する。何と近時の珍聞ではあるまいか

○我は救世主なり、我は解脫者なり、我は神人なりといふもの近來著しく世に出てたるを見、是れ實に憂ふべき病的の現象なりと論ずるものあり。されど虛心坦懷にして一考せよ。我一代の風潮漸く靈界の光明を憧憬するの切なる、此現象によつて察し得べきにあらずや。

○世を救ひ、人を救ふの教を宣りたるもの數はあれど、我は最も梁川氏の「神子の自覺」に服す。「神と偕に樂み神と偕に働く」の意義を外にして我等の安心立命の地ありとも覺えず。梁川氏自ら我に語て曰く、奇矯世を駭かすが如き言を發するは予の好まざる所、而かも心中の要求默しがたく、止み難きものあり、終に神子の自覺を宣せりと。氏の如き謙讓の人にして初めてよく眞に世を救ひ人に教ふるに足るべし、吾人は氏の將來に望を囑すること至大なり。(樗)



竹風兄に與へて文章を論ず

血來生

○このやうに仰山らしい見出しを付けて、正々堂々と文章論なとを擔ぎ出すといふは、實は僕に取つてはがらにない事で、いはゞ不量見の極、さしもの竹風兄も驚く事であらう。

○兄も御存じの通り、僕性來の理窟嫌ひ、否、理窟に暗い男、素より氣焔などの吐ける譯でない、それが今敢て兄を捕へて、此がらに無き文章論をやつて見やうとは、血來もいさゝか娑婆氣が出來たといふものであらう。併し文章論とは餘りに古風な題だ、中學生の作文にてもありさうだ、文章とは人の思想感情を文字にて言ひ表はすをいふなり的の事は聞くたくないと云ふ人もあらうが、而も僕が此問題を撰んだのは多少の所以がないでもない。

○此頃あちらこちらとさまよふにつき、種々の議論も承るが、中に二三人、恁ういふ事を云つた人があつた、『一體日本の文學は昔から文章で讀ませやうといふ風がある、文章を飾る風がある、技巧の末に走る風がある、これは慥に日本文學の一大弊風がある、今日以後の文學は、斯うはありたくない、文章はたとへ拙くとも、飾り氣なく卒直に、ありのまゝに、明瞭に、技巧に苦心する代りに大局に目をそゝぎ、狹少なる日本趣味、江戸趣味にのみ戀々としないで、もつと大きく世界的に、そして文章の美を以つて讀ます代りに結構、思想の上に重きを置かねばならぬ』と。

○かう云ふ意味の議論は、其他新聞雑誌でも、ちよい〳〵見た事があつた、而して之を實行しつゝある小説家も亦二三に止まらぬやうに見受ける。僕は實にそれ

が不平で堪らぬのである。

◎不平で堪らぬとはいふものゝ、全體が美學も知らぬば、修辭學も知らぬ、論理學も知らぬ、とんと理窟に暗いゆゑに、その議論に向つて、一々譯の分つた反駁を加へる事が出來ぬが、只何となく自分の心に成程と承知が出來ないのであるが、腑に落ちぬのである。

◎併しながら竹風兄、愚ひそかに物を按ずるに、そもく文章といふものより飾りをとり、美を捨て色を去り――即ち全く技巧を顧みなかつたら、どうであらう、恰も妙齡の美人をとらへて、その髮を剃り、臙脂を落とし、胸高に結んだ帶を解き、裾長に着た衣裳を剝ぎ、紅い蹴出しを脫がし、人間は人間のありのまゝにあれといふが如く、實に殺風景極まるものではあるまいか。

◎卒直も可い、ありのまゝも可い、明瞭平易なるも可い、いな僕は實に文章はしかあらん事を希望する、併しながら、文字を美しく使つたから、不明瞭だとは思へない、技巧を交へたからありのまゝでないとも思へない、否、それが爲めに却つて明瞭になり、自然になると信ずる、若し又、文章は拙くても可い、言はんと欲する處を云ひ、述べんと欲する處を述べ得れば可いと云ふならばそれは甚しき矛盾である、文章は人の感情思想を文字にて表はす者也とすれば、其感情思想を充分に表はしたならば、それは即ち妙文である、拙い文章とはいふ事が出來ぬ、文章は拙くても可いとは決して云へぬと思ふ、お前の鼻は缺けとつても可い、お前の口は歪んどつても可い、お前が美人でありさへすれば私は惚れるといふに齊し、天下豈にかくの如き無茶な事があらうか。

◎更に一歩進んでは、その言はんと欲する處をいひ、舒べんと欲する處を述べ得る以上に、尙文章は或物を要することを忘れてはならん、それは何だ、(所謂末技といつて罵らるゝ)言葉の言ひ廻しだ『私も惡かつたが、お前も惡い』と云ふより『お前も惡いが私も惡かつた』、といふ方が人の感情を害さない、只一句の前となり後となるに依つて同じ事をいつてもこれだけの相違がある、單に自分の感情を言ひ表はしさへすればい

ゝものならどちらの句が先にならうが後にならうが、關つた事ではないのである。

○此の言葉の言ひ廻しの最も妙なるものを警句といふ、恰も水の混ぜてない清酒の如きものだ、水を交ぜて解くことは出來るが、其代り不味い、惡酒を多量にに飲むよりは、此清酒一口の味は又格別である、文章は解りさへすれば可いと主張するは、未だ此上酒一盞の妙味を知らず、惡酒でも醉ふまで飲まうといふ野暮な連中たるを免れぬ。

○西鶴を讀むものは、一種いひ難き趣味を其文章に於て味はふであらう、近松を讀むものは、ゾク／＼ずる程の快感を文章によつて起すであらう、これ等の文は其の一句々々に得も云はれぬ妙味を有するからてある。

○文章を國に譬ふれば、一句一句は國民である、國是は如何に立派でも、その國を作つて居る國民が悉く愚鈍であつたら、其國は立派な國とは云ふ事は出來ぬ、全體の結構だとか、思想だとか、それは皆此一句々々の働きによつてよくもなり惡くもなる、惡い木材を用つて美しい家を建てやうとは、それは無理だ。

○紅葉山人の書いた小說は活きて居る、それは文章の力だ、露伴が幽玄な想を行るには必ずそれに相應しき文字を以つてする。竹風兄、僕が曾て鏡花の風流線の前編を稱して天下の絕品といひ、兄が頃日讀賣の紙上に於てその後編を賞賛したのは、皆これ鏡花が文章の美なるに惚れたからである。柳浪の文は拙いといふ、而も彼れの文には恐ろしい一種の魔力がある、只ありのまゝに書いたといふ文章では無い、人をして現實の如く感ぜしむる或る文法を有して居る、一句々々を離して見れば妙文ではないかも知らぬ、單に其情を舒ぶるに止めて居るやうだが、前後の句と聯結して始めてそこに力をなすを覺えるのである、漱石の「我輩は猫である」は、一見文章に重きを置いて居ないやうだが、焉んぞ知らん漱石は最も文章に苦心する人ならんとは、文章に苦心せずしては彼れだけ面白く讀ますことは出來ぬ。

○竹風兄、僕はいつも恁う思ふ、翻譯といふ事は不可能てある、若し翻譯が間違なくて、原著の意をそのまゝに翻譯したもので、而も非常に面白いものがあつたら、その原著は本國に於て決して文學的作物としては上乘なものであるまいと、何故といへば、其國には其國の趣味といふものがある、此趣味は到底外國人には解る筈のものでない、文學は趣味である、而して趣味は多く一句々々の巧妙な言ひ表はし方によつて味はれる、例へば俳句の如きものだ、日本には日本固有の趣味がある、從つて特別の文學がある、趣味は如何にしても翻譯することは出來ぬ、紅葉の小說を外國語に翻譯する時は紅葉の小說から日本趣味を引去つた殘りのものしか傳はらぬ、而も紅葉の小說から日本趣味を引去つた殘りのものが、果して何等文學的價値のあるものであらうか。

○日本趣味を狹いといはゞ、英國に在つては英國趣味は狹い、獨逸に在つては獨乙趣味は狹いのである、吾人は狹い日本趣味に滿足するのてある、世界的趣味だなんて、大かい法螺は吹く必要がないのてある。

○文章は美しく書くものだと叫びながら、此書きざまは何だと笑はれるか知らぬが、性來の惡文家、特に編輯〆切間際に迫て蒼遑筆を走らしたのてあるから、尙更目も當てられない文章になつて了つた、まだ書きたい事がなか〳〵盡きぬが、此調子ては書く方よりは讀む方が骨が折れるだらうと思つて、先づ此位て切り上げる。此書を特に兄に宛てた所以はいつか兄の話に兄も文章論殊に言文一致論について研究して居らるゝとの事てあつたから、願はくば其研究の結果の發表と共に僕が今述べた點に就いても高教を仰ぎたいといふ下心もあり一には先輩として畏兄として每に親交を忝くして居るからてある。

（一月二十三日）

大阪みやげ

かの子

△去年の暮れからお正月へかけて大阪地方へ旅行した、斷つて置くが、決して債鬼に迫はれたのなんのと、そんな譯てもなければ、勿論債鬼に

は追はれぬまでも性來金とは餘り心易く交際しない方だから、汽車に乘つてから性の異つた人間を連れて居たなんて想像される程愉快な旅行でもなかつた、只何となく行つて見たくなつたから行つたのである。

△大阪には博覽會當時一年ばかりも居た事があつて、いろ〱の知人も少くないが誰にも餘り知らさなかつた、併し吉弘白眼といふ男、これは吾輩と兄弟のやうにして居るので、宿料いらずで我儘もいへて、子供は六人もあるが皆な吾輩と仲好しなり、妻君が優しくて、これも年來のなじみなり、先づ吾輩には都合の可い事ばかり、我家のやうな顏をしてこゝを本陣。

△白眼は餘り名を出すことを好まぬから中央文壇には頭を出さぬが、其新聞記者としの辣腕は關西には知らぬものもない男、その紹介によつて大阪の文士を歷訪しやうと考へたが、時日がないので止した。

△併し毎日の浩々歌客に會つた、歌客は毎月中央公論に筆をとらうといつてくれた、只一回の會見で綾り話も出來なかつたが、歌客でなくて論客たる風采を備へた人だ、其後北の某處で例の白眼、長田秋濤等と會したとき招んだけれど、生憎編輯會議があるとかで來られなかつた。

△秋濤居士、これも僕は初對面であつた、白眼の後を受けて大阪日報の社長をして居る、初對面だが三四回も會つたので、成程世評の通り愉快な男だと思つた、居士も時々中央公論には書かうと約してくれた、呑んで〱呑みぬくといふ男だ、これでは秋子女史も心痛當ならじと思つた。

△同じく新聞記者で牛角といふ男がある、ドモの牛角さんとは北の誰やらが濁音で呼んだ別名だ、蓋し牛飲馬食しては壯語するが、飲めば飲む程ド、ド、ドモる癖があるからだ、これも僕の古い親友で、相變らず面白い男だ、大阪に於て中央に關係した珍聞を通報すると云つて居た。

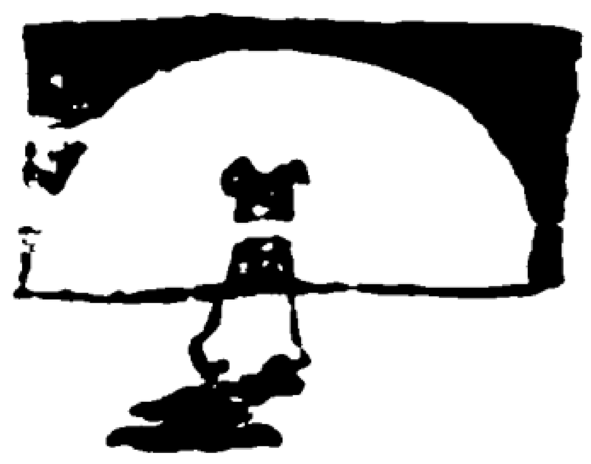
△これらの連中と飲んだり騷いだりして居るうちに、五六日は夢のうちに過ぎた、菊地幽芳子にも會はうと思つて居たし、齋藤弔花子にも歸りに寄る考へであつたのが、豫定の滯在時日を經過したので誰にも挨拶もせず、急行東上した。

△在阪中は趣味のあることだらけで、こんな愉快な正月をした事がない、それは諸氏が皆喜んで迎へてくれられた、その溫い空氣に包まれて居たからである。

△文樂座へ一度、大隅の美しい音樂的な節廻しと、南部の眞摯にして人を動かす語り振りと、津太夫の老いたれど、何となく趣味のある、節調のたしかな、人をして崇高の念を起さすやうな處とは、いまだ耳に殘り目に映つて居る、惜しい事には越路太夫を聞くを得なかつたことである。

△終りに臨んで諸氏が一方ならぬ厚情を感謝する。

△讀者諸君への大阪土産には、大阪名物粟おこしでもと思つたが、諸君へ配るのに面倒だから止した、そして此頁一葉を以つて代へるとしかいふ。



漫評

京都の閨秀畫家

長田偶得

土田喜園女史

◎女史が始めて繪畫の稽古に從つたのは、大方十五六の頃であつたらう。それも自分から進んで、稽古を始めたのでなく、其處には種々の關係があつてさういふ事になつたのである。勿論女史自身も、生來畫が嫌いではなかつたけれども。

◎女史の父は、横山淸暉の門人で、また鈴木百年にも就いてゐたことがある。其頃、百年は未だ左樣に賣出さず、世間から『百年はまだお座敷稽古だ、一人も門弟が無い』と言はれるのが苦しさに、ツマリ女史の父を、門人兼立關番に雇つた樣なものであつた。この人が雉子鉾の屋根裏などに揮毫したこともあつて、多くの粉本を藏してゐた計りでなく、その長男即ち女子の兄も、亦同しく繪畫を修め、鈴木松年の門に入つてゐた。言はゞ女史の家は、代々の畫書きである。

◎處がこの父と兄と、相尋いで死んで了まひ、跡に殘れるものは、天にも地にも、唯た女史一人。數代傳へ來つた畫道を廢絕させるのは、實に惜いもので、父祖の位牌に對しても申譯がないといふので、兄の遺志を受け繼ぎ、俄かに繪畫を修めることになり、松年の門に入つたのである。

◎今の竹内棲鳳は、女史の父に手ほどきをして貰つた緣故があるので、其後、女史は棲鳳の門に轉じたが、其頃まだ京都に居つた跡見玉枝女史が、櫻を專門に硏究し、また上村松園女史が美人畫を專門にして居るといふ處から、棲鳳は女史に勸めて、寧そのこと、專門家の至つて少ない歷史畫をやつたならとのことに、女史も其氣になり、歷史畫を專門とすることにしたのである。

◎歴史畫家として、第一に筆を著けたのは、巴御前の圖であつたが、巴は連錢蘆毛の馬に乗つて居たといふので、其馬を描くには、女史も少らぬ苦心をしたのである。

◎女史も始め連錢毛も、連錢蘆毛も、同じものゝ樣に心得て、白毛の中に錢を連ねたやうな、斑紋毛の馬を描いて、人から笑はれ、棲鳳にも『これでは仕方がない』と言はれた尤も這樣(こんな)の間違は、獨り女史はかりでない、何の某と名乗る先生方にも、同樣のことをやらかすことが少くない。連錢蘆毛といふのは、白の毛の中に、錢を連ねたやうな斑紋がある上に、膝から下は、皆黒の毛が生へて居る馬なので、連錢毛なら時々見當りもしようが、蘆毛と來ては、さうあるものでない。

◎女史は、この連錢蘆毛を實見しようと、種々人に聞合せたが、其頃上賀茂の神養は、連錢蘆毛であるとのことに、態々二里半も辿つて、行つて見ると、疾に死んでしまつてる。今度はしづ原の農家に、一匹ありと聞いて、出掛けて行くと、折あしく今しがた、山に牽いて行つたとのことに、一旦は落膽しながらも、いよ〳〵居るといふ事が知れたので、翌日また出掛けて、寫生をした。其歸りには、盆を傾くる如き大雷雨で、濡鼠の樣になつて歸つたが、宅ではそれを慰めて呉れるかと思ひの外、それ位の事を苦にする樣では、迚も立派な畫書きになれるものでないと、散々言はれたさうな

◎肝腎の連錢蘆毛は、首尾よく寫生したものゝ、參考書といつては源平盛衰記や、聚古十種などに過ぎぬのでなか〳〵思ふ樣に畫の纏りがつかぬ。師の棲鳳からは『賤原まで連錢蘆毛の馬を見に行く程の熱心があるから、二條の城の松原に行つたがよい夜遅くなると蘆毛の馬が出て來るから』なんて、調戯はれてゐたがしかし其熱心込めて描いた巴御前は、展覽會に出品すると、直ちに契約濟の札がつき、且つ會からは褒状を贈られた。

◎それから第四回勸業博覽會のときには、正行が辨内侍を助ける所を描いて、評判喧しく、世人も漸く歷史畫を注目するやうになり、隨つてそれを畫くものが多

くなつたて、棲鳳から『歴史畫を描く人が多くなつては、なか／＼尋常一樣では往かぬ。何にせよ、先代から花鳥專門で、粉本が澤山あるから、それを活して使ふようにしたらば』と注意されて、更に人物より花鳥に筆を轉じたのである。

◎ある時江州長濱の下郷傳兵衞――衆議院議員になたこともある男――の處から、席上揮毫の爲めに、女史は上村松園、中井梅園兩女史と共に招待された。始めの約束では、下郷家の別莊に、女史の一行を泊める筈であつたが、別莊では却つて氣兼であらうから、との親切より、同地一等の旅館に案內したが、始めの約束に違つたので、松園は大分不平らしく『明晩も此宿に泊るやうな事になつては、母親に心配かけるから、是非明朝早く歸京する』と言ひ出した。女史と竹園とは『折角處まで來て、先方でも明日は、方々案內して見物させるといふのであるから、寫生かた／＼泊らう』と勸めたけれども、松園どうしても承知せずそれなら妾一人で歸るとまで言出したので、では仕方がない、妾共も一處に歸りませう、それには明朝早くでないと、下郷家から迎への車が來るから』と、此處に三人相談して、翌朝逃げるが如く歸京の途に就いたのはよいが途中の停車場で、新聞を買つて見ると、前日の模樣から、席上揮毫の事まで委しく書いて、終りに其日の豫告まで出てゐたので、それでは先方に對して、餘りの仕打であるから、此から引返さうと言つたけれども、松園が聽入れないので、其儘歸京したが、かくとも知らぬ下郷家では、三人の女畫描きが、神隱にでもなつたのであらうかと一時大騷ぎをやらかした。

◎京都の畫家は、なか／＼善く寫生をやるが、それに就ても可笑しい話がある。或る時のこと、棲鳳社中が、明朝の一番汽車で最寄の停車場から乘つて、牛尾山の上り口で落ち合ふとのことで、寫生に出掛ける約束をした。女史は約の如く、其朝七條の停車場へ行つて見ると、誰もまだ來て居ない。大方稻荷の停車場から乘ることであらうと、稻荷まで來て、合圖の樣に岩から首を出して見ると、誰も來ない。ハテ變だと思ふてゐ

る間に、稲荷の宮司の息子が來合はしたので、二人は山科まで來て、汽車を下りたけれども、まだ誰も見えない。それなら二番で來るだらうと待つて居た、けれども二番にも來ず、此まゝ歸るも詰らないから、兎に角山に登ることにしやうと、相談を整へ、彼處此處と寫生しての歸るさ、まだ若い同志の男女のことであるから、途中人に揶揄はれるので、宮司の息子は、體裁が惡かつたと見え、餘り人通りのない山道を撰ひに撰つて、ズン／＼行くので、始めは女史も、棄てられぬようにと一生懸命追附いて歩いたものゝ、男の足に叶ふべきやうなく、遂に棄られてしまつたので、腹も立ちて情なくもなり、知らぬ山路を無我無宙に駈けづり廻つた結句の果、やつとのこと一人の男に出逢ひ、道を尋ねると其男は山廻りをする人（稲荷山にある支社を廻參する人）て、それなら御山廻りは跡にして、本社を先に拜みませうといつて、女史をつれて本通りに出た。てやつとのこと歸京したが、此日棲鳳の宅て急病人が出來たため、行かれなくなつた、その通知が女史に漏れたのであつた。（完）

鬼面魔語

醉美生

○世に最も人をチャームする力あるものは眼である。眼の最も人をチャームする力ある時はハツキリと見開いた刹那にある。だから見給へ、少し手腕（うで）のある女は、向ふから男が來たなと見て取れば必らず先づ俯いて來る。いよ／＼近いて距離が一間二尺ばかりになつた時、始めて人の來るに驚いたかの如く急に顔を擡げて眼をパツト見開く。ギロリと眼玉を据ゑて相手の顔を正視する。やがて面はゆげにして眼を下に落す。これ全く此呼吸を呑込んで、男を眼で殺さんとする計略に外ならずと思ふ

○一夫一妻を以て正しきものとするのは如何なる理由であらうか、宗敎的の思想は先づ別物として、科學上の根據は何處にあるか。世界の男女の數が略ぼ同一であるといふのが其故も强き理由であらうか?。眞面目に人世のことを論議せんとする人は是非一考すべき問題と思ふ。

○近親間の結婚の有害なることは巳に學問上より證明されて居る。花の如きものでも一花中の雄蕋雌蕋の附着を嫌うて異花との附着を求め又同株の中の花と花との結合よりは異株と異株との結合を求むることは隱れもなき事實である。一夫一妻の說にはかゝる學問上の根據を求むる

能はざるものであらうか。

○或人の說には多數の異性に接すれば花柳病の如き生殖器病を惹き起すもの(傳染にあらず)だといふことである。若し此說を眞なりとすれば多數の異性に接するのは人間の天性に反したものとする一證となる譯だ然し其或人も他人からの又聞であるといふたから今俄かに信ずることが出來ぬ。

○此頃石田孫太郎といふ人が「嫉妬の研究」といふ小册子をあらはした。なかなか面白いことをやつたものだ。其說によれば「一夫一妻の起因は主として嫉妬にある、古の如く一夫多妻の行はれざるに至たのは全く女の嫉妬の爲めである」といふて居る。これは一顧すべき議論と思ふ

○又同書の中にこういふ說がある「男が一人の女と接する時は一二回にして性慾を失ふが數人の女と接すれが六七回も新たなる性慾を生ずる、人の性質は天然に多數の異性を求むる者だ」とある。最も放蕩家に都合よき議論だとのみ一笑し去らず餘程研究すべき價値あるものと思ふ。

○然しながら僕はどうしても一夫一妻の說を强からしむべき生理上の理由があるものゝやうに思ふ、又實にあらせたいものゝやうに思ふ。

○ショーペンハウエルなどは女は多くとも一年に一人の子(双生兒の時は二人。但し白太夫の妻は三人一所に産んだ相ぢやが嘘か誠か僕知らぬ)しか産む能力ないが男は數千人を産む力があるから一夫多妻決して惡しからずとの議論をしたやうに記憶して居るが、例の女人惡口說としての外見るの價値なしと思ふ。

○小善小德行ふに足らず、小惡小不德謹むに及ばずといふ人は共に人道問題を談ずるに足らぬと思ふ。我等が見て以て至小至微なりとするもの人道の上に於ては時に至大至上の影響を及ぼすことあるべきを疑はぬ。千馬力の大器械も其運轉は僅か髮の毛一筋によつて停まり、又油一滴によつて再び回轉することもあらう。一滴紅を滴らして滿盤の水皆爲めに紅しの語を想へば小善小德も小惡小不德も共に大に愼むべきぢやと思ふ。

○議論をいへば千里の差があつても、行(おこな)つて見れば五十步百步の違ひに過ぎぬこと人生間々あることぢや。例へば如何に慈善を惡しとする自我主義の人でも乞食の餓え死なんとするを見れば握飯の一つも與ふべく又如何に博愛を唱ふる慈善主義の人でも己れが餓死してまで他人に食はしむる勇氣がないに極まつて居る。議論は議論としての外餘り重きを置くに足らぬものと思ふ。

○花電車といふものは側で見て居ると實に奇麗なものだ、自分も一つ乘て見たいと思ふ情に堪へぬ程奇麗なものだ。然し扨乘て見ると一向詰らぬもので今迄の美觀は全く其目に見えず、取得はたゞ街上の小兒にワイワイ囃さるゝに過ぎぬ。名譽とか高位高官とかいふものも大方こんなものであらうと思ふ。

○社會主義の人は是非人間の私有心と公有心とを調ぶる必要があると思ふ。圖書館とか、公園とか、音樂堂とか人間が公有的に衆と共に樂むの情が一方に發達して來て居ることは爭ふべからざる事實である。然し

ながら私有財產制によつて數千年間發達して來た私有心が如何なる程度まで抑壓し得べきものであるかは餘程の疑問と思ふ。

○十二月の「新古文林」に出た小山田八千代の「志賀さん」はなか／＼の才筆である、創作の上では確かに兄さんの上手である。閨秀作家の寂れたる今日大に御奮發を願ひたい。

○先日の大學事件を見れば昔から學者の大事をなす能はざりし所以がわかる。職工のストライキと同視さるゝの恐るゝとかいうて、徒らに形式に拘泥し、機を失し、勢を殺し、遂にさしたる實質上の効果を收めずに終つた。返す／＼も惜むべきぢや。

○一方には詩人と共に星の美觀を咏嘆し、他方には天文學者と共に星の實際を研究したい。或は之を矛盾呼はりをする人があるかも知れぬが僕は決して矛盾でないと思ふ。若し假りに矛盾としても此矛盾を調和した上に天地の見方を立てたいと思ふ。

○何か特別の面白いことでもないと人生は實につまらぬものゝ樣に思ふのは普通の情である。然し一旦病氣になつて非常に苦しんで見ると、病氣さへ直れば愉快で堪らぬ樣な氣がする。だから僕は不平無聊禁ずべからざる時は、病氣の時を顧みて、健康といふ一大恩惠に浴して居ることを喜びたいと思ふ。

○本郷座の「伯爵夫人」は評判程のものでなかつた。河合のルイズは英語も達者、調子もよく、其器用驚くべしぢや。又妙な泣き方をやつてもわる洒落にならず、たゞの一人も笑ふものなどなかつたのは大なる手柄ぢや。然しながらあの役の評判は寧ろ事件其物の悲しいのと、又脊景、構案等の詩的な爲めであつて、技藝としては左程に褒むべきものにあらじと思ふ。

○藝としては僕は高田の津久井が函根山中數馬に別るゝの一段をとる、あーいふ場になると高田以外人を泣かしむる人はあるまいと思ふ。高田の惡くいはるゝのは數馬居宅の場の如く、或は羽織を脫ぎ、或は椽に腰かけ、或は布團に兀坐し、或は柱に衝立つて餘りにやり過ぎて他の俳優を呑まんとする弊がある爲めであらうが、兎に角、人の腑から涙を絞り出す力ある人は此人である。又數馬居宅の場でも織枝老人に向ていふ言葉には何氣なく面白く出たのが澤山あつた。高田を惡くいふ人は全く藝を見るの眼なきか、又は其短を以て其長を葬らんとする酷なる人であると斷ずるを憚らぬ。

○藤澤の數馬例によつて例の如し。

○木村周平の藝はなか／＼侮るべからざるものと思ふ。槇原伯を如何にもづう／＼しく、にくてらしく、且つ大きくやつて退けたのは手柄ぢや。又大詰に於てトミーを抱て懺悔するの一段人をして涙滂沱たらしめたのは其技藝決して尋常にあらじと思ふ。

○木下吉之助の延代、功名心のために戀を貫かざりし人としては少し物足らぬ恨はあるが、なか／＼奇麗に出來て妻君や娘などの同情を惹き得たのはお目出度い。

○本郷座で演ずるに最も適當したものを求むれば天外氏の「新學士」

「新夫人」てあると思ふ。天外の作て、劇にされたのは「魔風戀風」てあるが、あれは小説として讀むべきもので劇としては單調にしてダレ場の多きに堪へぬものぢや、あれを劇にしたのは青年男女の人氣に投ぜんとしたのに外ならぬてあらうが若し劇に適當としたものと思うてやつた事てあれば其沒鑑識實に驚くべしぢや。之に反して「新學士」「新夫人」は大阪の新聞に出た爲めにさしたる評判もなかつたが、小說としても價値あり、殊に劇としては充分成功すべき作と思ふ。況んや高田の桂田剛三郎、河合の松枝などに至つては恰かも二人の爲めに書き下ろしたもの丶如くシツクリと嵌まるべき役てある。其他天川彰ても、輪沼立策ても、狩村學士ても、安田保姆ても、千代子ても三佐保ても人物に變化あり、又全篇の事件に波瀾あり、うまく仕組さへすれば非常に面白い劇が出來ると思ふ。あーいふものをやらぬのは本鄕座のために甚だ惜むべきてある。

○夏目漱石氏は依然として去年來の活動を續けて居る。否今年になつて益〻花々しい武者振をあらはされたやうに思ふ。「ホト、ギス」には「猫」の續きを五十五頁も書かれ、「帝國文學」には六十餘頁に亘る「趣味の遺傳」を出された、「猫」の中て最も妙と思はる丶のは運動を叙した一段て、蟷螂狩の精細、垣巡りの滑稽、此作者ならては到底書けるものてない。結末の悟に關する議論も奇抜を極めて居る。「趣味の遺傳」は題丈け見ると論文のやうてあるが、論文てはない、小說てある。淸き想、美はしき描寫、篇中到る處に滿ち溢れて居るが結末餘り簡略に過ぎて全體の釣合が取れぬ樣な心地するのは遺憾だ。然し兎に角新春の文壇に讀みごたへのあるのは此人の作てあつた。



漁村縱談

夢蝶庵主

一

中央公論記者、足下。

余は海濱に産れた精てある歟。或は余の友人に水産其の他航海業に從事してゐる者が多い精てあるの歟、海といふと、妙に注意を惹いて、一種の感慨が起る。今度の日露戰役に於て、海軍が無上の勝利を占めたのを見、一層此の感情が高まり、昨今は、特に、切に、海といふ感念が胸に刻まれて、自分ながら不思議に思つて居る。

然も。余輩の志す所は、民人の生活問題。以上の如く詩人的感想に包まれながら、他に於ては、海に對し

て、詩趣を催すと同時に、海に關する勞役者の生活問題が、常に胸中の問題と爲つて居る。

二

「海に關する勞役者」といふも、幾多の種類あり。船舶勞役者も「海に關する勞役者」の一種類である。農業勞役者と肩を並べてゐる漁業勞役者――漁民も、其一種類である。何れも「海に關する勞役者」の大傘の下に居るが、その性質は、一は交通勞役者に屬し、他は農業勞働者、山林勞働者、鑛山勞働者と言つたやうに、段階を作つて、特種の社會組織を爲して居る。

最も船舶交通の充分でなかつた維新前などは、船舶勞役者は、或意味にては、漁民の一種で、その勞役者は、常に漁民の中より出てゐたやうであつたが、船舶交通の旺盛と爲つた今日、漁業勞役者と船舶勞役者とは、劃然と區別が出來て、漁業勞役者の方が、なほ混沌たるものなるに拘らず、船舶勞役者の方は、年月の進むと共に、發達の狀を示して、文明粧あり。即ち昔日は漁民に附屬してゐた船舶勞働者は、啻に獨立の境地を拓けるのみならず、更に漁民を壓して、特種の面目を備ふるに至つたのである。

船舶勞役者につひては、異日、或は言ふとあるを以て、余は、今、爰に從來より存せる――農業勞役者と茲び稱せらる、漁業勞役者の現狀に就て、聊か見る所を述べやう。

三

我國の漁業沿岸を見るに、本洲は、二千七百〇五里、四國は、六百七十六里、九州は、二千四百〇六里、北海道は、千二百四十二里、都合七千〇二十九里の延長に及んで居る。我國の如き陸地を以て、漁業沿岸の長さは、文明諸國、他に類例はあるまい。漁業沿岸の長さのみならず、漁民數に於ても、我國は他の文明諸國に比して、遙に群を拔いて居る。試に農商務省水產局の調査に依れば、左の數字を現はして居る。

	戸數	人口
本州	五四三、九三七	一、八三二、八七九
四國	八〇、四七一	三二四、四七一
九州	二二八、八〇四	九三〇、八七八
北海	五一、九一〇	二五〇、四二〇
計	九〇七、一二二	三、三三八、六〇〇

即ち臺灣を除いて、日本全國の漁業戸數、九十万七千百二十二戸で、人口は三百三十三万八千六百人ある計算となる。一體、我國の漁業は、中央部より東西に

開いて、漁民の戸數も、中央部の瀬戸内海は、最も繁殖してゐる譯。百事文化の遲れてゐるは日本海岸、及北海道沿岸は、漁場の延長せるにも拘らず、漁業の狀況も、漁民の生活狀態も、極めて寂寞としてゐるのだ。

そは兎も角も、沿岸線一里每に對する漁業戸數、及ひその人口を擧げて見れば、斯うてある。

	戸數	人口
本州	二〇、一八二	六七、七五七
四國	一一、九〇三	四七、九九八
九州	九、五〇九	三八、六八九
北海	四、一八〇	二〇、一六二

此數字に依りて、大抵その沿岸の繁否が譯るてあらう。併しながら、本州沿岸の繁榮であるのも、瀬戸内海を中心として、大平洋沿岸一帶て日本海岸、特に越後以北は、甚だ振つて居らない。

四

前項に揭げた數字を概括して言へは、我國の漁業民數は、三百三十三万八千餘、假に三百万とするも、日本全人口十幾人に對して、一人の漁民ある計算、最も此中には、農業を兼ぬるものもあらう、船舶勞役者に屬すべき者もあるてあらうが、兎に角も、我國に漁民の多いとが分かる。諸威國は、世界の漁業地を以て名あり。その漁民數も、全國人口五人に就て一人の割合てあるとか、單に此一事を以てせは、諸威國は世界第一の漁業國であるに相違ない。然れども、漁業者人員の總數を見れば、僅に四五十万で、三百万の漁民を有する我國の傍へも寄れぬ。といふのも、諸威の全人口を擧げて漁民とするも、全國の全人口は、僅に二百万といふてはないか。北米合衆國も、或意味に於ける漁業國てある。特に遠洋漁業の如きは、その勢、猛に、我國北海の海獸獵は、常に北米人に蹂躪されてゐたのは、普く世人の知つて居る所、然かはあれ、漁民の數は、全人口七十五人に付て、僅に一人、その總數、十六万人だといふから、大した數ではない。

海國！海國！余輩は、斯くの如く漁民數の多き一事を以てしても、我國の海國なるとを切に感ずる者てある。

五

然れ共……公論記者足下。余輩は爰に『雖然』の一轉語を以て、此文章を中途に切るの不幸を慨く。我國には上述の如く、漁民數に於ては、世界一の一大海

國なるにも拘らず、漁業に投ぜられある資本額、及その漁民の生活狀態を見來ると、余輩は漁民數の多き丈けそれ丈け、甚だ見榮せざる、淋しき、貧しき海國たるに啞然として居る。

精確なる統計は、之を知るに由ないが、信ずべき或水產業者の言に依れば、數字の上に現はれてゐる我國の漁業額は、一ヶ年四千幾百万圓であるさうであるが。なほ某學者は、此數字を否認し、我國の漁業額を計算して、七千万圓乃至八千万圓として居る。假に一ヶ年六千万圓とするも、之を漁民一人の收額に配せは、一ヶ年僅に二十幾圓！、一ヶ月僅に二圓內外！ヨシ一ヶ年の收額を倍にし、大負けに負けて、假に一億二千万兼に見積るも、漁民一人の得る所、僅に、一ヶ月、四圓內外！嗟呼之を以て我國漁民の收額なりとせば、その生活狀態も、思ひ遣らるゝではない乎。

六

右は收額の上より、我國の漁業狀態を見たのであるが、退いて漁業に投じつゝある資本額を見れば、瞭然と、我國の漁業狀態が眼前に現はれる。北米合衆國の如きは、漁業に投ぜらるゝ漁船漁具の資本額は、一億二千圓万と稱せられて居るのに、我國の漁業資本はと言へは、某學者の調査に依れば、僅に二千三百万圓、之を漁民一人の資本額に當つれば、北米の漁民は、一人に付六百二十六圓であるといふにも拘らず、我國の漁民は、僅に十圓內外。

公論記者足下。今日最も卑賤の勞働を以て稱せられ、社會の劣敗者を以て迎へられつゝある人力車夫の如きも、所有車數は、車輛一臺に三十圓乃至四十圓の資本を投じてゐる、然るに、世界の大海國たる我國漁民の、漁業に投じてゐる資本額は、一人に付いて僅に十圓內外に過ぎないのである。我國の漁業狀態も、また憐れむべきではないか。

七

最も我國は、啻に漁業のみならず、農業でも、工業でも、また商業でも、資本の程度低く、單に資本高に依りて、その狀態を批判するのは、聊か酷に失するの嫌あり。特に漁業の如きは、恰も各地方に散在する手工業と同樣、專ら勞役に依りて營んでゐる國柄であるから、資本額の卑低なる割合に、その不足を勞力で補ひ、漁業狀態も、資本に割合して、相應に進歩してゐるのは、余輩も認むる所であるが、兎に角も資本額の低きは、我國漁業の規模の小なるを示せる者で、延長

七千餘里の漁業沿岸を有する我國の名譽とすべきてはない。况んや、前々項に掲げたるが如く、その收額低小なるに於てをや。

八

以上、ほんの一概界ながら、我國漁民の一斑を擧げた。之は大體より述べたので、我國漁民の全體が、悉く右の如き狀態に在る者とする譯に行かぬのは、言ふ迄もなく、同じく漁業者——漁民といつても、農業や、工業と同じく、專ら資本を供給してゐる網主といふもあれは、船持といふ者もあり。資本家の側を見れは、土地に依つては、巨額の收入を得て居る者もあり、特に近年鑵詰其他の製造漁業が旺んに爲つてより、著しく繁昌を加へた土地もあり。なほ遠洋漁業の獎勵行はれてより、各地何れも籍進の模樣が見へて居るが、併しながら、之は小部分で、全體は、依然として混沌の裡に包まれ、同業者の增殖其他の原因より、昔日に比べて、著しく頽色あり。

知らず、水產學者其他の識者は、之れを如何に見んとするか。

九

中央公論記者足下。

製造の上より、漁業を論ずる者あり、漁撈の上より、漁業を言ふ者あり、然れ共生活狀態の上よりして、漁民の狀況を言ふ者が甚だ尠いやうに思はれたから、所思を記して、敢て坐右に呈す。足下、世界の交通を論じ、船舶の進步を說くの傍ら、此寂寞たる漁村の上にも盡す所あらは、實に此海國の幸である。

社會側面觀

▲奇警なる觀察の投書を歡迎す▲二百字以內葉書に限る▲締切は每月十八日

▲ポテトーホール設立案　神田　芋兵衛

現今東京市內に當然在るべくしてしかも未だ世人の注意せざる一大金儲事業あり。そはミルク、ビーアを飲まむとする人の爲めに各ホールあるが如く、燒芋も食はんとする人の爲めにポテトーホールを設くる事之なり。燒芋の好華客たる婦人は、今の不體裁なる燒芋屋の店頭に立つを耻ぢ三度に一度は其食慾を抑ふるなり。今屋外より見えずして即座に温かき芋を食するを得るホールを作らば、恰も男の學生等のミルクホールに入るが如く女の學生其他婦人諸姉の大觀迎を受け千客萬來更に疑ひなし。敢て金の欲しい人に御勸め申す

▲東京三不思議　日本橋　小圓了

銀座の或る勸工場の屋上にカンコナバとあり。

街鐵電車の新宿行はしんじく行とあり。
魚河岸や魚屋の魚字の下の點は四個でなく必ず三個なる事。

▲侯爵家と新聞紙　本郷　直角生

日露戰爭の始た時本郷の前田侯の屋敷は丁度建築中で有たが、一國安危のかゝはる所、家の建築どころでないと工事を止めたので都下の各新聞は一齊に筆を揃えて賞賛した。所で戰爭が連戰連勝したので安心したものか又途中からこそ〳〵やり出して極めて堂々たる極めて立派なものを作り上げた、併し此所業に對して先に賞めた新聞は今度は一言も惡口攻擊するものがない。始めは賞賛？後は沈默？富める侯爵家と新聞紙。ハテナハーテナ。

▲面白い諺　千葉　感心居士

昔からの諺には大變面白いのがある。女が厠の掃除をすれば婦人病にかゝらぬと云ふのなどはは頗る妙だ、厠の掃除などは誰しも厭やなもの、それをかく云ふと淺墓な女の考から、此かゝり易しくしかも苦しい病氣になりたくないと思ふて進んでやる樣になる、かゝる厭やな仕事を女子に押し附けて呉れた此諺の發言者に對して僕等男子大に感謝せねばならぬて。

▲死して余榮あり　江戸川堤　虎皮生

新聞紙上に記載さるる年若き婦人の溺死者は必ず美人なり、依之視之れば溺死の婦人は必ず美人に限り醜婦は新聞發行以來未だ溺死せし事なきか、或は記者の眼に映じた若き溺死婦人は皆美人となるやも計かり知るべからず、かかる筆に依りて其死を報ぜらるる溺死婦人は死して猶餘榮ありと云ひつべしだ。

●地方雜觀　丁字樓

（二十一）市町村長に吏臭多し

市會、町會、村會等は、よく市長、町長、村長を粗製し濫造す、此粗製濫造の市町村長は、或ひは知事より、或ひは郡長より、押付けらるゝ事柄に付、毫も思慮を費すことを爲さず、たゞ命是れ聽きて、直ちに或る命令執行の手先となり了す、乃ち彼等は、多くの場合に於て、知事又は郡長に操らるゝ活人形たり、斯の如き者いかでか民意を代表するを得べき、宜なり、今日の市町村長等に、吏臭あるものゝ多きことや。

（二十二）自治團體に氣骨なし

是等の徒輩は、東京市の瓦援に付、同市參事會が、政府の處置を非認したりし、思ひ切つたる決議に對し、殆んど失神せんばかりに喫驚したるならん、然れども本來自治團體には、稜々たる氣骨なかる可からず、否らざれば不利を蒙ると大なり、吾等は今の自治團體に氣骨なきを惜む。

(二十三)　官吏の下馬と心得居れり

自治團體に氣骨なきは、主として市長、町村長等に吏臭多きが爲なり、彼等の多數は自己の位地を自覺せず、寧ろ自己を卑下して、官吏と同一の階級に置き、下らぬ官吏のお髯の塵をさへ、掃ふ可きものゝ如く考へ居れり、こは久しく行はれ來りし、官尊民卑の惡習に養はれたる、一種の迷信の、容易に去り難きに由る事なれども、自己を官吏の下馬と心得居るより、市役所、町村役場をも、勉めて官廳らしくせんとし、厭ふ可き繁文縟禮の弊風をさへ、こゝに持込まんとする者あるは、その愚眞に憫れむ可き也。

(二十四)　繁文縟禮の弊風

繁文縟禮の弊風は、到るところ之あるを見る、市役所の如き、町村役場の如きは、尤も之を改むるに鋭意なる可き筈なれども、其吏員が官吏の古手にして、吏臭多き時は、容易に事務の簡約を尙ぶが如き考へを出すとなく、厭ふ可き弊風をさへ、かたく墨守せんとする傾向あり、かゝる者は、「Time is Money」とも、寸陰是寶とも思はず、法規を守つて、其定めたる或る手續を、正直に行はんとするが如き良民をして、徒らに手間暇を潰さしめ、遂に法規を重んじて、當然の事を行ふの、愚にして且利ならざるを思はしむるに至る。

(二十五)　俗吏根性

事こゝに至りては、期限ある納税の如きも、自然延引して、滯納者を出すとなり、執務上遲滯を來すと多し、故に手續を簡約にして、事務を捗取らしむるは、吏員自身にも亦利益あるなり、然るに之を是れ察せず、徒らに手續を煩瑣にし、事務を遲滯せしむ、之を稱して俗吏根性といふ、この俗吏根性、時に國を誤まる、顧みざる可けんや。

(二十六)　屬僚政治

又地方廳には、往々屬僚政治行はる、長官の屢々更迭し、屬僚の永く留職せる者ある所、必らず此弊あり、察せざる可からず、而して所謂屬僚政治には、多く情實を伴ひ、上意下通せず、下情上達せず、その間に於て俗吏事を專決す、危險これより大なるはあらず。

(二十七)　進歩なし改善なし

屬僚政治の弊斯の如くなれば、其處には、進歩なし、改善なし、凡庸の知事事務官、また素より進歩、改善の何たるを知らず、乃ち地方の發達を期するは、黃河々淸の時を待つに均し。

(二十八)　恐る可きは刑事等の擅斷

尤も恐る可きは、警察事務に於て、刑事等の擅斷行はるゝ場合是なり、刑事等の人物、及其道德の程度如何は、今言ふを須ゐず、その平生接觸する所は、道德心の最も欠乏せる者なれば、如何なる手段を講ずる

をも恥とせず、既に然り、社會の裏面に於ては、彼等の間に、如何なる醜事の行はれつゝあるかは、想像に餘る者あり、况んや四面の監視太だ嚴ならざる地方に於てをや、凡そ奸の伏する所は人に在り、乃ち尤も撰ばざる可からざる者は人なり、刑事の如き殊に然り、然れども其常に爲す所は、血を以て血を洗ひ、毒を以て毒を救ふが如き事多ければ、随つて又危險なる人物多し、然るに今、警察署長又は分署長屡々更迭し、署内の幹部、巡査部長等亦皆頭腦の明敏を欠き、且地方の情況に疎からんか、彼等が此間に乘じて、爲す所の如何は、多言せずして知る可きなり、戒む可し／＼。

（二十九）職服を一定し徽章を附せしむ可し

地方官吏の出張して郡村に至る者、その旅宿に於て行ふ所、言ふに勝へざる者あり、而して官吏の威嚴を損し、信用を失するを尠からず、若し夫れ威嚴を保ち、信用を重んぜしめんには、職服を一定して、徽章を附せしむるを可とす、斯くせば官威を冒して官權を弄するが如き事も、亦尠かる可し。

（三十）中央大官の視察

中央の大官、地方に來る者、狀況視察と云ふと雖も、實は則ち「概況を瞥見」するのみ、而して旅館に於ては美妓を擁し、宴會に臨みては美酒に醉ふ、戰爭中、人の子の、多く命を殞し、創に苦しみし時に於てすら、或者は、地方到るところに馬鹿を盡せり、その所謂視察なるもの丶眞面目ならざる亦知る可きなり。

（三十一）名實相伴はざる良刺史

中央大官の、地方に來りて、馬鹿を盡す者あれば則ち、儼然として之を叱責する底の意氣を存する地方官、今日果して幾人かある、彼等の爲す有るに足らざる、また此意氣を欠けばなり、それ上に阿れるの風、一般に行はれて、全く下を率うるの能なき者も、諂諛の術に由りて、その職に居れり、その徒また腐敗せる、地方の上流社會を籠蓋するに長ず、斯て徒らに良刺史の名を博する者なきに非ず、嘆しむ可きなり。

（三十二）寄附勸募の受込み

憫む可きは、何にても受込む地方の官公吏なり、神社佛閣の寄附金周旋の如き、近年最も多くして、人の苦しむ所、而も中央に於ける大官鉅公の、之を賛助せるありて、一方の添書を寄するとあれば、唯々諾々その命を畏まり、左なきだに出費に苦しむ地方の上中流の人士をして、之に應募せしめんとす、此情實づくめなる寄附勸募の爲、他の必要なる事業を妨げらるゝこと多し、望ましきは斯る場合に、民情を述べて、峻拒する底の人あらんこと是なり。

（三十三）恤兵救護の實行如何

戰爭終了し、平和克復したりと雖も、恤兵救護の必要は、猶これ有り、然れども之が實行は、果して如何なる可きか、顧みれば去年開戰以來、各市町村に在ては、夫々恤兵救護の規約を設けたりと雖も、其實行の完からざる者多し、例へば勞役に衣食するの壯丁、徵されて兵役に出づるや、家に在るの老親、愛妻、稚兒の如きは、其日よりして、衣食を

得るに苦しむ、然れども遺憾なく、之が救護せるもの果して幾何かある、多くは調査と云ひ、願出と云ひ、煩瑣なる手續を經たる後に非ざれば、その救護を實行し始めず、乃ち其間に飢死する者、時に之なきを保す可からず、想ふに斯の如きの場合に處して、飢餓を拯ふは、火難を救ふが如く急切ならざる可からず、しかも此用意を欠けるもの多し、況んや規約の正條を、至當に實行する、誠心を欠けるあるをや、あやしきは德義欠乏の今日に於ける、恤兵救護の實行にこそ。

（三十四）監督能く行はれず

既に然り、如何なる地方官か、將官を歡迎するの心を以てして、憐れむ可き兵士の家族を巡訪したる、恐らくは進んで彼に趨くの心あるも、退いて此を顧みるの心なからん、監督の能く行はれざるも當然のみ。

（三十五）人物の拂底

要するに地方今日の狀況は、多く失望す可き者あり、是れ總ての機關に、其人を得ざるに在り、吾等何、言ふ可き事の多くを有するも、詮ずる所、「人物の拂底」と云ふに歸着す、但し玆に人物と謂ふは、今の小才子にあらず、完き人格の備はれる者を謂ふなり、吾等は不幸にして、廟廊の上にさへも、心服す可き人物を見るを能はず、一國の代表的人物も、甚だ好ましからぬお人柄なるに失望し居れり、この時また地方の狀況の、多く失望す可き者あるを異まず、アヽ何の日か、吾等をして滿足せしむ可き、前途を想へば、尙太だ遼遠なるを覺ゆる也。

（完）

新刊批評

▲最新の韓國

松宮春一郎著
早稻田大學出版部發行

本書は主として「日露戰爭中に於ける韓國の諸問題」を記述論評せるものにして、本書の成れる理由は略ゝ其序言中に明かなり。序言の一節に曰く「對韓經營を口にするもの、動もすれば韓國民の權益を無視し、悉く之を我國に收得せんことを唱ふ。是れ思はざるの甚だしきもの也。斯くの如くにして美果を得たるの例は殖民史の敎へざる所也。彼も利し已も益す、是れ殖民政策の要訣とす」と。又曰く、「韓國に於ける我基礎は漸く成れり、而かも發展は將來の活動にあり。過去を知るは現在を知る所以、現在を知るは、將來を知る所以、余の本書を成せる微意も玆にあり」と。

一卷章を分つこと三十一、日露戰爭の開始より筆を起して戰爭中の政治、外交、經濟、敎育等に論及し、又日常の生活及び將來に於ける韓國の地位等に至るまで一わたり說明し盡したり。案を拍て快哉と呼ぶが如き筆力は著者の有せざる所なれども概して穩健着實の記述大に多とするに足るものあり。今や韓國は我保護の下に立つて諸ゝの施設皆我手より出てんとし、列國亦皆目を括して我一擧手一投足を注視しつゝあり。韓國經營の成ると成らざるとは實に我國民が大陸に於て活動し得る能力あるや否やの試金石なり。而して韓國經營の成ると成らざるとは我れよく韓國の眞相を解するや否やの問に係ること大なるを思へば、本書の如き目

下の最も須要とする所にして心ある人の一讀する怠るべからざるものなり。(定價八十五錢)

▲家と女

岩谷小波著
隆文館發行

小波氏を以て單にお伽噺のオヂサンとのみ思ひ込むは非なり。氏は一面には無邪氣なるお伽噺の總本家たると共に一面には極めて交遊廣く、極めて處世に巧みなるよりして其觀察にはよく實際を穿ちたるもの多く、讀んで世渡りの參考となるもの少からず、本書は主として家庭、婦人、社交等に關するものを收め、其「社交私見」は嘗て本誌に連載せられたるものなり。「耶君放語」「細君低語」の如き卷中の白眉と思はる。(定價七十五錢)

▲現時之無線電信

松代松之助著
電友社發行

無線電信は最近時に於ける發明の最も驚くべきものなり。若し其理を知らざるものよりして之を見れば殆んど一大奇蹟に類するものあり。かゝる大發明の學理を知るは單なる智識としても頗る重要にして又興味あることなり。況んや日露戰爭に於ける此利器の功蹟を聞きたるもの、いかでか之を研究せんとの念を動かさゞるべき。著者即ち此需要を充たさんが爲めに、本書をあらはし勉めて通俗に說明敍述せんことを試みたり。著者は我國最初の海軍省無線電信調査委員として頗る斯學に貢献あり、爲めに敍勳の榮を負へるの人、本書の如き充分精確にして充分信憑すべき價値あること論を俟たず。苟も世の文明に後れざらんとする人は必らず一讀すべきものたり。(定價一圓)

▲イワンの馬鹿

內田魯庵譯
火鞭會發行

今の日本にトルストイの著作を譯するに最も適當な人を求むれば、蓋し本書の譯者內田魯庵氏であらう。魯庵氏は自らトルストイズムの信者にあらずといはるゝが、トルストイを研究したこと魯庵氏の如く深きもの蓋し稀であらう。此書は嘗て「學燈」誌上に連載せられたのを集め、火鞭叢書として火鞭會から發行せられたものだ。話の筋の寓言的であるのは僕等の餘り感服せぬ所であるが、其意を取て味ふれば、流石にトルストイ翁の作、人生を眼下に瞰下して忌憚なき批評を試みて居る樣な翁の面目、躍然として紙上にあらはれて來る。譯文は極めて雄健些の晦澁を見ぬ。下らぬ小說などを讀むよりもかゝる一大教訓に目を曝さんことを勸告する。(定價二十錢)

▲青年文集

大町桂月選
日高有倫堂發行

大町桂月氏が、青年文士の作中の佳なるものを選びたるものなり、添ふるに現代の名家八氏の文を以てせり。青年にして文を學ばんとするもの〻模範たるべし。(定價四十錢)

▲世界お伽噺第七十八編 地獄巡

岩谷小波編
博文館發行

▲世界お伽噺第七十九編 九番人形

仝上

前者は希臘の話にして頗る詩的なるを以て優り、後者亞剌比亞の話にして怪奇なるを以て勝れたり。兩者共に少年少女の好讀物なり。(定價各八錢)

▲ユーゴーの詩

小原無絃譯
本郷書院發行

續々西詩の飜譯を出すを以て聞えたる小原文學士の譯なり、ユーゴーの詩は彼の其他の著作の如く全じく大なり。譯詩遺憾なしといふべからざるも概して缺點少し（定價三十錢）

▲Russo- Japanese War, Japanese Official Reports

喜田又之助編纂
新橋堂發行

「ジャパン、タイムス」に載せられたる日露戰爭の公報を集めたるものなり、英文を學ばんとするものには大なる參考となるべし（定價七十五錢）

▲シルレル詩集

秋元蘆風譯
東亞堂書房發行

シルレルの詩八篇を譯したるものなり。而して八篇共何れもバラッドなるは多少慊らぬふしなきにあらねど、抒情詩の如く譯しにくからず、冥想詩の如く晦澁に陷らず、一讀多少の面白味を感じ易きをのみ取りたるは譯者の一見識といふべし。然れども譯者若しシルレルの詩風を鼓吹せんとならば今少し其選擇の範圍を弘くせられんことを望む。（定價四十錢）

▲青眼白眼

吉弘白眼著
大阪日報社發行

白眼は土佐人幸德秋水、堺枯川等と同じく○○○の門人なり今大阪にあつて新聞記者たり、眼光鋭くしてよく物を洞見す、此書は著者が見たる大阪紳士の批評にして、大阪を知らんと欲するものは此書を讀むに如くものなし、角田浩々、長田秋濤、渡邊霞亭、菊地幽芳等の序文あり、體裁は大阪出來としては上乘のもの（定價一圓）

▲繪畫について

菱田春草
横山大觀著

此書は二氏が繪畫に對する其の研究態度と意見とを發表し、其知人間に配付せしものなり、要は：輪廓線畫の到底畫として色彩畫に及ばず、而して東洋畫にも色彩畫なきにあらず、否色的印象を寫すは却つて東洋畫の長所たり、輪廓は只繪畫發達史上の殘礎と見るべし、物象の觀察いよく〳〵精緻なる今日に及んでは寧ろ一種の繫縛たり、今後研究すべきは色彩にあり、輪廓の形型を棄つるにあり、而してこれやがて日本畫の長所を發揮すべきもの也といふにあり、吾人も之に對しては別にいふところあるべし（非賣品）

前號要目

編輯錄

▲前號に豫告して置いた內で、原稿の間に合はなかつたのは露伴、日南、愛山、三叉、枯川、春葉の諸氏であつた、これは皆な次號に出る筈である

▲予の愛讀書は非常に歡迎される有樣だ、次號には愛山、竹風、鏡花、水蔭等其他數氏のが出るであらう

▲本號にある通り、次號よりは岡田博士が選者となつて普く川柳を募集し、川柳を研究する事になつた、人も知る如く三面子は非常に趣味に富んだ人で、又世の宗匠を商賣にしたり、川柳の本家爭ひをするやうな人でないから其つもりで投句して貰ひたい

▲新刊書籍の批評は今後ます〳〵精細に公平にやる積りであるから續々御寄附あらんことを希望する、中央公論編輯局宛に願ひたい

▲二百號以來頓に讀者を增加し、每月賣切れとなつて其後の注文には應ずることが出來なかつたと事務の方での話である、新年號も發賣二三日にして賣切れとなつた、編輯者は實に快く感ずるが後々の注文に應ずることが出來ないといつて事務では氣の毒がつて居る尤も二百號はまだ二三十部殘部があるさうだ

▲前號に歌と俳句を六號に組んだので投句者は不滿であつたさうだが、六號でも五號でも歌の價には少しも關係はない、編者が別に輕んじた次第でもない名家の寄稿でも都合上六號で組まぬとも限らぬ併しなるべくは五號で組むことにする

此廣告により御注文の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

東京外國語學校教授 早稲田大學講師

片山寛著

英語の手紙

((訂正再版・定價金二拾五錢・郵税二錢))

英語書翰文の世に行はるゝもの少からずと雖も概ね外國の著作を改竄せるに過ぎずして我國民に適切なるものあるなし、本書は我國の風俗事情に適應し得るやう充分なる注意を以て新に著はされたるものなり。本書は又初學者の便に供せんが爲め最も懇切に手紙の書き方心得を示したり、著者が東京外國語學校及び早稲田大學等に於ける英語教授上多年の經驗は、其修習の順序方法に於て毫も遺憾なからしめたるとを信ずるに足る

一般の注意○手紙の認め方○封筒の記し方

普通文 在宅の時間を問合はす文○同上返事○訪問を豫め知らする文○不在にて面會を得ざりし友へ送る文○紹介状○紹介せられたる人に送る文○友人を紹介する文○他郷にて世話になりたるを謝する文○友ハ來訪を求むる文○結婚祝賀の文○火事見舞の文○途上にて世話になりしを謝する文○同上返事○病氣見舞の文○死亡を知らする文○悔みの文○Dinnerの招待状○同上返事○招待を斷る文○舞踏會に人を招く文○同上返事○結婚式の案内状○園遊會に人を招く文○職業の周旋を求むる文○學生間の往復文○新年賀状○就任祝賀の文○誕生を祝する文○結婚について○故郷の父母へ學費請求の文

實務上の手紙 利子の變更を通知する文○商品の目錄を請求する文○書物の代價を問合はす文○同上返事○書籍註文の文○代價支拂請求の文○代金を送る文○代金請取の文○支拂催促状○最終の催促状○旅館へ明き間の有無を問合はす文○商品の註文を請ふ文○送品破損につき返却を報ずる文○同上返事○汽船出帆期日を問合はす文○同上返事○品物催促の文○貨物不著の問合せ状○雇人の人物を問合はす文○同上返事○取消の申込○廣告の申込○借金の申込○同上返事○大工に修繕を賴む文○洋服註文の文○送別會の通知文○寫眞の燒增を註文する文○書籍の寄贈を謝する文○書籍の有益なるを證明する文○前金切れを通知する文○缺席屆○友人の病氣を家許に知らする文

East and West
評語

これは全くオリジナルの書物で世間流に外人の著書を燒直したものではない、これだけでも有難い處へもつてきて、一般の注意、手紙の認め方、封筒の記し方といふ三項に親切な詳しい説明がしてある、あとは文例で、これが普通文と實務上の手紙とに分れ、普通文の中には火事見舞の文がある、病氣見舞の文がある、誕生を祝する文、學費請求の文がある、實務上の手紙の中には書物註文の文、代金を送る文、同請取、取消の申込、洋服註文状、寫眞燒增註文状、前金切れの通知、缺席屆など日常入用の文章は殆んど漏らさず、文範としても値があるし、讀んでみても面白い、今迄出た書簡文範の中で一番氣がきいて一番有効なるを疑はぬ

版元 東京本郷西片町十 **内外出版協會**

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋銀座四 東海堂
仝 日本橋呉服町 北隆館
仝 本郷四丁目 文明堂
仝 本郷本富士町 盛春堂

關西大賣捌所

大阪備後町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

中央公論 廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金貳拾錢
四分の一頁	一回	金貳圓五拾錢
半頁	一回	金四圓
一頁	一回	金八圓
表紙の二三四一頁	一回	金拾五圓

廣告一手取扱 神田千代田町 博報堂

中央公論 定價表

一冊	金拾五錢
六冊	金八拾五錢
十二冊	金壹圓六十五錢
郵稅共	

●但海外（清國は本邦郵便局所在地を除く）は一部郵稅六錢を要す

送金注意

一郵便爲替は受取人指定欄へ必ず弊社町名幷に社名を記し拂渡局所を**東京駒込**と指定せられたし
一郵劵代用の場合は必ず壹割增のこと
一誌代、廣告料とも總て前金にあらされは御需めに應せす
一前金切の節は帶封に朱書いたすべくに付早速拂込まれたし然らされは其號限にて發送を止むべし
一雜誌の發送を以て領收の證といたすべくに付別に領收證を望まるゝ向は返信料を添えられたし

明治三十九年一月廿七日印刷
明治三十九年二月一日發行

發行兼編輯人 武田福松
印刷人 清水金右衛門

東京市本郷區駒込西片町十番地
發行所（電話下谷九一九）反省社

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

銀製洋盃及木盃



紀念御贈與品若くは御賜賞用洋盃も亦誠實を旨とし御高需に應じ申すべく尚ほ木盃の儀は多年四方の御用達し居り品質の良好なると代價の低廉なるとは御愛顧各位の御確認證せられ候處に御座候是亦多少とも御注文被下度候

一七圓五十錢也　同徑三寸丸　同目方正味二十五匁付
一金拾圓九拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味四十匁付
一金拾參圓貳拾錢也　同徑四寸丸　同目方正味五十匁付
一金拾六圓五拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味六十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑五寸丸　同目方九十匁付

三ッ組ノ部

一金拾貳圓六拾錢也　純銀同徑二寸五分丸盃三ッ組溜塗臺付目方正味卅八匁付
一金拾七圓貳拾錢也　同徑三寸丸　同目方正味五十五匁付
一金貳拾壹圓八拾錢也　同徑三寸五分丸　同目方正味八十匁付
一金參拾壹圓也　同徑四寸丸　同目方正味百卅匁付
一金四拾圓八拾錢也　同徑四寸五分丸　同目方正味百八十匁付
一金五拾壹圓九拾錢也　同徑五寸丸　同目方正味二百卅匁付

一定紋彫刻　一個　金壹圓五拾錢
一文字彫刻　一字　金拾錢
一大字彫刻　一字　金七拾錢

其他御好に依り彫刻料迅速製作御命に應じ可申候

黄金國美術袋物類同裝飾品
貴金屬美術婦人小間物類同裝飾品
金銀時計類同附屬品類

東京市下谷區池之端仲町二十九番地

商 玉寶堂

（電話本局 特九六五 一二四四）